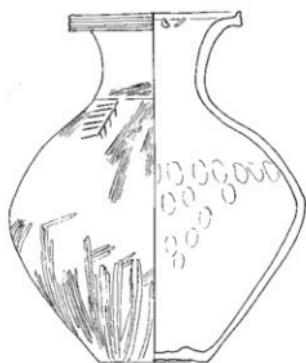


# 旧練兵場遺跡

市営西仙遊町住宅建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書



平成13年

善通寺市  
(財)元興寺文化財研究所

# 旧練兵場遺跡

市営西仙遊町住宅建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年

善通寺市  
(財)元興寺文化財研究所

## 例　言

- 1) 本書は香川県善通寺市西仙遊町に所在する旧練兵場遺跡の平成12年度における発掘調査報告書である。
- 2) 本書に使用した方位は、特に指定しない限り座標北を指し、遺跡の測量は国土調査法第VII座標系による。
- 3) 遺構の実測及び写真撮影は、篠川真一、角南聰一郎、宇田員将が行い、遺物の実測は角南のほか奈良大学大学院および学部生等の協力を得た。遺物の写真撮影は篠川が担当した。
- 4) 出土資料の自然科学分析は、(財)元興寺文化財研究所保存科学センター井上美智子が行った。
- 5) 本書の執筆は、篠川龍一、篠川、井上、角南、田部剛士が行い、分担を目次に記した。また付編に旧練兵場遺跡シンポジウム(平成12年10月15日開催)の記録を掲載した。
- 6) 本書の編集は篠川の指導のもと、篠川が担当した。

## 目　次

I.	調査経過と体制	.....(篠川・篠川)	1
II.	旧練兵場遺跡の位置と調査研究史	.....(篠川・角南)	3
III.	調査の成果		
(1)	基本層序	.....(角南)	6
(2)	検出遺構	.....(角南)	6
(3)	出土遺物	.....(土器:角南、石器:田部)	22
IV.	自然科学分析		
	旧練兵場遺跡出土上器付着顔料の分析	.....(井上)	67
V.	小　結	.....(上器:角南、石器:田部)	68
VI.	付論		
	住居跡出土ガラス小玉の意義	.....(角南)	73
	香川県下の絵画・記号土器	.....(角南)	78
	四国の匙・杓子形土製品	.....(角南)	82
	人面付分銅形土製品について	.....(角南)	88
	旧練兵場遺跡出土の磨製石包丁未製品について	.....(田部)	94
	旧練兵場遺跡出土の打製石器素材	.....(田部)	99
	「森岡虎夫」銘ガラス瓶について	.....(角南)	104

付編：旧練兵場遺跡シンポジウムの記録

## I. 調査経過と体制

### (調査に至る経過)

普通寺市街地北部の仙遊町一丁目と二丁目はそれぞれに市営住宅があり、一丁目のものは東仙遊町住宅、二丁目のものは西仙遊町住宅と呼ばれている。このうちの西仙遊町住宅は56戸の木造平屋の住居群で構成されているが、いずれも昭和32年から36年にかけて建築されたもので著しく老朽化していた。

そこで普通寺市建設経済部建築課では土地の有効利用や住居水準の向上を図るために、老朽化した公営住宅の中高層住宅への建て替えに伴う事業を平成9年度から開始した。初年度は測量と地質調査及び基本設計と共に、普通寺市教育委員会文化振興室と埋蔵文化財取扱いに関する協議を行った。

仙遊町全城には旧陣兵場遺跡と呼ばれる古代の拠点集落遺跡が広がっているため、これまでに各所で発掘調査が実施され重要な埋蔵文化財が多数確認されていることはよく知られていた。しかも近年、当該地の東に隣接する国立病院研修棟や当該地の南側で実施された普通寺市老人ホーム増築に伴う発掘調査でも住居群や土器が多く堆積した水路跡が確認されていたことから、市営住宅建設予定地に同様の遺構が存在する可能性は極めて高いと考えられた。しかも住宅建設予定地内の地質調査ではボーリング調査で得られたコアの中に弥生土器が数点含まれていた。

そこで試掘調査は行わず、平成11年度から12年度頃に埋蔵文化財発掘調査を実施することを決定し、実施設計書が完成した段階で教育委員会と具体的な調整作業を行い、駐車場用地等は調査対象範囲から除外し工事掘削により地中の遺構に影響が生じる範囲のみを調査対象範囲とした。新たに建築される住宅は鉄筋コンクリート造6階建(48戸)である。

既存の住宅23戸の除去は平成11年度に実施したが、これまでの周囲における遺構の検出面が比較的深いことが判明しており、既存の住宅除去に伴う調査は行っていない。

平成12年度の発掘調査実施に際しては、普通寺市教育委員会が事業主体である埋蔵文化財発掘調査事業や史跡有關古墳群保存整備事業と時期が重なったため、外部への委託を検討した。そして国内各地での埋蔵文化財の調査で実績があり、文化財の調査・研究および出土遺物の保存処理業務・研究等を目的として設立された利益追及を目的としない公益法人である財団法人元興寺文化財研究所にこの業務を委託することになった。

### (調査体制)

調査主体 普通寺市

建設経済部建築課

調査指導 普通寺市教育委員会

文化振興室 課長補佐 筧川龍一

調査担当 (財)元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善

所長 坪井清足

事務局長 奥渕次郎

考古学研究室長 狩川真一

同 研究員 岡本広義 佐藤圭一 角南聰一郎

同 調査員 宇田貞将 西 匡之

調査及び整理参加者（順不同）

【現場作業】

横田 保 岩倉信市 松浦光雄 大前義和 竹内岩太 川田 実 竹林 章 末武正好 秋田幸志

香川キヨミ 杉峰ヨシ子 香川信子 岡部節子 芦田ミサヲ 安藤文江 横田アキミ

六車ふみ子 矢木和子 和田悦子 片桐節子

社団法人仲善広城シルバー人材センター 藤井組 岩崎リース株式会社 さくらや

【整理作業】

武田浩子 田部剛士 内田真雄 宮本飛鳥 福谷尚子 東原真希子 小野並由美 鈴木いずみ 六車美保

清きつき

史学台文化財研究会 測点堂

なお、調査及び整理に関して次の方々からご教示、ご指導を賜った。記して感謝の意を表したい。

（順不同、敬称略）

鈴木 靖（新宿区教育委員会）

後藤理加・徳澤啓一（新宿区立新宿歴史博物館）

宇佐美哲也・秋岡礼子（新宿区遺跡調査会）

橋口定志（豊島区教育委員会）

水本和美・伊藤さやか（豊島区遺跡調査会）

三好孝一（（財）大阪府文化財調査研究センター）

中池佐和子（大谷女子大学）

深澤芳樹（奈良国立文化財研究所）

別府洋二・岸本一宏（兵庫県教育委員会）

小林利晴・河合忍（岡山県古代吉備文化財センター）

丹羽佑一（香川大学）

森格也（香川県教育委員会）

片桐孝浩・森下英治・佐藤竜馬・信里芳紀・松本和彦・乘松真也・中山尚子・陶山仁美・森澤千尋

（（財）香川県埋蔵文化財調査センター）

東 信男（丸亀市教育委員会）

角田一巳（淡路町文化財審議委員）

松本敏三（香川県立坂出高等学校）

六車恵一（日本考古学协会会员）

川合信男・石村 守（善通寺市文化財保護協会） 古市光信（三木町立三木中学校）

梅木謙・水本完児（（財）松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター）

出原恵二・久家隆芳（（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター）

山村信榮（太宰府市教育委員会） 車田華代子（前原市教育委員会）

中村真了・新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）

## II. 旧練兵場遺跡の位置と調査研究史

旧陸軍第11師団は明治29（1896）年に開設された。翌明治30（1897）年には陸軍演習のため、市街地の北側一帯の土地約14万坪が買い上げられ練兵場が開設された。

練兵場は西を弘田川、東と南を中谷川で限られた東西に長い広大な楕円形の土地である。つまり、自然の河川で囲まれたこの土地が軍用地としての条件に適していたのであろう。また、この楕円形地形の北東部には瓢箪池の他、多数の湧水地（香野辺沢・花香井湧など）が残されており、現在も農業用水等に利用されているが、これららは旧河道の名残りである。

この河川に囲まれた楕円形の自然地形内には、弥生時代以降繁栄を経た複数の集落の遺跡や遺物が高い密度で包蔵されていた。古代の人々は自然の河川に囲まれた地形を利用して生活したようである。戦後の開発に伴い研究者がこれを確認し、旧練兵場遺跡の名が付けられた。遺跡が広がる自然地形と練兵場の関係は航空写真を見れば一目瞭然である。

旧練兵場遺跡が考古学の世界で認知されたのは、六車恵一による香川県下の弥生土器の集成・編年作業の際に良好な資料として図化されたことにはじまる（六車 1956）。これ以前から練兵場付近で弥生土器が多く出土することは、地元住民にとっては周知の事実であったらしい。地元譜岐宮の宮司であった矢原高幸は、戦前より善通寺市周辺の遺跡を踏査し多くの遺跡を発見した。矢原は練兵場付近の考古資料を収集をおこない保管をしていた。この資料を六車が図化し編年資料内で紹介したようだ。つまり、旧練兵場遺跡の発見者は矢原として差し支えなかろう。

しかし、一方で本格的な実測技術を導入し図化作業に努めた六車の研究業績は高く評価できよう。この時点で六車は旧練兵場付近の集落よりもや高い位置に「壺棺」が群集して無秩序に埋設されている事実を確認している。六車は大川町大井遺跡の事例で壺内より硬玉製勾玉が出土した点、壺口縁部を打ち欠いて胸部・底部近くに穿孔があり、合口とし斜位に埋設されている点からこれを土器を転用した棺であると認識した。この卓見によって、以来旧練兵場遺跡から出土する大型壺は埋葬施設であると躊躇なく考えられるようになったと考えられる。その後、香川県下でも土器棺の出土が最も多い地域であるのが善通寺市であることを考慮すれば、六車の影響は絶大であり評価も妥当であったといえる。

また、六車は香川県出土の石包丁を検討した時、旧練兵場遺跡出土の磨製及び打製の石包丁を提示している（六車 1958）。

昭和33（1958）年10月12日、矢原高幸、尽誠學園教諭・大久保義朗によって国立病院前庭地点で発掘調査がおこなわれた（尽誠學園史学会 1959）。この調査が旧練兵場遺跡内でははじめての発掘調査である。報告によると遺物包含層は2層に区分され、上層からは占墳時代中期の須恵器・土師器が、下層からは弥生時代後期の土器が出土したとされる。

統いて香川県立善通寺第一高等学校歴史同好会によって、善通寺市域出土の弥生土器が調査された際に「旧練兵場遺跡」の名称が正式に採用された（香川県立善通寺第一高等学校歴史同好会 1965）。さらに四国農業試験場前庭付近で弥生時代前期の「壺棺」が発見されたことを伝えている。

1970年代は矢原高幸によって善通寺市域の弥生文化に関する資料がまとめられ、旧練兵場遺跡についても詳しく解説がなされている（矢原 1973、1977）。これによると国立善通寺病院前庭の弥生時代後期包含層から、ガラス玉・小玉が出土したとある。

1983年と1989年には善通寺市教育委員会が調査主体となり、旧練兵場遺跡の西端に相当する仲村庵寺の調査が行われた（笹川 1984、1989a）。白鳳～奈良時代の遺構・遺物を検出するが、弥生時代後期と占墳時代後期の遺構・遺物も発見された。統いて市教委は遺跡東端に相当する、彼ノ宗遺跡を調査した。3635m<sup>2</sup>にわたる調査面積は当遺跡において最大規模のものであり、弥生時代中期～後期の住居跡38棟のほか多数の遺構を検出した（笹川 1985）。さらに市教委は仙遊遺跡で弥生時代終末期の箱式石棺墓を調査した。この石棺の蓋石には人面線刻絵画



Fig.1 II練兵場遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25000) (森下 1994より)

が描かれていた（笛川1986a）。

1994年以降は香川県教育委員会が国立善通寺病院内、四国農業試験場内を調査し成果をあげている（森下 1994、1997、1998、西岡 1998）。

遺跡を題材とした研究は笛川龍一、森下英治によって試みられている。笛川龍一は彼ノ宗遺跡の調査成果か

ら、普通寺市付近には弥生時代後期前に住居跡が発見され、銅鏡片、土玉、ガラス玉、管玉などを用いた祭祀が執りおこなわれた可能性を示唆した（笠川 1986b）。森下英治は香川県下の弥生時代中期集落を検討する中で、旧練兵場遺跡の広がりと地形環境の復原を試みた（森下 1999）。

このように旧練兵場遺跡は戦前からの長い調査・研究の歴史があるだけでなく、香川県の弥生時代を知る上でもきわめて貴重な情報を包含している遺跡であり、今後の研究に大きな期待が寄せられる。

#### 【引用・参考文献】

- 香川県立普通寺跡　高等学校歴史同好会1985「普通寺市及び五ヶ瀬における弥生式文化的生成と展開」『文化財協会報』特別号7  
香川県文化財保護協会  
片桐季浩1996「佐田川西岸遺跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センター  
笠川龍一1984「仲村庵寺発掘調査報告（旧練兵場遺跡内）」普通寺市教育委員会  
笠川龍一1985「後ノ宗遺跡」普通寺市教育委員会  
笠川龍一1986a「仙慮追跡発掘調査報告書」普通寺市教育委員会  
笠川龍一1986b「後ノ宗遺跡の発掘調査とその問題点」『香川史学』15 香川歴史学会  
笠川龍一1989a「仲村庵寺」普通寺市教育委員会  
笠川龍一1989b「小畠野代の豊丘住居跡で確認された農耕時の祭祀について」『香川史学』18 香川歴史学会  
尽誠学園史学会1959「因文院前庭道路発掘調査概報」「西瀬史誌」1 尽誠学園史学会  
西国連盟1996「田舎兵場遺跡」香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター  
六車恵一1956「讃岐弥生式土器形成過程」『文化財協会報』特別号1 香川県文化財保護協会  
六車恵一1958「石包丁」と讃岐の初期農業』『文化財協会報』特別号3 香川県文化財保護協会  
森下英治1994「田舎兵場遺跡」 香川県教育委員会  
森下英治1997「田舎兵場遺跡」II 香川県教育委員会  
森下英治1999「田舎兵場遺跡」III 香川県教育委員会  
森下英治1999「讃岐地方における弥生時代中期聚落の機能と構造について」『古代学協会西国支部第13回大会資料「鰐戸内の弥生中期聚落」』古代学協会西国支部  
矢原幸章1973「普通寺市の古代文化」 普通寺市  
矢原幸章1977「原始・古代」『普通寺市史』1 普通寺市

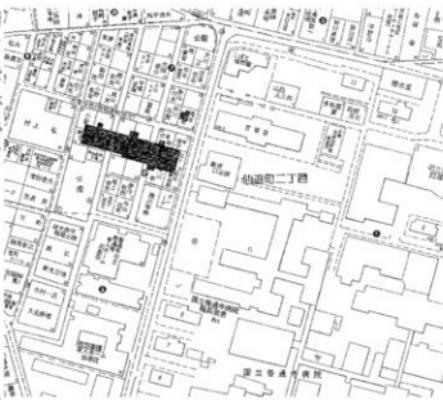


Fig.2 調査地点位置図 (黒塗部分、1/3000)

### III. 調査の成果

#### (1) 調査区の位置と基本層序

調査区は平成7（1995）年度の県教育委員会による国立善通寺病院内の調査区の西、平成5（1993）年度の県教育委員会による保育所調査区の南西に位置する（Fig.2）。調査前の調査地は市営住宅の建物を撤去した状況で、建物基礎、水道管が埋設されたままの状態であった。調査方法は、調査区北西の任意の杭を基準として調査区内に3m間隔で打ち、地区を設定し国土座標を測量し杭に数値を付した。遺物の取り上げは基本的にこの地区割りに従っておこなった。上層はほぼ水平に堆積し、基本的には6層に区分される（Fig.3）。第Ⅰ層は灰黄色粘質土層、第Ⅱ層は淡褐色粘質土層、第Ⅲ層は灰茶色粘質土層、第Ⅳ層は黒褐色粘質土層、第Ⅴ層は黄褐色シルト層、第Ⅵ層は淡青灰色粘土層である。第Ⅰ層は戦時中以降の包含層で約20cmの堆積、第Ⅱ層は戦時中前後の整地土で約15cmの堆積、第Ⅲ層は古代以降の包含層で約10cmの堆積、第Ⅳ層は弥生時代後期の包含層で約20cmの堆積、第Ⅴ層は弥生時代中期の地山で約60cmの堆積、第Ⅵ層は弥生時代前期～中期までの包含層で約20cmの堆積である。

調査区の内端の一部を試掘した結果、弥生時代の遺構は第Ⅳ層を除去した状態で検出されるであろうことが判明した。そこで重機によって表土～第Ⅲ層までを除去し、以下を人力により掘削した。

#### (2) 検出遺構（Fig.4、Pla.1-2）

調査区中央及び西端に溝が南北に流れる以外は、西側付近には遺構は希薄でその他の大部分の遺構は東側に集中する。住居跡5棟、掘立柱建物跡4棟、土坑、溝、ビットなどが検出された。遺構の時期は弥生時代と近代がある。以下、時期別に述べる。

##### 弥生時代

##### 住居跡

##### SH044（Fig.5、Pla.2～5）

調査区中央付近で検出した隅丸方形プランの竪穴で、床面で検出した柱、炉跡位置、壁溝の存在等から住居と判断した。プラン内で検出した主柱穴以外のビットは、埋土の状況から住居跡廃絶後に切り込まれたものと考えられる。主柱穴は4本であると考えられる。一辺約4.3mである。南中央部は擾乱を受けている。主柱穴からは径20cm人の河原石が出土しており、これらは柱止めとして使用されたものと考えられる。壁溝は幅約15cm、深さ約20cmで全周する。中央か跡の埋土内には土器、拳大の川原石、炭が多く含まれていた。また、埋土中からガラス玉が出土したため、埋土を全てサンプリングし水洗した。この結果、合計23個のガラス玉を発見した。

##### SH117（Fig.6、Pla.5）

調査区中央南付近で検出した円形プランの竪穴で、壁溝の存在等から住居と判断した。全体の約4分の1程度を検出した。プラン内で検出したビットはいずれも、埋土の状況から住居跡廃絶後に切り込まれたものと考えられる。壁溝は幅約20cm、深さ約10cmである。

##### SH124（Fig.6、Pla.6）

北東調査区で検出した隅丸方形プランの竪穴で、壁溝の存在等から住居と判断した。一辺約3.5m程度を検出し

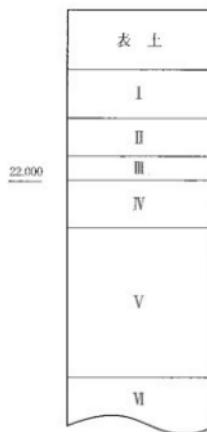


Fig.3 基本土層柱状図 (1/20)

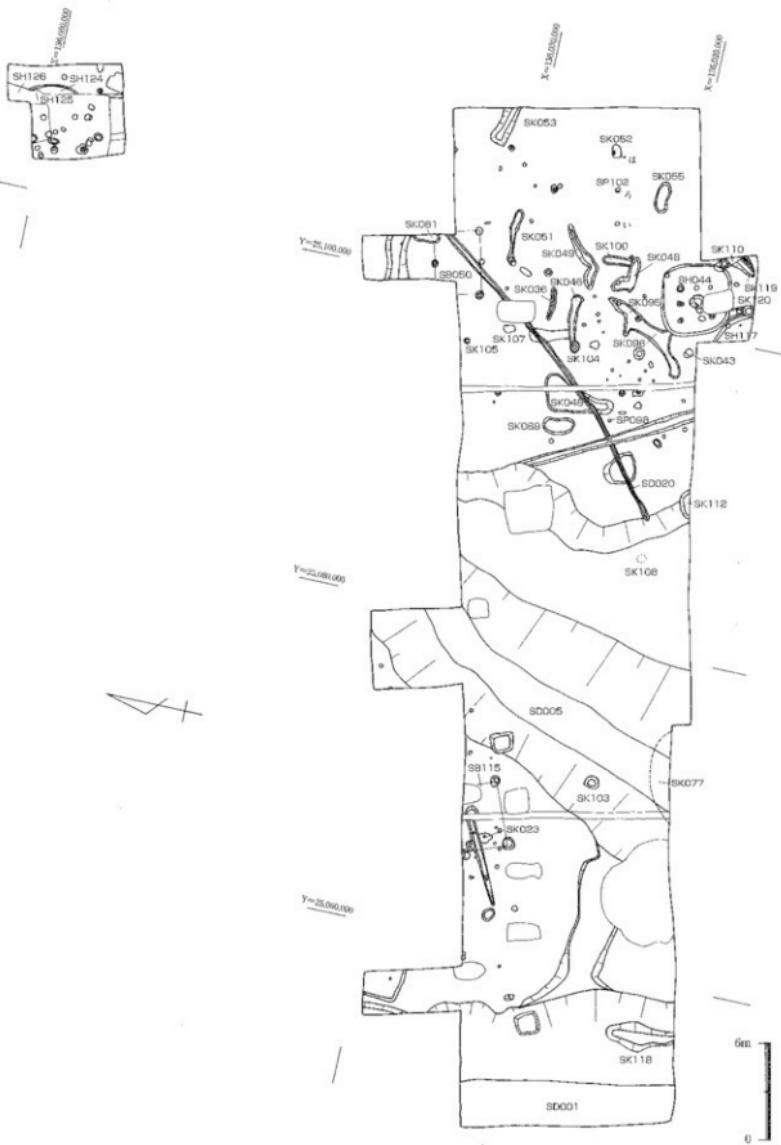


Fig.4 検出構造測図 (1/300)

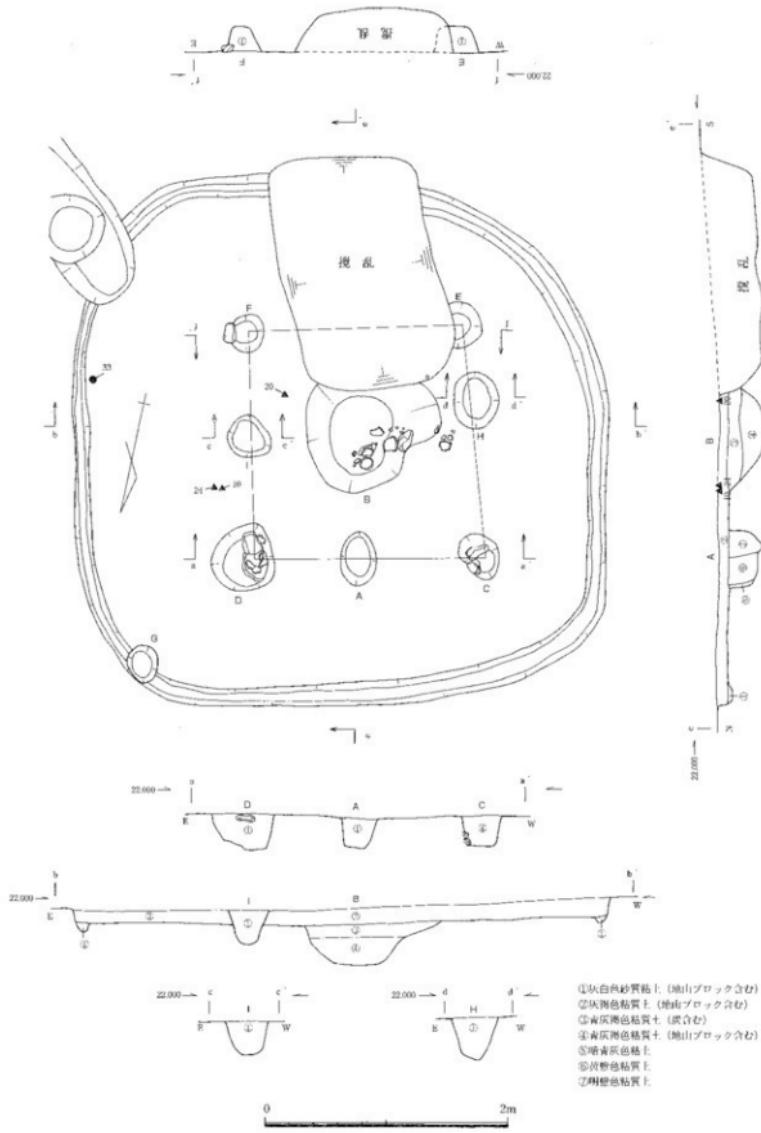


Fig.5 SH044実測図・土層観察図 (1/40)

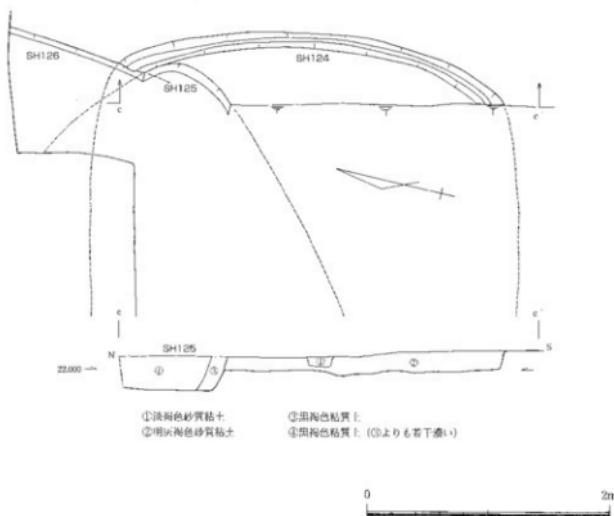
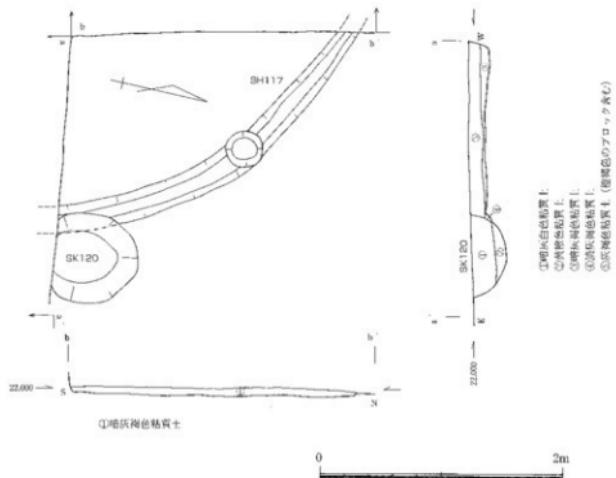


Fig.6 SH117・SH124・SH125・SH126実測図・土層観察図 (1/40)

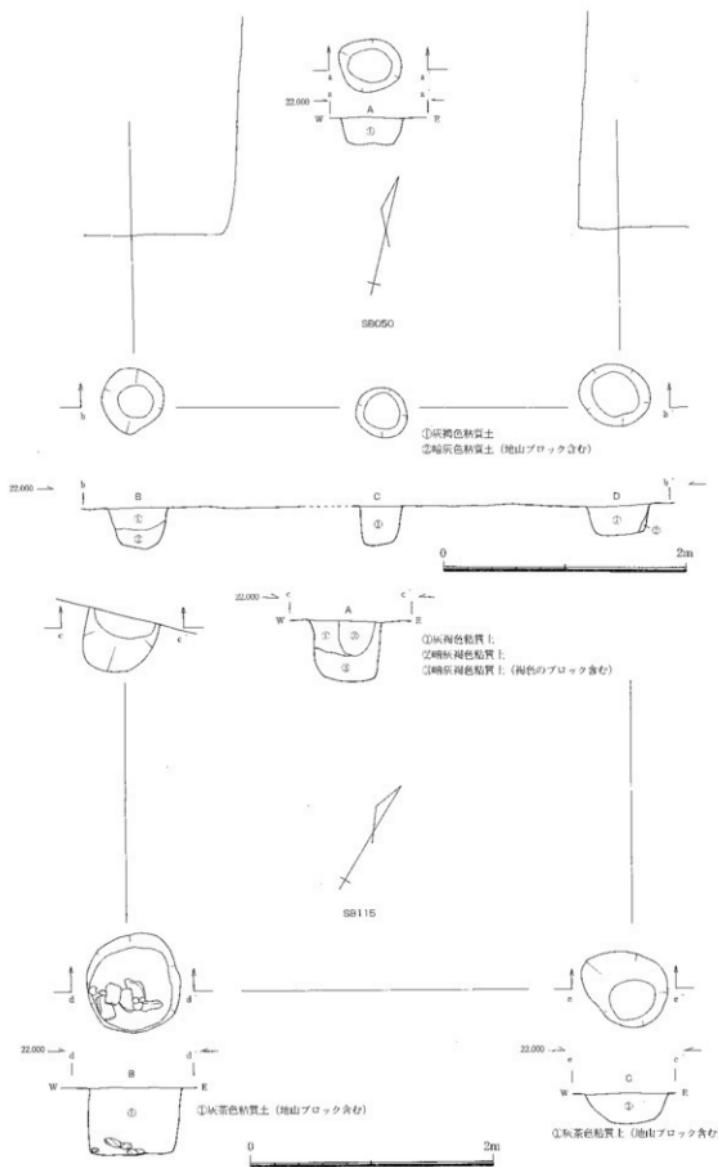


Fig.7 SB050・SB115実測図・土層根拠図 (1/40)

た。主柱穴が1本残存している。残存する柱穴の位置からみて、主柱穴は4本であったと考えられる。壁溝は幅約15cm、深さ約22cmである。SH125とSH126に切られる。また、北部分に擾乱を受けている。プラン西部分は重機掘削の際に、住居埋土を包含層と誤認し掘削した。このため大部分を削平してしまい不明である。

#### SH125 (Fig.6, Pla.6)

北東調査区で検出した竪穴で、埋土の状況等から住居と判断した。一辺が直線に伸びていることから、形態は円形ではなく隅丸方形プランであると考えられる。柱穴は検出されなかった。プラン西部分は重機掘削の際に、住居埋土を包含層と誤認し掘削した。このため大部分を削平してしまい不明である。

#### SH126 (Fig.6, Pla.6)

北東調査区で検出した隅丸方形プランの竪穴で、埋土の状況等から住居と判断した。コーナー部分を検出した。主柱穴が1本残存している。残存する柱穴の位置からみて、主柱穴は2本であったと考えられる。プラン西部分は重機掘削の際に、住居埋土を包含層と誤認し掘削した。このため大部分を削平してしまい不明である。

#### 獨立柱建物跡

##### SB050 (Fig.7)

調査区北東で検出した2間×1間の東西棟の建物。柱間は南北が2.8m、東西4mである。

##### SB115 (Fig.7-Pla.6・7)

調査区北東で検出した1間×1間の南北棟の建物。柱間は南北が2.5m、東西3.6mである。柱穴内からガラス玉が一点出土した。

#### 土坑

##### SK023

調査区西付近で検出した橢円形の土坑でSX014に一部を切られる。残存長0.75m、幅0.6m、深さ0.25mである。灰褐色粘質土が全面に堆積していた。

##### SK036

調査区東付近で検出した舟形造構で長さ2.05m、幅0.33m、深さ0.14mである。灰褐色粘質土が全面に堆積していた。住居跡壁溝が削平されたものである可能性がある。

##### SK043 (Fig.8, Pla.7)

調査区南東付近で検出した円形の土坑で、長さ0.7m、幅0.6m、深さ0.1mである。灰褐色粘質土が堆積していた。一部に柱痕跡状を呈し窪む箇所があり、柱穴である可能性もある。

##### SK045 (Fig.9, Pla.8)

調査区東付近で検出した不定形の溜まり状造構で、溝SD020に切られている。灰褐色粘質土が全面に堆積していた。住居跡が削平されたものである可能性がある。

##### SK046

調査区東付近で検出した舟形造構で深さ0.1mである。SP047とSP088に切られている。灰褐色粘質土が全面に堆積していた。住居跡壁溝が削平されたものである可能性がある。

##### SK048 (Fig.8, Pla.9)

調査区南東付近で検出した舟形造構で深さ0.23mである。灰褐色粘質土と黄褐色粘質土が堆積していた。住居跡壁溝が削平されたものである可能性がある。

##### SK049

調査区東付近で検出した舟形造構で深さ0.42mである。灰褐色粘質土と暗灰褐色シルトが堆積していた。住居跡壁溝が削平されたものである可能性がある。

##### SK051

調査区東で検出した舟形を呈する上坑で、長さ3.25m、幅0.60m、深さ0.14mである。灰褐色粘質土が堆積していた。

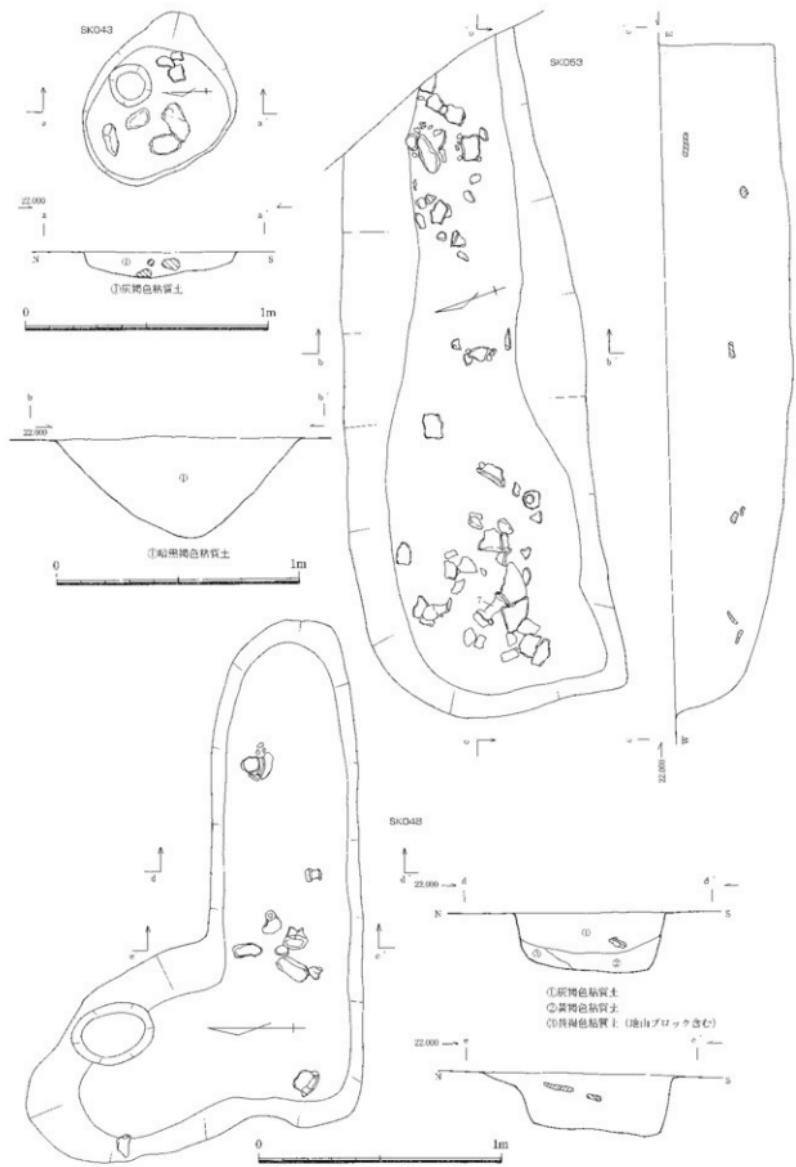


Fig.8 SK043・SK048・SK053実測図・上層観察図 (1/20, 番号は遺物番号)

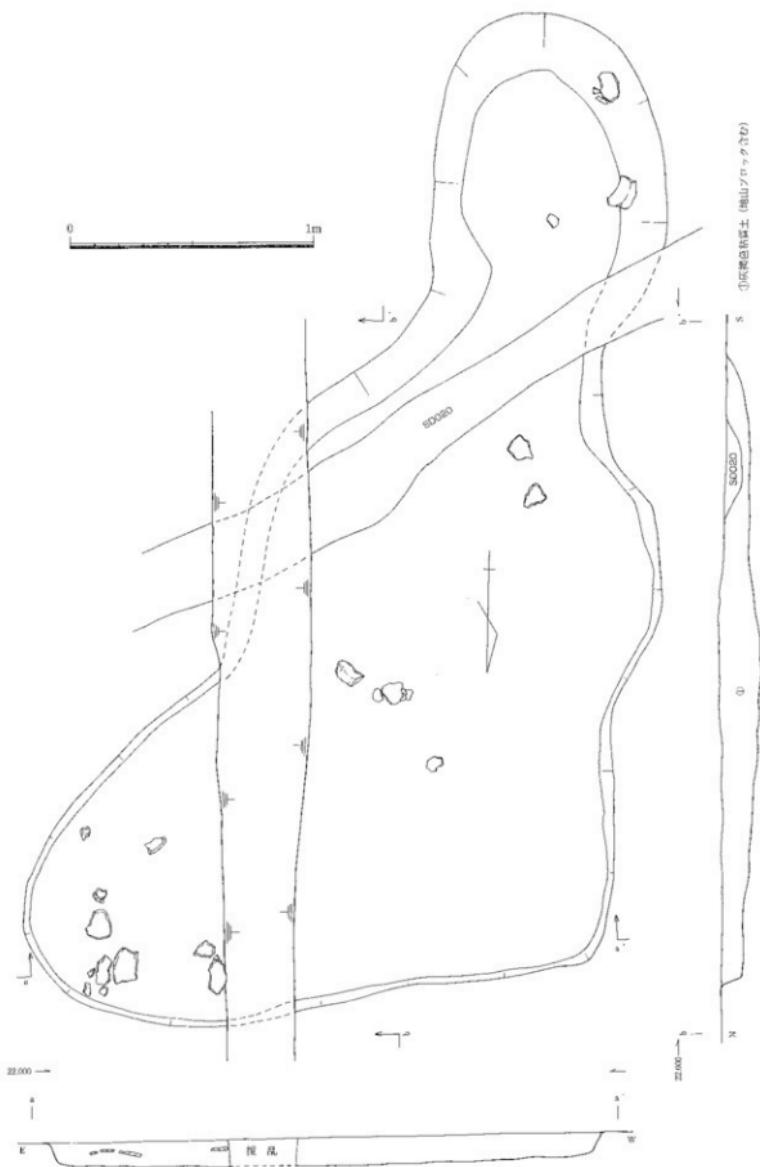


Fig.9 SK045実測図・土層観察図 (1/20)

#### SK052

調査区東付近で検出した楕円形の土坑で、長さ0.85m、幅0.65m、深さ0.18mである。暗黒褐色粘質土が堆積していた。埋土中から自然石が多く出土した。

#### SK053 (Fig.8、Pla.9)

調査区東端で検出した舟形を呈する土坑で、調査区東壁に接しており全体の形状は不明である。深さは0.41mである。断面は人工的に掘削された「V」字状を呈する。暗黒褐色粘質土が堆積しており多量の弥生土器が出土した。

#### SK055

調査区東端で検出した舟形を呈する土坑で長さ1.9m、幅0.8m、深さ0.14mである。灰褐色粘質土が堆積していた。

#### SK077 (Fig.10-11、Pla.10)

調査区西南で検出した楕円形を呈する土坑で、調査区南壁に接しているため全体の形状は不明である。溝SD005を切っており、深さ約0.45mである。黒褐色粘質土が全体に堆積しており多量の自然石と弥生土器が出土した。出土した弥生土器には壺、器台が多く、溝埋没と関係した祭祀土坑である可能性が高い。

#### SK081 (Fig.11、Pla.11)

調査区北東付近で検出した不定形の溜まり状遺構で、深さ0.1mである。調査区東壁に接しており全体の形状は不明である。淡灰褐色粘質土が全面に堆積していた。

#### SK089 (Fig.12)

調査区東付近で検出した楕円形の土坑で、長さ1.88m、幅0.92m、深さ0.1mである。灰褐色粘質土が堆積していた。埋土中から弥生土器甕が出土した。

#### SK095

調査区南東付近で検出した不定形の溜まり状遺構で、土坑SK096を切る。深さ約0.12mである。灰褐色粘質土が全面に堆積していた。住居跡壁溝が削平された残穴である可能性がある。

#### SK096 (Pla.11)

調査区南東付近で検出した不定形の溜まり状遺構で、住居跡SH044及び土坑SK095に切られ、深さ約0.06mである。灰褐色粘質土が全面に堆積していた。住居跡壁溝が削平された残穴である可能性がある。

#### SK100

調査区東で検出した舟形を呈する土坑で、土坑SK048に切られる。深さ約0.17mである。灰褐色粘質土が堆積していた。

#### SK103 (Fig.12、Pla.12)

調査区西南付近で検出した楕円形の土坑で、長さ0.95m、幅0.98m、深さ0.1mである。溝SD005埋土上の暗黒褐色粘質土を除去した段階で、溝SD005の西岸で検出した。青灰褐色粘質砂層が堆積していた。埋土中からは焼土塊が、散乱した状態で多く出土した。

#### SK104 (Fig.12、Pla.12-13)

調査区東で検出した舟形を呈する土坑で、溝SD020と土坑SK046に切られ、長さ2.42m、幅0.68m、深さ0.06mで、灰褐色粘質土が堆積していた。埋土中から弥生土器、焼土塊、炭化物、ガラス玉1点が出土した。

#### SK105 (Fig.13、Pla.13)

調査区北東付近で検出した円形の土坑で、直径0.4m、短径0.35m、深さ0.15mである。灰褐色粘質土が堆積していた。埋土中から焼土塊が出土した。

#### SK107

調査区北東付近で検出した不定形の溜まり状遺構で、長さ0.95mである。淡灰褐色粘質土が全面に堆積していた。



Fig.10 SK077実測図 (1/10、番号は遺物番号)

SK108 (Fig.13, Pla.14)

調査区中央付近で満SD005黒褐色粘質土層除去後に検出した円形土坑で、直径0.35mである。中心に弥生土器

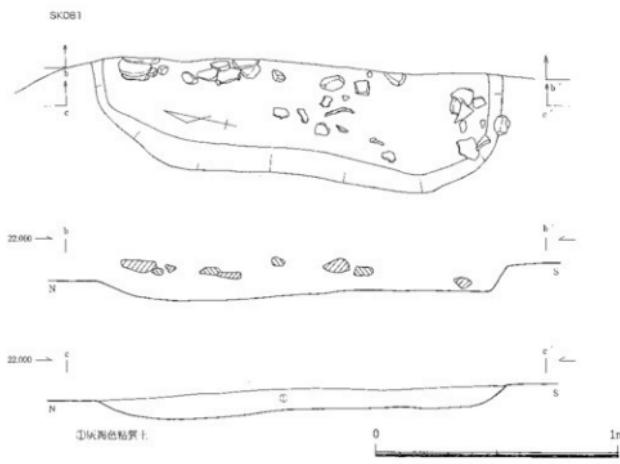
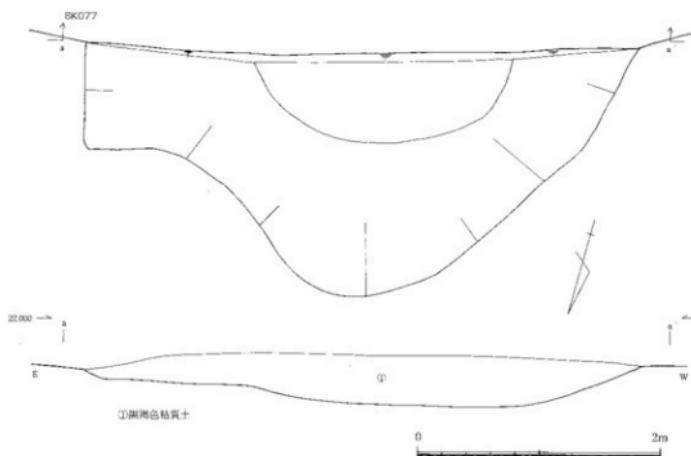


Fig.11 SK077・SK081実測図・土層観察図 (1/20・1/40)

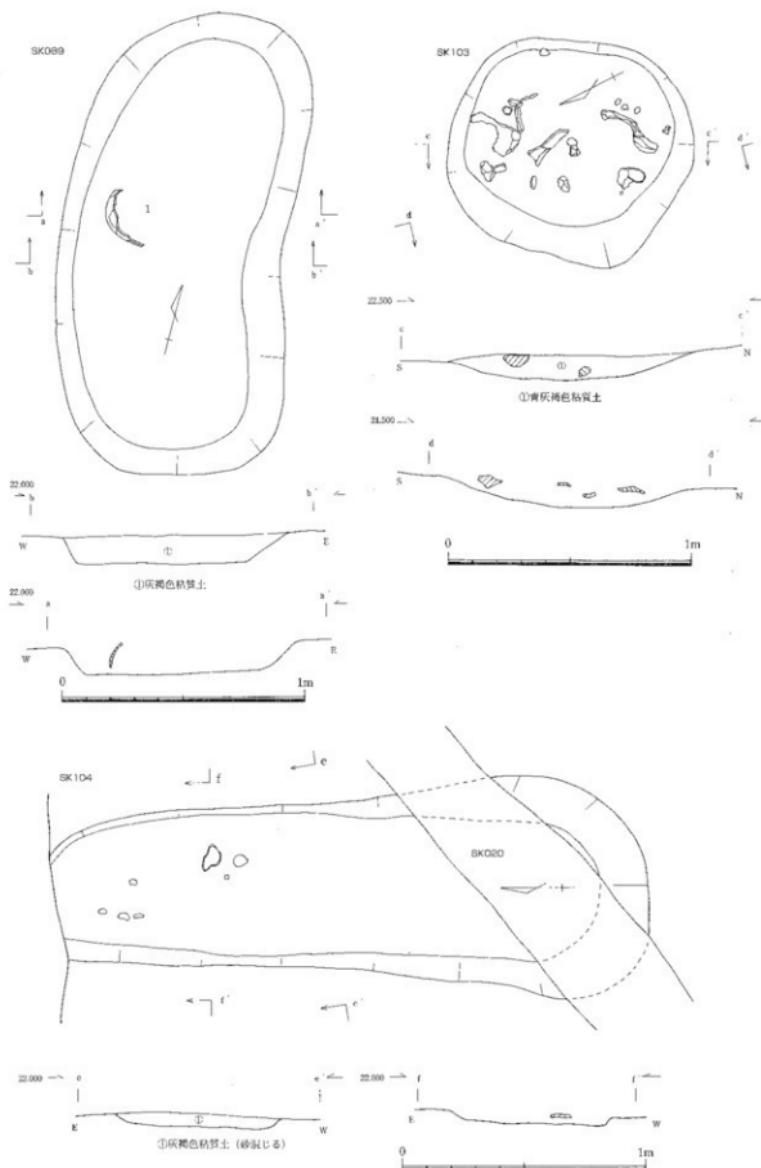


Fig.12 SK089・SK103・SK104実測図・土層概察図 (1/20)

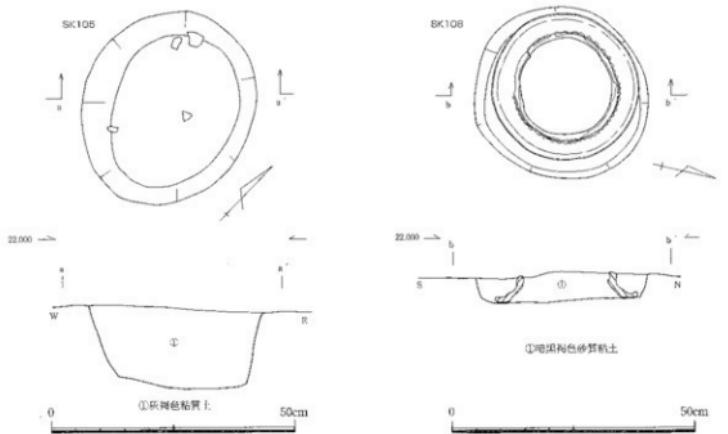


Fig.13 SK105・SK108・SK112実測図・土層観察図（番号は遺物番号）

広口壺口部が口縁部を下に据えられており、暗黒褐色砂質粘土が堆積していた。偶然このような形になったのではなく、意図的に口部のみを打ち欠いて土坑内に据えたものと考えられ、何らかの施設であることが想定される。

SK110 (Pla.14)

調査区南東縁で検出した舟形を呈する土坑で、調査区東壁に接しているため全体の形状は不明である。住居跡SH044及び土坑SK119を切っている。深さ約0.13mである。灰褐色粘質土が堆積していた。

#### SK112 (Fig.13, Pla.15)

調査区中央南付近で検出した不定形の溜まり状遺構で、深さ0.32mである。調査区南壁に接しており全体の形状は不明である。淡灰褐色粘質土が全面に堆積していた。

#### SK116

調査区中央で検出した梢円形の土坑で、溝SD020に切られる。長軸2m、短軸1.9m、深さ0.12mである。灰褐色砂質土が堆積していた。

#### SK118

調査区西で溝SD001黒褐色層除去後に検出した舟形を呈する上坑で、調査区南壁に接し長さ4.2m、幅0.85m、深さ0.15mである。青灰色粘質土が堆積していた。

#### SK119

調査区南東縁で検出した舟形を呈する土坑で、調査区東壁に接しているため全体の形状は不明である。土坑SK110に切られており、深さ約0.13mである。灰褐色粘質土が堆積していた。

#### SK120

調査区南東縁で検出した舟形を呈する土坑で、調査区南壁に接しているため全体の形状は不明である。住居跡SH117を切っており、深さ約0.5mである。淡灰色粘質土と淡黄灰色粘質土が堆積していた。

#### 溝

##### SD001 (Fig.14, Pla.15~17)

調査区西端で検出した自然流路で、南から北へと走り、長さ13.4m、幅8m、深さ1.5mである。西部分は西壁と接しているため、実際の幅は不明である。埋土は下層から灰白色砂層、黒灰色粘質土、暗黒褐色粘質土上、黒褐色粘質土の順に堆積していた。上層の黒褐色粘質土層には多量の遺物が含まれた状態であった。遺物中にはほぼ完形の土器も含まれており、溝底絶後にこの場所が一気に整地された結果ではないかと考えられる。溝の堆積層の更に下層には拳大の礫を多く含む灰白色砂礫層が堆積しており、灰白色砂層は溝形成時に灰白色砂礫層を削り出して堆積したものと考えられる。中央部付近で溝SD005と合流する支流が認められた。この部分は幅1.20m、深さ0.1mで暗黒褐色粘質土が堆積していた。

##### SD005 (Fig.14, Pla.17~20)

調査区中央付近で検出した自然流路で、長さ約23m、幅約13.4m、深さ約1mである。溝幅は最終埋没時には23m前後になる。溝は南から北へと走る。西部分は西壁と接しており、実際の幅は不明である。埋土は下層から灰白色粘質土層、黒灰色粘質土、暗黒褐色粘質土、黒褐色粘質土の順に堆積していた。上層の黒褐色粘質土層中には多量の遺物が含まれた状態であった。溝SD001同様に遺物中にはほぼ完形の土器も含まれており、溝底絶後にこの場所が一気に整地された結果ではないかと考えられる。溝の堆積下層の更に下層には淡青灰色粘質土層の堆積が認められ弥生時代前期前半の土器が出土した。淡青灰色粘質土層は弥生時代中期段階の地山と考えられる黄褐色シルトの下層にも連続して認められ、弥生時代前期前半の遺物を包含していることを確認した。淡青灰色粘土層の更に下層には、拳大の礫を多く含む灰白色砂礫層が堆積しており遺物は確認できなかった。これらのことから弥生時代前期前半以降に淡青灰色粘土が堆積し、続いて弥生時代中期中葉段階以前に黄褐色シルトが堆積し、中期中葉段階に溝SD005が形成された段階に黄褐色シルトが削平され、淡青灰色粘質土層の上に溝の堆積が開始されたと考えられる。

また、調査区東張張部でも同一の溝を検出したが、溝底後に再掘削された状態が認められ、再掘削部分には上層に灰褐色粘質土が、下層には淡灰褐色粘質土が堆積していた。

##### SD020 (Fig.14)

調査区東付近で検出した北東から南西に走る溝で、長さ21.4m、幅0.4m、深さ0.14mである。黒褐色粘質土が

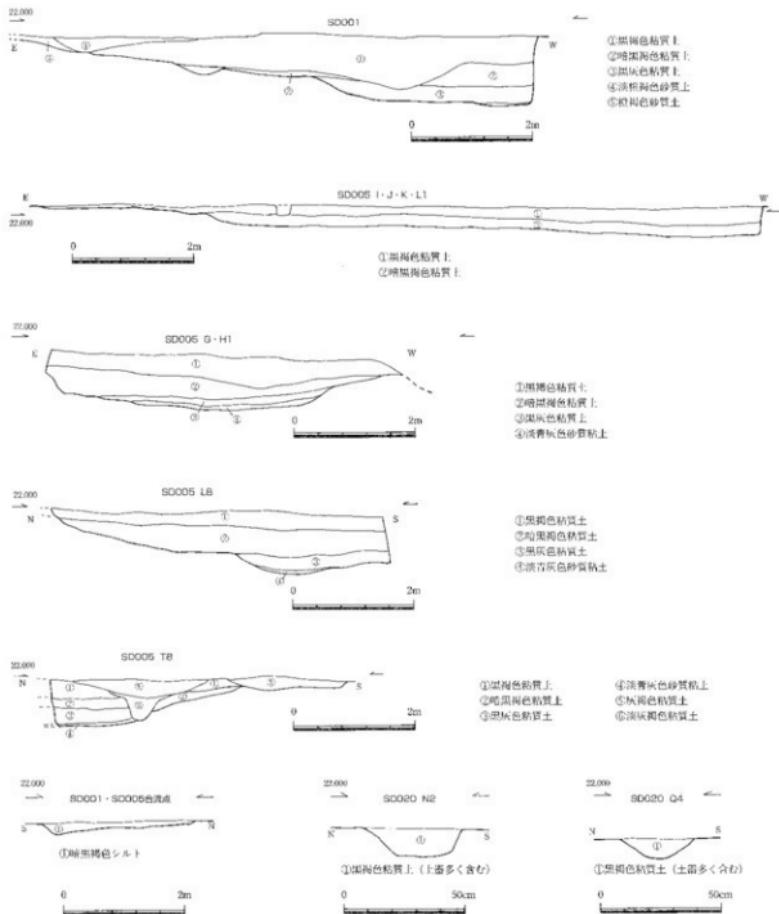


Fig.14 SD001・SD005・SD2020土壌観察図

堆積していた。溝SD005の上層と同様の埋土で、溝SD005に暗黒褐色粘質土層が堆積した段階でこの溝は掘削され、ほぼ同時に埋没したと考えられる。

#### その他の遺構

SP098

調査区中央付近で検出した小穴で、長軸0.25m、短軸0.20mの楕円形を呈する。灰褐色粘質土が全面に堆積していた。

SP102

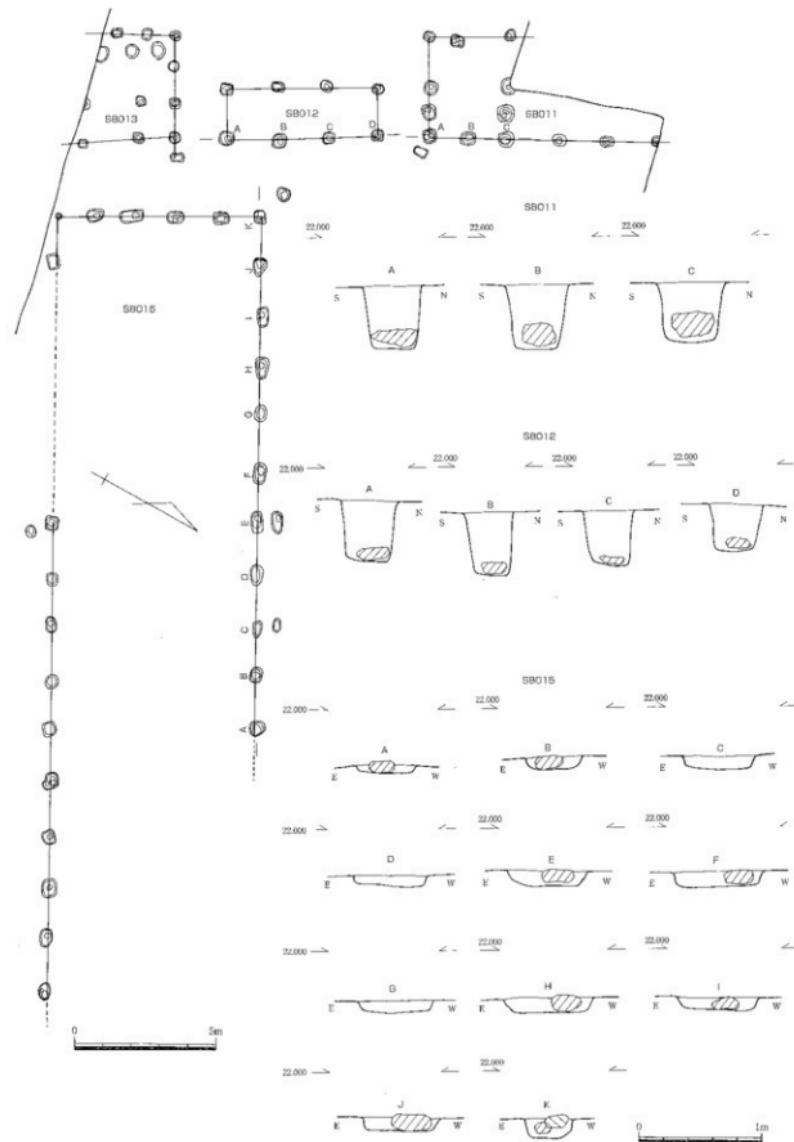


Fig.15 SB011・SB012・SB013・SB015実測図 (1/10)

調査区南東で検出した「い」・「ろ」・「は」三つの小穴で、当初2間の建物を想定したが、穴の並びが悪く積極的に建物と評価できないと考えここでは別に扱った。

#### 近代

##### 掘立柱建物跡

SB011 (Fig.15, Pla.21)

調査区中央付近で検出した4間×5間の南北棟の建物。柱間は南北が1.4m、東西0.4mである。柱穴にはそれぞれ川原石が敷かれており建物の礎盤と考えられる。建物の方位・規模などから、明治37（1904）年に開設された普通寺予備病院分院第二分院の病棟の廊下であると考えられる。普通寺予備病院分院第二分院はその後、明治39（1906）年には閉鎖されており、短期間に建物は取り壊されたらしい。今回検出された遺構は文献資料で不明な点が多い普通寺予備病院分院第二分院の位置を認知したことになる。

SB012 (Fig.15, Pla.21)

調査区中央付近で検出した3間×1間の南北棟の建物。柱間は南北・東西1.6mである。柱穴にはそれぞれ川原石が敷かれており建物の礎盤と考えられる。建物の方位・規模などから、明治37（1904）年に開設された普通寺予備病院分院第二分院の病棟の廊下であると考えられる。

SB013 (Fig.15, Pla.22)

調査区中央付近で検出した3間×4間の南北棟の建物。柱間は南北が1.2m、東西1.4mである。柱穴にはそれぞれ川原石が敷かれており建物の礎盤と考えられる。建物の方位・規模などから、明治37（1904）年に開設された普通寺予備病院分院第二分院の病棟の廊下であると考えられる。

SB015 (Fig.15, Pla.23)

調査区東で検出した15間×5間の東西棟の建物。柱間は南北・東西1.6mである。柱穴にはそれぞれ川原石が敷かれており建物の礎盤と考えられる。建物の方位・規模などから、明治37（1904）年に開設された普通寺予備病院分院第二分院の病棟であると考えられる。

#### 溝

##### SD002

調査区西端付近で検出した溝状遺構で、幅1.20m、深さ0.4mである。表土直下から堀り込まれており、表土直下では復元幅2.20m、復元深1mとなる。埋土は上から下へ黄褐色土層（黒褐色粘質土ブロックを含む）、灰黄色砂層、黒褐色砂層の順に堆積していた。下二層は水成層で、水の流れた痕跡が認められる。溝の形状、方向などから、II陸軍病院病棟の基礎コンクリートを撤去した後が溝状になったものと考えられる。

##### その他の遺構

SX014 (Pla.22)

調査区北で検出した石匣遺構で、溝部と石匣部からなる。溝部は長さ17.4m、幅0.4m、深さ0.1mで、花崗岩の削石によって構築された右囲部は一辺3.1mの正方形を呈する。石匣部内からはガラス片、獣骨、貝などが出土した。水溜として使用されていたと考えられる。

#### （3）出土遺物

##### 弥生時代

##### 住居跡

SH044出土遺物 (Fig.16, Pla.25)

##### 弥生土器

壺（1～4） 1・2は口縁部の細片で、いずれも口縁部は矧く外反し口縁部外面に回線文を施す。1は口縁部外面に刻目をし、2は表面の磨滅が激しいが錐削文を描く。1は柱穴Hよりの出土。2は覆土中より出土。3は広口壺で口径8.6cm、高さ16.5cm、底径4.2cmである。胴部上半に範状工具を押圧し爪形文状を呈し、一種の記号文と考えられる。

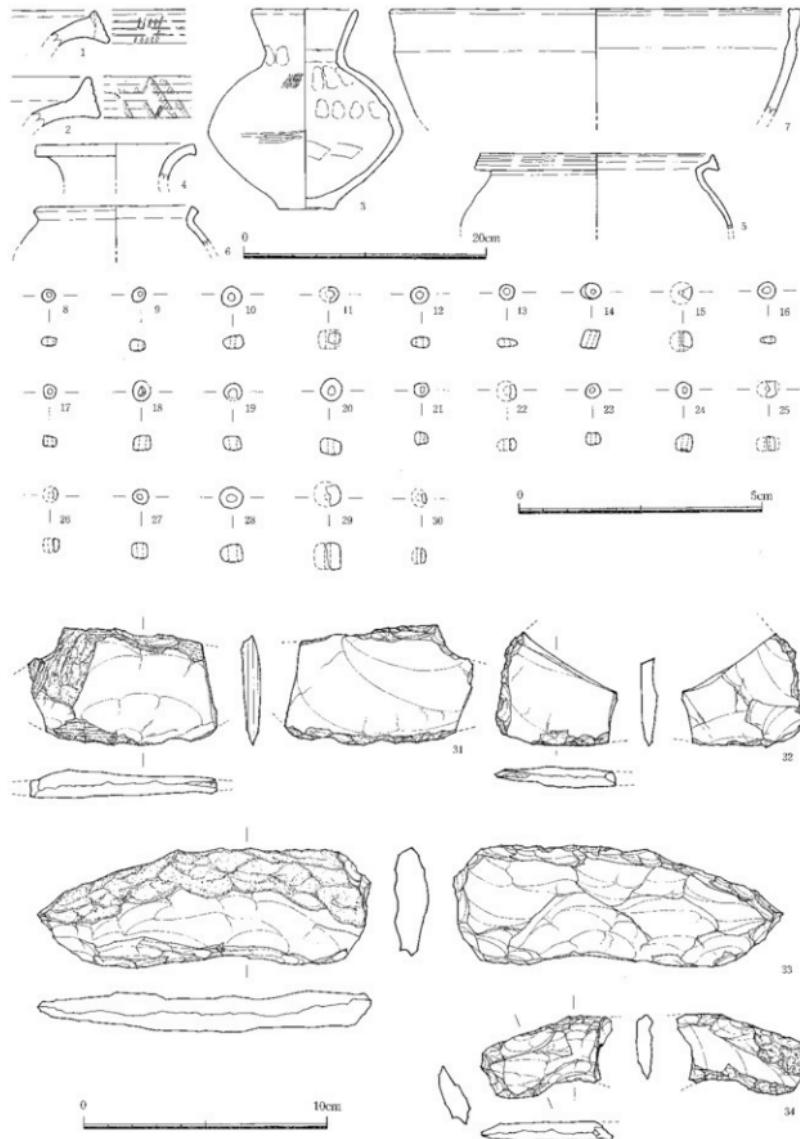


Fig.16 SH044出土上器・ガラス小玉・石器実測図(土器1/4、小玉1/1、石器1/2)

えられる。また外面はヘラミガキをする。柱穴D内からの出土。4は口縁部のみ残存し口径12.9cmである。柱穴Dよりの出土。

甕 (5) 口径19cmで口縁部外面に四条の凹線を施し、胴部外面に赤色顔料を塗布する。覆土中より出土。

鉢 (6・7) 6は口径12.2cmで口縁部端部がやや外半する。柱穴Dよりの出土。7は口縁部のみ残存するが、おそらく台付鉢になると思われる。口径23.6cm。覆土中より出土。

赤色顔料塗布土器 (Fig.75) 細片のため器種の特定はできない。柱穴G出土。

ガラス製品

小玉 (8~30) 直径2.8~5.9mm、内孔径1.0~2.0mm、厚さ1.7~5.3mmである。孔は錐状工具によって穿孔されているが、穿孔の方向はいずれも明確ではない。色調は12、15、16、19、21、23、25がコバルトブルーを呈し、それ以外はスカイブルーである。特に27は1.0mm大以下の気泡が多く観察される。いずれも覆土中より出土。

獸骨 柱穴Dより出土した。遺存状況が悪いため種別、部位は不明である。

石器

スクレイパー (31・32) 31は長さ7.7cm、幅4.9cm、厚さ1.2cm、重量46.7gであり、サスカイト製のスクレイパーである。背部には若干刃ツブシ調整が施され、刃部は片面調整により直線状に作り出されている。また、刃部の一部から側縁、背部にかけて自然面が残存する。R0区出土。32は長さ4.9cm、幅4.5cm、厚さ0.9cm、重量16.9gであり、サスカイト製のスクレイパーである。欠損により詳細は不明であるが、刃部は簡単な調整が両面より施され、ほぼ直線状に刃部が作り出されている。T0区出土。

石鎌 (33・34) 33は長さ13.6cm、幅5.0cm、厚さ1.7cm、重量120.1gである。輝緑凝灰岩製の大型石鎌であり、先端がすばり、全体的に湾曲している。背部には自然面を残し、刃部は片面調整により内湾する。T0区出土。34は長さ5.4cm、幅3.4cm、厚さ0.8cm、重量15.9gである。サスカイト製の石鎌であり、基部を欠損する。背部は刃ツブシ調整を施し、先端に自然面を残す。刃部は両面調整により内湾する。R1区出土。

なお、断面内の斜線は石の節理を示す。以下、これに従う。

獨立柱建物跡

SB015出土遺物 (Fig.17, Pla.26)

石器

スクレイパー (1) 長さ4.4cm、幅3.0cm、厚さ0.8cm、重量9.0gであり、サスカイト製のスクレイパーである。欠損により全体の形状などは不明であるが、刃部は片面調整によりやや外湾状に作り出されている。SB015は善通寺予備病院分院第二分院の病棟だと考えられ、その他のピットからは石器などは一切出土しておらず、混入品の可能性が高い。M3区出土。

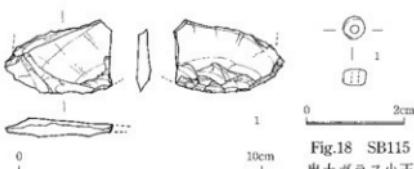


Fig.17 SB015出土石器実測図 (1/2)

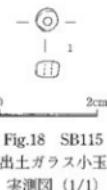


Fig.18 SB115  
出土ガラス小玉  
実測図 (1/1)

SB115出土遺物 (Fig.18, Pla.25)

ガラス製品

小玉 (1) 直径4mm、内孔径1.9mm、厚さ3.6mmである。孔は錐状工具によって穿孔されているが、穿孔の方向は明確ではない。色調はスカイブルーを呈する。柱穴Aより出土。

土坑

SK023出土遺物 (Fig.19, Pla.26)

石器

石鎌 (1) 長さ3.7cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重量2.5gである。サスカイト製の平基式石鎌で、ほぼ左右対称形である。素材の周辺から簡単な調整を加えただけのつくりであり、両面とも素材面を大きく残し、断面形態が扁平な六角形を呈す。G5区出土。

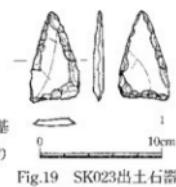


Fig.19 SK023出土石器  
実測図 (1/2)

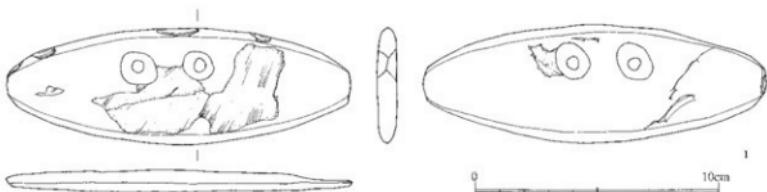


Fig.20 SK036出土石器実測図 (1/2)

SK036出土遺物 (Fig.20, Pla.26)

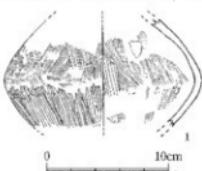
#### 石器

磨製石庖丁 (1) 長さ14.1cm、幅4.9cm、厚さ0.9cm、重量81.9gである。粘板岩製の磨製石庖丁であり、平面形は楕円形から杏仁形の中間形態を呈している。ほぼ中央上端に2ヶ所、内孔径0.6cm、外孔径1.1~1.5cmの両面穿孔が施されている。また、外孔径は正円形ではなく、刃部に対し左上方向に張り出し、おそらく使用に伴って形成される紐擦れ痕だと考えられる。R4区出土。

SK043出土遺物 (Fig.21, Pla.26)

#### 弥生土器

壺 (1) 脊部片のみ残存する。算盤玉状を呈し、内面はハケ後ナデ調整をし、胴部上半はハケ調整、下半部はハケ後ミガキを施す。



SK045出土遺物 (Fig.22-23, Pla.26)

#### 弥生土器

壺 (1) 口径16.2cmで、口縁部外面には凹線文を施す。

Fig.21 SK043出土土器  
実測図 (1/4)

甌 (4) 頸部は「く」字状に屈曲し、胴部外面はハケ後ナデ調整する。

高坏 (3) 杯部片で、口径23.8cmで口縁部外面は凹線文を施し、内外面とも縦方向に精緻なヘラミガキをする。

鉢 (2) 台付鉢の脚部で、外面は縦方向の精緻なミガキを施す。胴部と脚部は一体造りの後凹盤充填される。

#### 石器

打製石庖丁 (5) 長さ4.6cm、幅3.2cm、厚さ1.0cm、重量12.2gであり、サヌカイト製の打製石庖丁である。欠損により全体の形状は不明であるが、刃部は両面調整により直線状に作り出されている。また、石材の節理方向と素材剥片の剥離方向が平行することから、節理方向に沿って剥離していたことが窺える。P4区出土。

石鎌 (6) 長さ2.6cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重量1.2gであり、サヌカイト製の平基式石鎌である。両面ともに素材面を残す。P3区出土。

スクレイバー (7) 長さ9.1cm、幅6.0cm、厚さ1.5cm、重量89.8gであり、サヌカイト製のスクレイバーである。背部は折れ面を利用しているが、折れ面には調整を加えた際のツブレ痕が顕著に残っている。刃部は両面から簡単な調整を加え直線状に作り出しているが、階段状剥離が激しい。

P4区出土。

被熱痕のある自然石 (8) 長さ4.3cm、幅2.1cm、厚さ1.6cm、重量19.5gである。チャート製の被熱痕のある自然石であり、左図側のみが黒色に変色している。P3区出土。

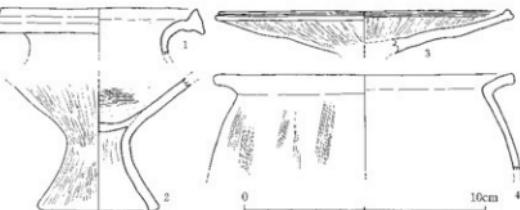


Fig.22 SK045出土土器実測図 (1/4)

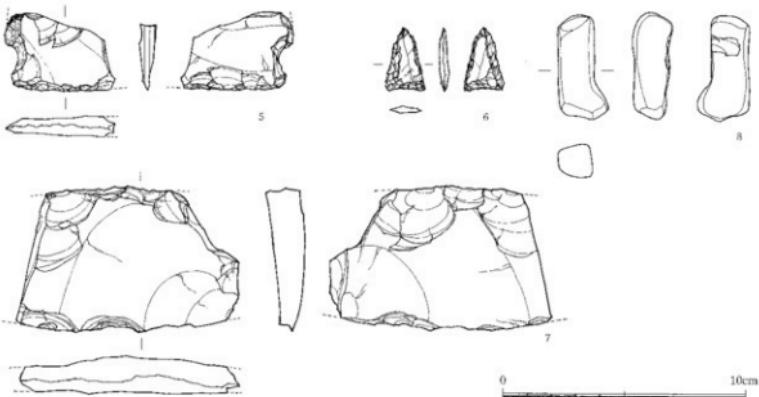


Fig.23 SK045出土石器実測図 (1/2)

#### 弥生土器

壺 (1・2) 1は長頸壺で、口径15.2cmで外面ハケ調整し内面ナデ調整する。2は口径28.9cmで、口縁部外面に二条の四線を二個一単位の竹管文を施す。

鉢 (3) 低脚が付くタイプである。口縁部を欠き、胴部外面はハケ調整し、内面はナデ調整する。底径5.6cmである。

支脚 (4・5) いずれも脚部のみ残存し、粗い造りである。器面全体をナデ調整する。底径は4は8.8cm、5は9.6cmである。4の端部はやや内傾し受口状を呈する。

#### SK049出土遺物 (Fig.25, Pla.27)

#### 弥生土器

高环 (1) 基部片で、外面は横描文を施し、縫部には縦方向に斜格子文を描く。

#### SK051出土遺物 (Fig.26, Pla.27)

#### 弥生土器

甕 (2) 底部のみの破片で、外面はハケ後ナデ調整する。底径10.1cmである。

鉢 (1) 鉢としたが甕の可能性もある。底部はやや窪み底を呈する、表面はナデ調整する。底径5.7cmである。

#### SK053出土遺物 (Fig.27・28, Pla.28)

#### 弥生土器

壺 (1・2) 1は口径17.4cmで、口縁部外面に形態化した四線を施す。2は口径23.4cmで、口縁端部は内傾し口縁部外面に五条の四線を施す。

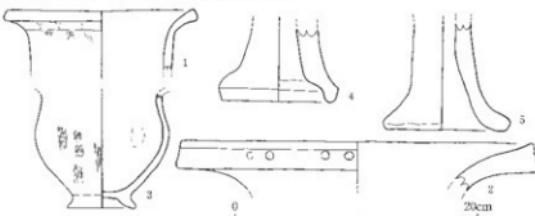


Fig.24 SK048出土土器実測図 (1/4)

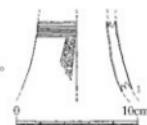


Fig.25 SK049出土土器実測図 (1/4)

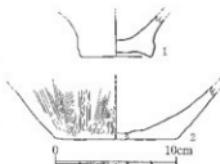


Fig.26 SK051出土土器実測図 (1/4)

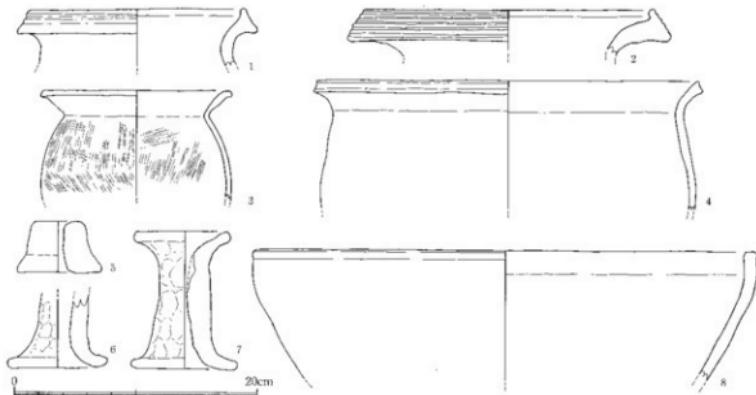


Fig.27 SK053出土土器実測図 (1/4)

甕 (3・4) 3の頸部は「く」字状に屈曲し、内外面ともにハケ後ナデ調整し口径15.2cmである。4は器面調整は不明で、口径31.2cmである。

鉢 (8) 口径40.6cmで、口縁部は垂直に立ち上がり、胸部外面はナデ調整を施す。

支脚 (5~7) いずれも粗い造りで、器面全体をナデ調整し6・7の外面には顯著に指頭圧痕を残す。5は完形で、口径3.7cm、器高4.2cm、底径6.4cmである。6は底径6.9cmである。7は口径7.1cm、器高11.3cm、底径7.8cmである。

土製品

土玉 (9) 穿孔はされていないタイプで、表面はナデ調整され直徑2.6cmである。

SK055出土遺物 (Fig.29, Pla.27)

弥生土器

高壺 (1) 脚部片で、基部外面は横方向に櫛描文を施し、裾部には縦方向に櫛描文を描き、三個・単位の透孔を穿つ。裾部端部外面には三条の凹線を施す。底径12.9cmである。

SK077出土遺物 (Fig.30・31, Pla.29・30)

弥生土器

壺 (1~9) 1は長頸壺で、口径16.3cm、頸部外面は細かなミガキを施し内面をナデ調整する。2は広口壺で、口径16cm、外面はハケ後ナデ調整し、頸部外面に列点文を施す。3は口径11cmで、胸部が球形を呈する。4は長頸壺で、頸部外面に凹線文を施し、内面はハケ後ナデ調整し指頭圧痕を残す。5は頸部片で、外面に一条の突帯を貼り付ける。6は口頸部片で、口径24cm、口縁端部に刻目列点を四本一単位で施し、内面はハケ後ナデ調整をする。7は口縁部片で、口縁端部はやや外半し、口縁部外面に鋼錆文を施す。口径29cmである。8は口縁部が垂下するタイプの広口壺で、形骸化した凹線文をした上に二個・単位の円形浮文を施す。9は底部で、全体をナデ調整をする。底径9.8cmである。

甕 (10) 頸部は「く」字状に屈曲し、口縁端部はやや垂下する。胸部外面はハケ後ナデ調整し、口径15.6cmである。

鉢 (11~14) 11は底部片で、脚部外面はハケ調整する。12の底部片底部は窪み底状を呈し、脚部外面はハケ

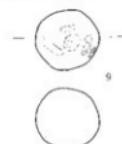


Fig.28 SK053出土土玉  
実測図 (1/2)

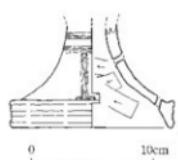


Fig.29 SK055出土土器  
実測図 (1/4)

0

5cm

0 10cm

0

5cm

0

10cm

0

5cm

0

10cm

0

5cm

0

10cm

0

5cm

0

10cm

0

5cm

0

10cm

0

5cm

0

10cm

0

5cm

0

10cm

0

5cm

0

10cm

27

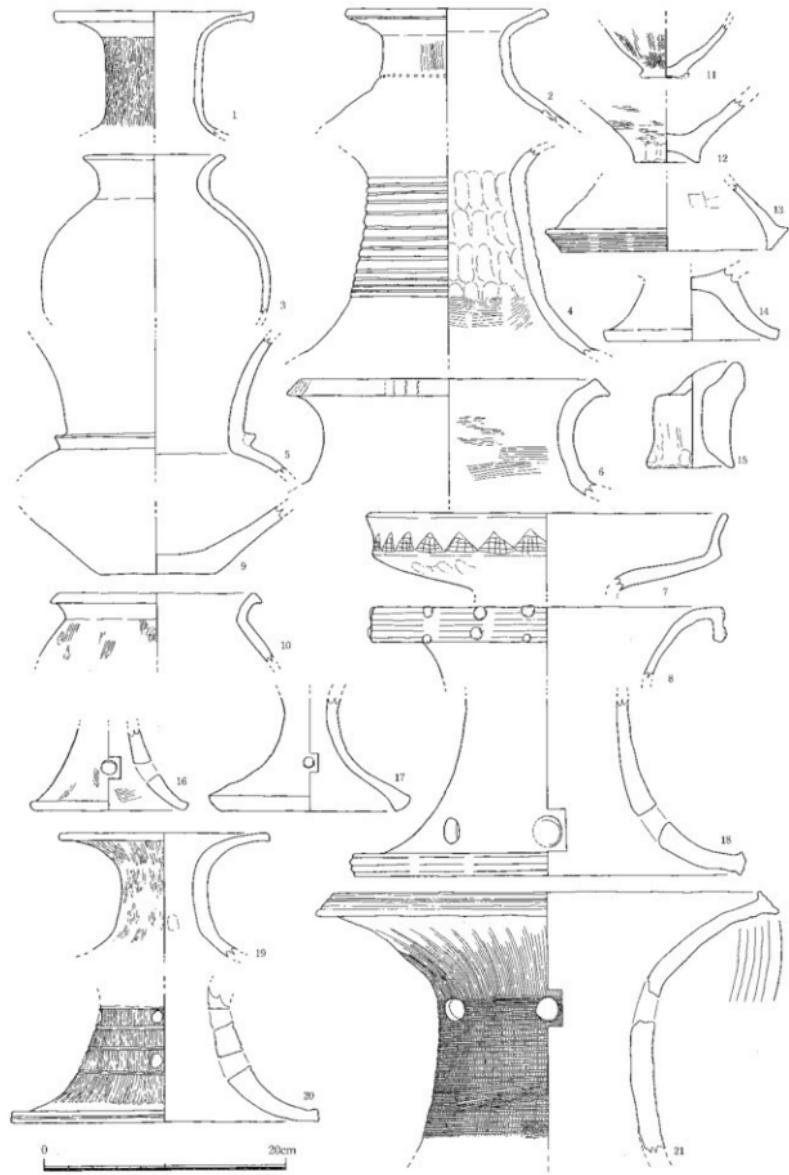


Fig.30 SK077出土土器実測図 (1/4)

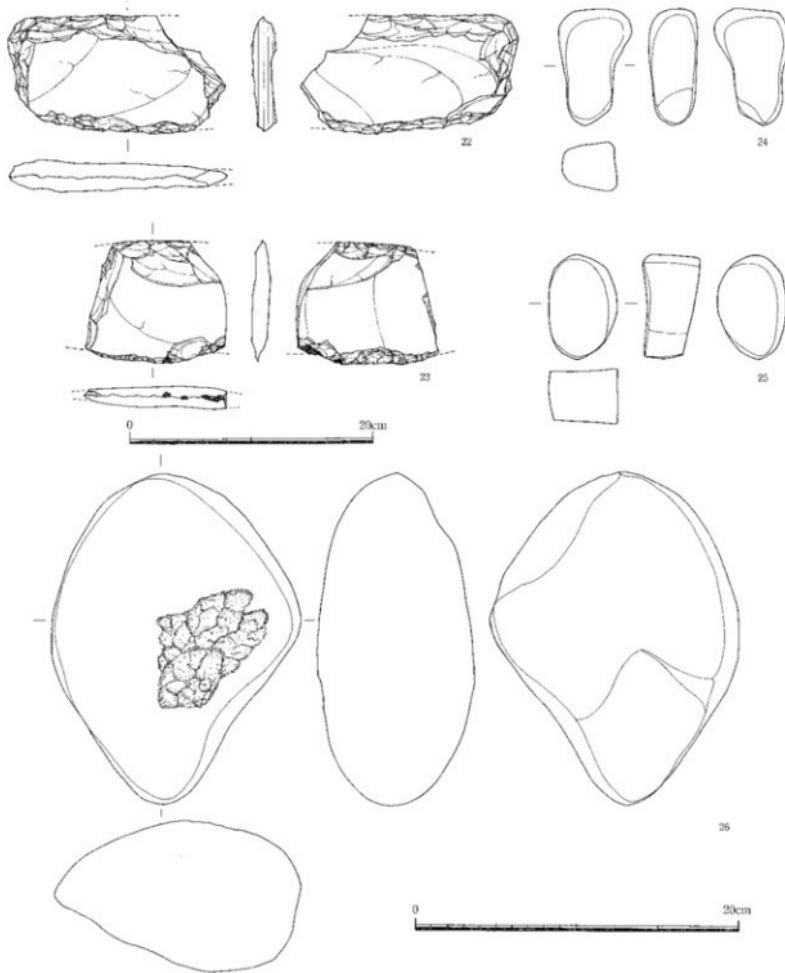


Fig.31 SK077出土石器実測図 (1/2 · 1/3)

調整をする。底径5.5cmである。13は台付鉢の脚部で、裾部端部には五条の凹線を施す。底径17.4cmである。14は台付鉢の脚部で、底径14cmで裾部端部は外反する。

支脚 (15) 完形で表面全体をナデ調整するが、全体的に粗い造りである。器高8.8cm、底径7cmである。

高坏 (16・17) 16は脚部片で、底径12.2cmで外面にヘラミガキを施し内面はハケ後ナデ調整する。裾部に円形の透孔を穿つ。17は脚部片で、底径14.4cmで裾部端部は肥厚し、裾部に円形の透孔を穿つ。

器台（18～21） 18は脚部片で、底径31.8cm、裾部には円形の透孔を穿ち端部には凹線を施す。19は小型の器台で、口径17.2cm、外面はミガキを施し内面をナデ調整する。20は脚部で、裾部には二段の凹形透しを六方向に穿つ。外面は粗いミガキの後、四条の沈線を施す。底径25.2cm。21は口径35cmで、口縁端部は凹線文を施し、基部外面は継方向ハケ調整後櫛描文を施す。また基部には円形透しを穿つ。

#### 石器

打製石庖丁（22） 長さ8.9cm、幅5.0cm、厚さ1.0cm、重量63.3gであり、紅麻石片岩製の打製石庖丁である。背部には刃ツブシ調整が施され、刃部は両面調整により直線状に作り出されている。また、石材の節理方向と素材剥片の剥離方向が平行することから、節理方向に沿って剥離していたことが窺える。I2区出土。

スクレイバー（23） 長さ5.8cm、幅5.1cm、厚さ1.0cm、重量34.1gであり、サスカイト製のスクレイバーである。背面部には弱めの刃ツブシ調整が施され、刃部は両面調整によりやや外溝する。H1区出土。

被熱痕のある自然石（24） 長さ7.2cm、幅4.5cm、厚さ3.0cm、重量126.1gであり、砂岩製の被熱痕のある自然石である。左面のみが黒色に変色している。H2区出土。

砥石（25） 長さ6.4cm、幅4.2cm、厚さ3.5cm、重量136.5gであり、砂岩製の砥石である。自然石の丂端を切断するように使用面が2面作り出されている。丂面とも擦痕は認められない。H2区出土。

凹石（26） 長さ20.3cm、幅15.3cm、厚さ9.6cm、重量2,999.1gであり、砂岩製の凹石である。片面のやや中央から少しづれた位置に、長さ約7cm、幅約6.5cmの範囲で敲打痕が認められる。H2区出土。

#### SK081出土遺物 (Fig.32, Pla.31)

##### 弥生土器

壺（1） 口縁部片で、口径10cmである。口縁部には二条の凹線をし、頸部外面に櫛原体による斜め方向の刻目を施す。



甕（2・3） いずれも底部片である。2は底径6.2cmである。3は外面をハケ後ナデ調整し、底径9cmである。

Fig.32 SK081出土土器実測図 (1/4)

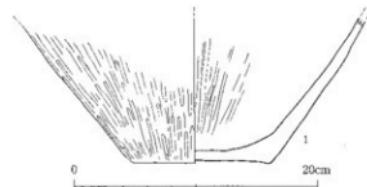


Fig.33 SK089出土土器実測図 (1/4)

#### SK089出土遺物 (Fig.33, Pla.31)

##### 弥生土器

甕（1） 底部片で、内外面ともに継方向に密にヘラミガキを施し、底径10.4cmである。

#### SK100出土遺物 (Fig.34, Pla.31)

##### 石器

敲石（1） 長さ10.3cm、幅6.7cm、厚さ4.8cm、重量477.2gである。泥質溶結凝灰岩製（？）の敲石である。丂端には敲打に伴って生じるツブレ痕が認められる。T2区出土。

#### SK103出土遺物 (Fig.35, Pla.31)

##### 土製品

焼土（1～3） いずれもきめの細かい粘土で、図示した以外の破片の多くは低温で焼成したためか焼けが甘く脆い。1は一部に黒斑状を呈する箇所が認められる。2の一部は被熱により赤色化している。3の内側には楕円形を呈する面が

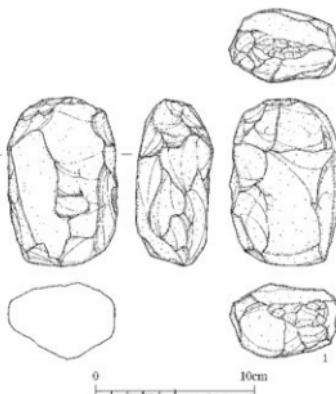


Fig.34 SK100出土石器実測図 (1/2)

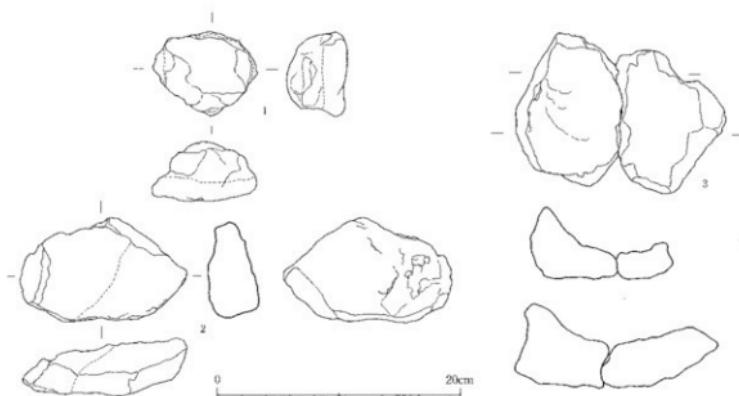


Fig.35 SK103出土焼土実測図 (1/4)

観察される。

SK104出土遺物 (Fig.36, Pla.25)

ガラス製品

小玉 (1) 直径4mm、内孔径1.9mm、  
厚さ3.6mmである。孔は錐状工具によ  
って穿孔されているが、穿孔の方向  
は明確ではない。色調はスカイブル  
ーを呈する。

SK108出土遺物 (Fig.37, Pla.31)

弥生土器

壺 (1) 口頭部は丸存し、口径27cmである。口縁部外面は七条の凹線をした後、  
斜め方向の刻口を施す。頭部外面には指頭圧突帯を貼り付け、外面はナデ、内面は  
横方向の密なミガキを施す。

SK112出土遺物 (Fig.38, Pla.31)

弥生土器

壺 (1) 口径11cmで、口縁は外方向に直線的に伸びる。口縁部外面に二条の貼り  
付け突帯を持ち、突帯下段には刻目を施す。頭部外面に箇原体による斜め方向の刻  
目を施す。

甕 (2) 小型の甕で、内外面ともにハケ後ナデ調整をする。口径13cm  
である。

SK116出土遺物 (Fig.39, Pla.31)

弥生土器

甕 (1) 脊部外面は縦方向のハケ施し、内面はナデ調整し指頭圧痕が  
残る。口径18.6cmである。

溝

SD001黒褐色土層出土遺物 (Fig.40~46, Pla.32~38)

弥生土器

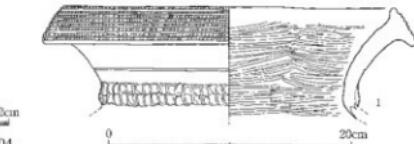


Fig.36 SK104 出土ガラス小玉実測図 (1/1)

Fig.37 SK108出土土器実測図 (1/4)

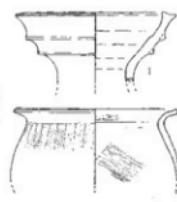


Fig.38 SK112出土土器実測図 (1/4)

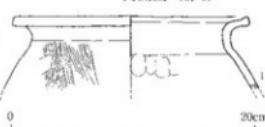


Fig.39 SK116出土土器実測図 (1/4)



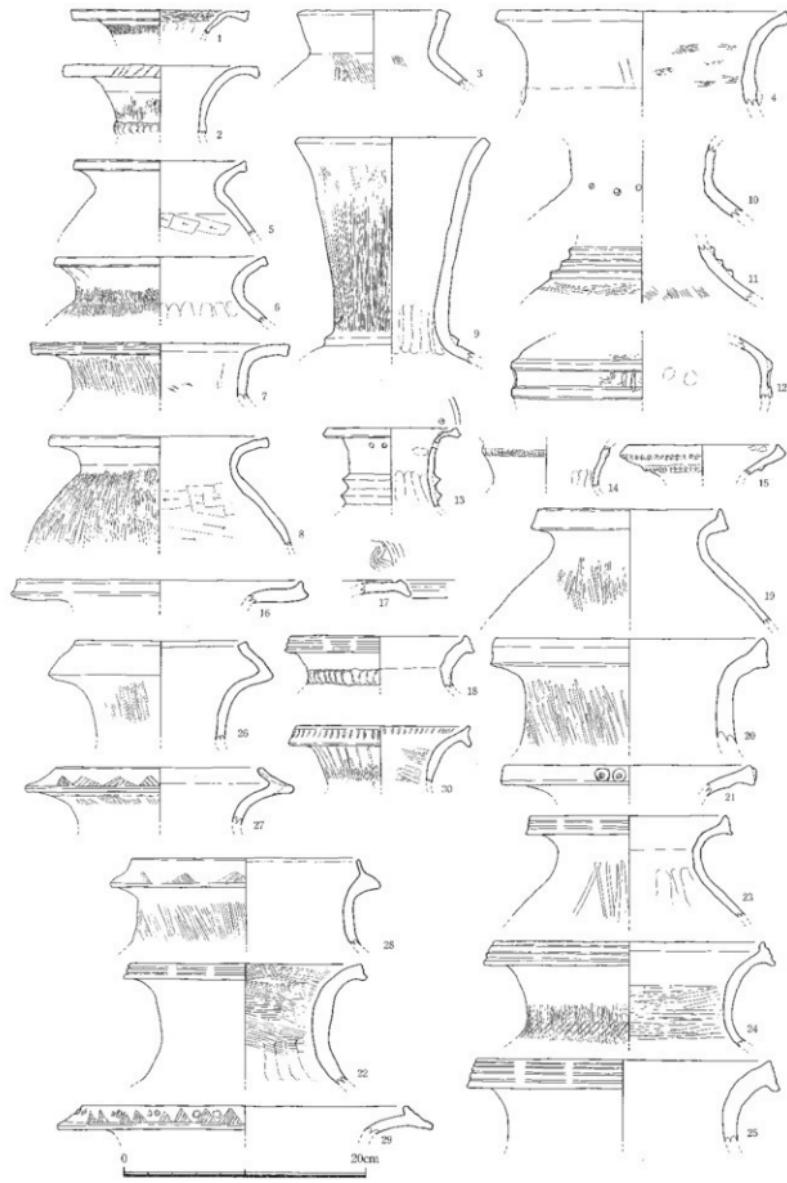


Fig.40 SD001黑褐色土層出土土器尖測圖1 (1/4)

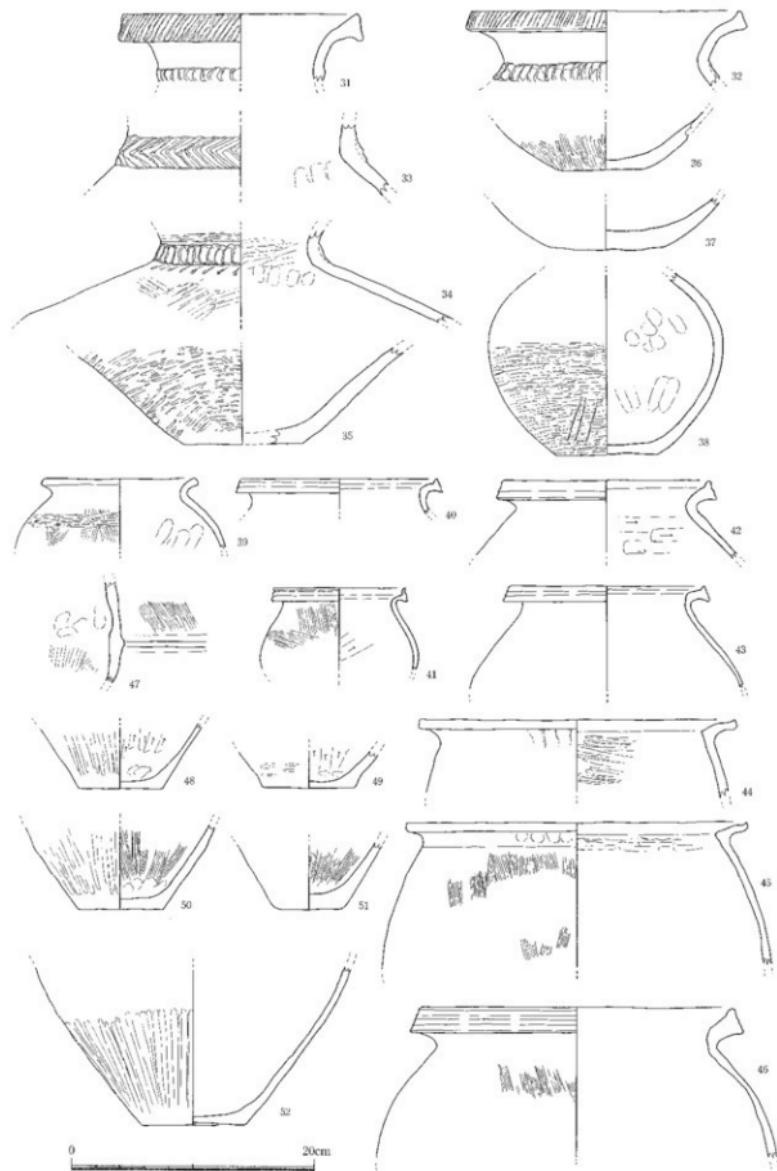


Fig.41 SD001黑褐色土層出土上器実測図2 (1/4)

壺（1~38） 1は広口壺で、口縁端部はやや肥厚し頸部外面は縱方向のハケ調整を施す。2は広口壺で、口径15.8cmである。口縁端部に斜め方向の列点を施し、頸部外面はハケ後ナデ調整し指頭圧突帯を貼り付ける。3は短頸壺で、口径6.3cmである。口縁端部はやや外傾し、胴部外面はハケ後ナデ調整する。4は広口壺で、頸部外面には指頭圧突帯が剥がれた痕跡が認められる。内面はハケ後ナデ調整をする。5は広口壺で、胴部内面は団上左から右方向にヘラケズリする。口縁端部及び胴部外面はナデ調整を施す。口径14cmである。6は広口壺で胴部外面は縱方向のハケ調整を施し、内面はナデ調整するが指頭圧痕が残る。口径17cmである。7は広口壺で、胴部外面は縱方向のやや粗いヘラミガキを施す。8は口縁部はナデ調整を施す。9は長頸壺で、口縁部はやや外傾し、口縁外面はハケ後ナデ調整を施し、内面はナデを施す。頸部外面に一条の貼り付け突帯を巡らせる。口径15cmである。10は頸部片で、頸部外面に竹管文を施す記号文土器である。11は頸部片で、頸部外面に三条の突帯を貼り付ける。外面は横方向のミガキを施し、内面はハケ後ナデ調整をする。12は細頸壺の頸部片で、胴部外面に二条の突帯を貼り付け更に三本一單位の棒状浮文を貼り付ける。外面は横方向の精緻なミガキを施し、内面はナデ調整をする。形態的特徴から、古備系細頸壺になると考えられる。13は広口壺で頸部に断面三角形の貼り付け突帯を二条巡らし、口縁端部を上方に拡張している。14は口縁内部に円形浮文を貼り付け、二個の紐通し孔を穿つ。14・15は受け口状の14縁を持つタイプで、14は口縁端部をくく。15の口縁部は外方向に直線的に伸びる。口縁部外面に二条の貼り付け突帯を持ち浅い刻目を施す。16は口縁部が大きく外反する。17は口縁部の細片で、内面に波状文を施し赤色顔料を塗布が認められる。18は口縁端部に二条の凹線をし、頸部外面には指頭圧痕を貼り付ける。口径14cmである。19は口縁端部がやや内傾し、胴部外面は精緻なヘラミガキを施す。口径7.5cmである。20は口径22cmで、頸部外面はやや粗いミガキを施し、内面はナデ調整をする。21は広口壺としたが、器台の可能性もある。11縁端部に二個の円形浮文を貼り付ける。22は口縁部外面に二条の凹線をし、内面はハケ調整後ナデを施す。23は口縁部外面に三条の凹線をし、胴部外面は粗いミガキを施し、内面はナデを施す。24は11縁部外面に三条の凹線をし、胴部外面はハケ調整をし頸部に斜め方向の列点文を刻む。内面は横方向の精緻なミガキを施す。25は口縁部外面に四条の凹線を施す。26は口縁端部が内傾し、袋状口縁を呈する。胴部外面はハケ調整の後ナデを施す。27も袋状口縁を呈するが、口縁端部の内傾が著しい。11縁端部外面に鉈圓文を描く。28は袋状口縁を呈し、口縁端部外面に鉈圓文を描く。頸部外面はハケ調整をする。29は口縁端部が内傾し、外面に二個一単位の竹管文と鉈圓文を描く。頸部外面はハケ調整を施す。30は11縁部内外に列点文を描き、頸部外面は縱方向、内面は横方向のミガキを施す。31・32はともに口縁端部に斜め方向の列点を施し、頸部外面に指頭圧突帯を貼り付ける。33は頸部片で、外面に指頭圧突帯を貼り付ける。内面に指頭圧痕を残す。34は頸部片で、外面に指頭圧突帯を貼り付ける。突帯のやや下に突帯を貼り付けた際の痕跡が列点状に残る。内面はナデ調整する。35は底部片で、外面はタタキ成形の後ナデ調整をする。36は底部片で外面はハケ調整をする。37は底部片で内外面ともナデ調整をする。38は胴部で、外面は密にヘラミガキを施し、内面はナデ調整指頭圧痕が多く残る。胴部下半に二本の線刻が認められ一種の記号文と考えられる。

甕（39~56） 39は小型の甕で、胴部外面はハケ後ミガキを施す。40は口縁部片で、口径は16cmである。41は小型の甕で、11縁部外面に二条の凹線をし、胴部から右方向の部外面はハケ調整ミガキをし内面はヘラケズリ後ナデを施す。42は胴部内面を団上左から右方向のヘラケズリをする。11径は17cmである。43は胴部外面に列点文を施す。44は口縁部片で、頸部は「く」字状に屈曲し、内面を横方向にヘラミガキする。45の頸部は「く」字状に屈曲し、胴部外面はハケ後ナデ調整をする。46は大型のもので11径25.6cmである。口縁部外面に四条の凹線をし、胴部外面はハケ後ナデ調整をする。47は甕の胴部片と考えられる。一条の突帯を貼り付け、内外面ともにハケ後ナデ調整する。48・49はとともに底部で、外面ヘラミガキをし内面はヘラケズリを施す。50・51・52はともに底部で、外面ヘラミガキし内面はハケ調整を施す。52は胴部下半が残存し、外面は縱方向のヘラミガキを施す。53は底部で、内外面ともにハケ後ナデ調整する。54は外面をヘラケズリし、内面はナデ調整をする。55は内面をハケ後ナデ調整をする。また底部外面にもハケ調整の痕跡が認められる。

高坏（56~74） 56は坏部で、口縁端部は内傾し、外面口縁部付近は横方向に、下半は縱方向にそれぞれヘラ

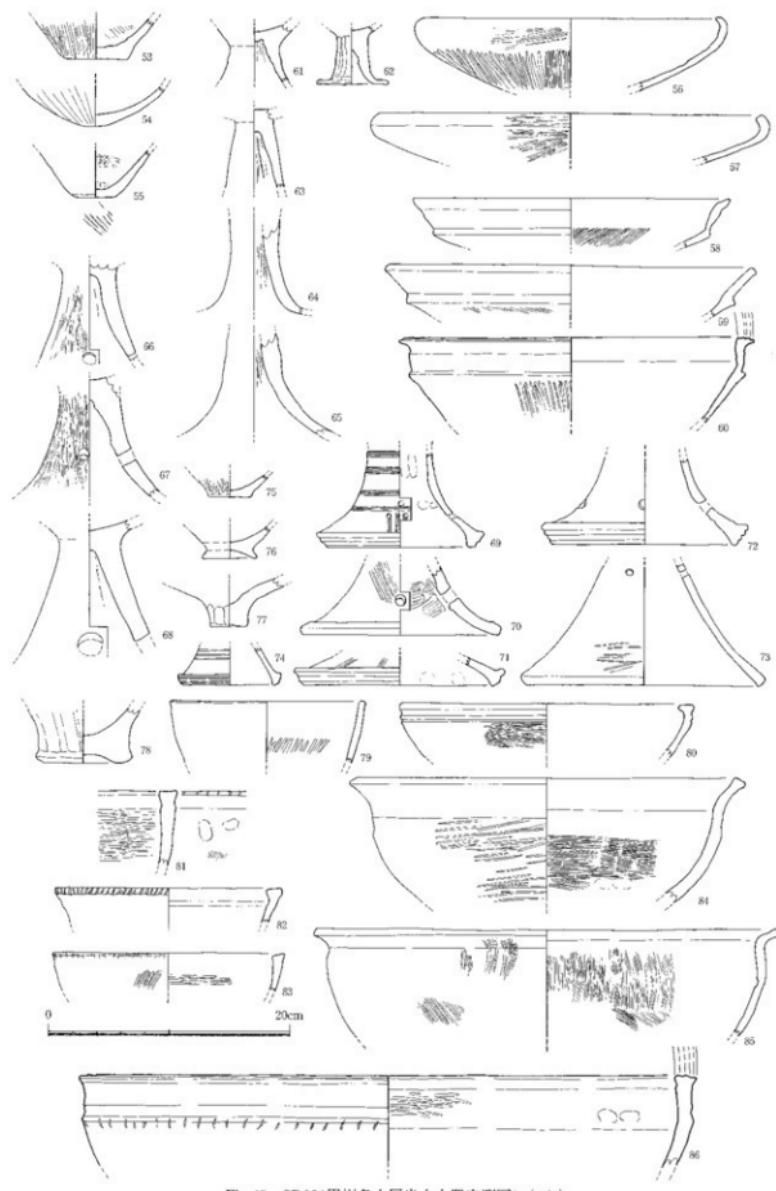


Fig.42 SD001黑褐色土层出土上器实测图3 (1/4)

ミガキを施す。内面はナデ調整をする。57も同様に口縁部は内傾し「釣手」状を呈する。外面は斜め方向にヘラミガキを施す。58・59は、浅く内湾気味に立ち上がる体部から外上方に直線的に伸びる口縁部を有する。いずれも体部外面はヘラミガキを施す。60は口縁端部が外側に拡張し二条の凹線を施す。体部は縱向に精緻なヘラミガキを施す。台付鉢の可能性もあるが、ここではとりあえず高环として報告しておく。61~68は脚柱部である。61は外面ヘラミガキをし内面はナデ調整をする。62は小型のもので、外面はハケ後ナデ調整をする。ミニチュア土器になる可能性もある。63は外面はハケ後ヘラミガキを施す。内面には絞り痕が認められる。64は表面はナデ調整をする。支脚である可能性もある。65は外面はハケ後粗いヘラミガキを施す。66は外面ハケ後ナデ調整し、脚裾部には円形透孔が認められる。67は外面は精緻にヘラミガキを施し、円形透孔を穿つ。68は大型のもので、円形透孔を穿つ。69~74は脚部である。69は外面に櫛描による直線文を縱横方向に施し、裾部に二個一単位の円形透孔を穿つ。外面上には化粧土を塗布した状態が取れる。70は裾部に円形透孔を穿ち、外面はハケ後粗いヘラミガキを施し、内面はハケ後ナデ調整をする。71は外面に櫛描による直線文を縱方向に施し、裾端部は上方に拡張し、二条の凹線を施す。内面はヘラケズリ後ナデ調整をする。72は裾部に円形透孔を穿ち、裾端部は上方に拡張し、三条の凹線を施す。73は裾部にやや小さめの円形透孔を穿ち、外面は精緻にヘラミガキを施す。74は小型のもので、裾部外面は櫛描による直線文を施す。裾端部は上方に拡張し、二条の凹線を施す。ミニチュア上器帽になる可能性もある。

鉢(78~91) 78は底部で器面全体をヘラミガキする。ここでは鉢としたが壺の可能性もある。79は口縁部片で、口縁部付近は内外面ともに横方向のヘラミガキをし、体部付近は縱方向のヘラミガキを施す。80は口縁端部がやや拡張し内傾する。内外面とも精緻にヘラミガキを施す。ここでは一応鉢として報告するが、高环である可能性も高い。81は口縁端部は強い横方向のナデをし、体部外面は縱方向に、内面は横方向に精緻なヘラミガキを施す。82は外外面ともヘラミガキを施し、口縁端部外面に浅い刻目をする。83は口縁端部は強い横方向のナデを

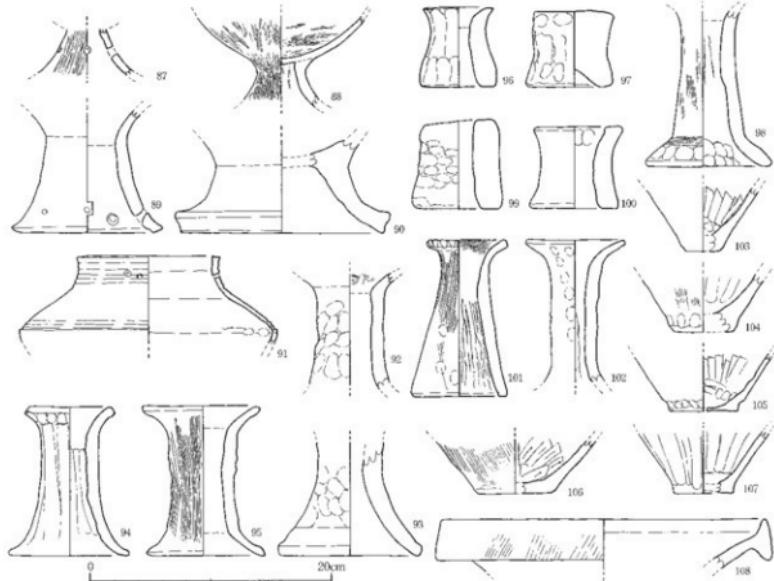


Fig.43 SD001黒褐色上層出土上器実測図4 (1/4)

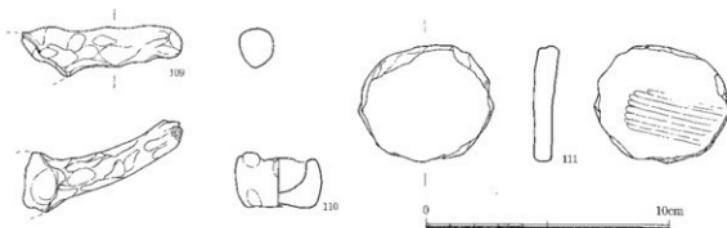


Fig.44 SD001黒褐色土層出土土器・上製品実測図5 (1/2)

し、体部外面は縦方向に、内面は横方向に精緻なヘラミガキを施す。84は口縁部がやや外傾し、口縁部を強く横方向にナデ調整し、胴部外面は精緻な横方向のヘラミガキをし、内面はハケ後ナデ調整をする。85は口縁部は外側に伸び、外面ともハケ後ナデ調整をする。86は大型のもので、11縁端部は強い横方向のナデをし、体部内面は横方向に精緻なヘラミガキを施す。また体部外面に浅い刻目列点を施す。87は脚柱部である。鉢としたが、小型の高杯になる可能性もある。裾部に五方向から円形透し孔を穿ち、外面は縦方向に精緻なヘラミガキをし、内面は丁寧ナデ調整を施す。88は台付鉢としたが高杯の可能性もある。内外面とも精緻なミガキを施す。89は脚部で裾部に三方向から二個一単位の円形透し孔を穿つ。90は脚部片で、口縁端部はやや拡張し、表面は丁寧にナデ調整を施す。91は算盤玉状を呈する台付鉢で、口縁部には三条、脚部最大径付近には三条の凹線を施す。口縁部に一個の穿孔と、穿孔途中的圧みがある。

有孔土器（103～107） 103を除いて甕に焼成後、穿孔を穿ったものである。103は全体をナデ調整する。104は外面をハケ後ナデ調整し、内面はナデ調整を施す。105～107は内面をヘラケツリ後ナデ調整をする。106の外面はハケの痕跡が認められる。

器台（108） 11縁部片で口縁端部が上下方向に拡張し、口縁部外面に鋸歯文を描く。

支脚（92～102） 92・93・94・95・98・101・102は長脚のもので、96・97・99・100は短脚のものである。長脚のものには、口縁部及び脚部が外反するタイプ（93・94・95・98・102）と、外反する口縁部に浅い刻目を施し脚部は筒状を呈するタイプ（101）がある。低脚のものには、口縁部及び脚部が外反するタイプ（96・100）と、筒状を呈するタイプ（99）、中実で窪み底のタイプ（97）の二者がある。器面の調整はナデであるがハケ目が認められるものもある（92・95・98・101）。いずれも指頭压痕を顕著に残し、全体的に粗い造りである。

#### ミニチュア土器

鉢（110） 完形である。11縁3.7cm、器高2.3cm、底径2.8cmである。器面全体をナデ調整する。

#### 土製品

匙形土製品（109） 柄部片としたが、把手である可能性もある。器面全体に指頭压痕を顕著に残す。

土製円盤（111） 土片を転用した加工円盤で、直径5.5cm、厚さ0.9cmである。外面にハケ目が認められる。

#### 石器

石鍤（112） 長さ8.9cm、幅5.6cm、厚さ2.9cm、重量209.6gであり、砂岩製の有溝石鍤である。扁平で橢円形を呈する石材を選択し、その長軸端を研削により若干尖らせている。また、側縁には幅約0.6cm、深さ約0.2cmの擦り切り技法による緩やかなV字状の溝が削りしている。非常に丁寧に成形され、精巧な造りである。

敲石（113） 長さ4.7cm、幅5.8cm、厚さ2.3cm、重量84.6gである。砂岩製の敲石であるが、欠損が激しい。先端にツブレ痕が観察され、その面を切る形で使用に伴う剥離痕が認められる。

凹石（114） 長さ17.7cm、幅13.1cm、厚さ6.1cm、重量2,016.2gである。砂岩製の凹石であり、扁平な石材のほぼ中央部分に敲打痕が認められる。敲打痕の範囲は長さ約5cm、幅約3cmで、片面にのみ観察される。

砥石（115・117・118） 115は長さ6.7cm、幅4.0cm、厚さ3.1cm、重量141.3gである。香色山産の流紋岩製であ

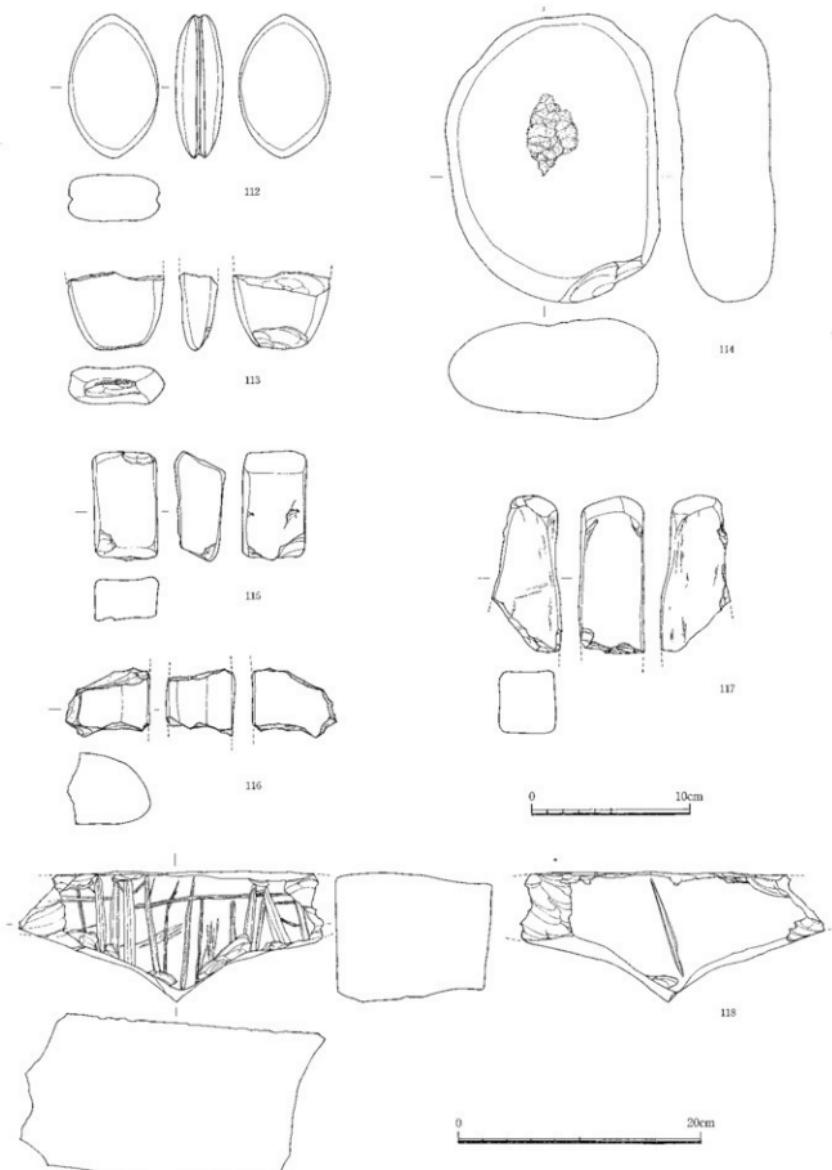


Fig.45 SD001黑褐色土層出土石器實測圖1 (1/3 · 1/4)

り、使用面は1面のみである。擦痕は認められない。117は長さ9.6cm、幅4.3cm、厚さ3.8cm、重量277.4gである。香色山産の流紋岩製であり、使用面は2面ある。2面とも主に長軸方向に擦痕が認められる。118は長さ10.7cm、幅24.9cm、厚さ13.4cm、重量4,945.3gであり、砂岩系製の砥石である。玉砕石の可能性が考えられるが、溝がどれも約0.1cm～0.2cm程度であり非常に浅いため根拠を欠く。使用面は2面あり、左回側は頻繁に使用しているが、右回側では大きな溝は1条のみであり、あまり使用されていないことが窺える。

被熱痕のある自然石（116） 116は長さ4.2cm、幅5.2cm、厚さ4.5cm、重量113.3gであり、砂岩製の被熱痕のある自然石である。特に加工された痕跡は認められないが、被熱により黒色に変色している痕跡が観察される。

石鏃（119・120） 119は長さ3.2cm、幅2.3cm、厚さ0.5cm、重量3.8gである。基部が若干凹むタイプであり、サスカイト製の石鏃である。両面とも中央に素面面を残しているが、左右非対称である。120は長さ3.5cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm、重量2.8gである。サスカイト製の凸基式石鏃である。最大幅部位が中央やや基部よりに位置し、基部

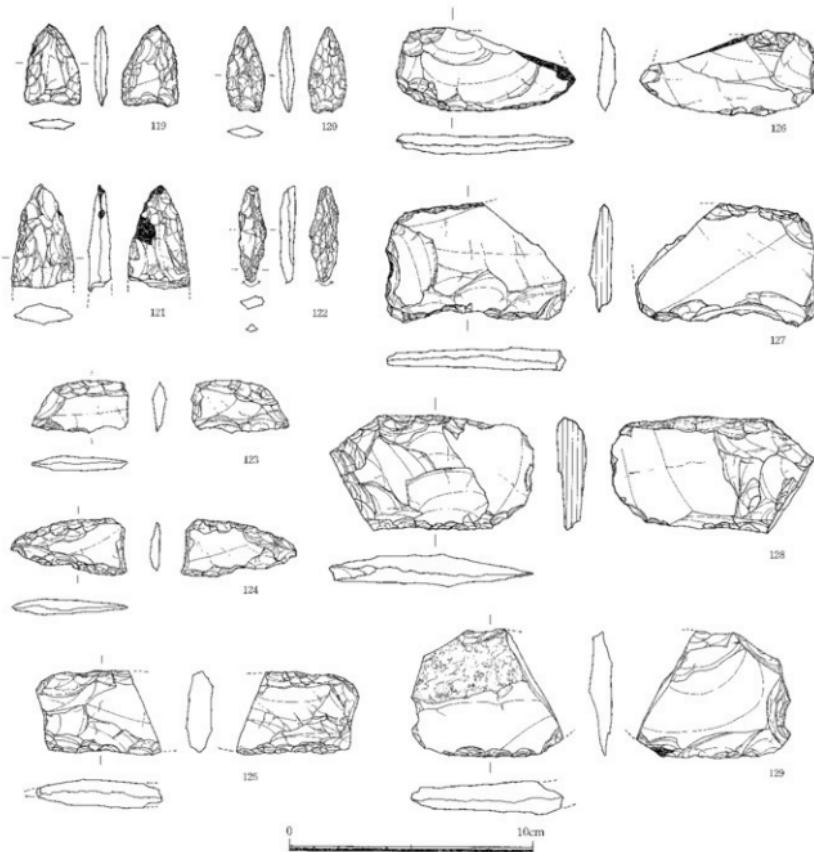


Fig.46 SD001黒褐色土層出土石器尖端図2 (1/2)

がすばまる形態をしている。

石槍（121） 長さ4.3cm、幅2.5cm、厚さ1.0cm、重量8.6gであり、サスカイト製の石槍である。先端部のみの残存であり、基部の形態が不明であるが、断面形態が菱形を呈すこと、厚みがあることから石槍の先端部だと考えられる。C1区出土。

石錐（122） 長さ3.9cm、幅1.1cm、厚さ0.6cm、重量2.7gであり、サスカイト製の石錐である。棒状の形態を呈し、頭部と錐部の明瞭な境はないが、一方の先端部側縁に回転運動による痕跡だと考えられる摩滅痕（実測図に矢印で示した範囲）が観察される。また、摩滅痕が認められる端部側には、断面形態が菱形になるよう細部調整が両面に施されている。これらのことからも、こちらの端部が機能部であったと考えられる。

石錐（123・124） 123は長さ3.9cm、幅2.2cm、厚さ0.6cm、重量5.5gである。サスカイト製の小型石錐であり、背部は丁寧な両面調整が施されているが、刃部は片面調整で階段状剥離が激しい。両面ともに素材面を残す。B1区出土。124は長さ4.7cm、幅2.3cm、厚さ0.5cm、重量6.0gであり、サスカイト製の小型石錐である。両面ともに素材面を残す。123・124は、ともに先端部が基部よりも厚いこと、123は左右非対称であること、124は刃部中央付近にノッチ状の浅い抉りが施されていることなどから、小型石錐と認定した。

スクレイバー（125・126・128） 125は長さ5.1cm、幅3.4cm、厚さ1.2cm、重量25.6gである。サスカイト製のスクレイバーであり、左右の両端を欠損する。背部には刃ツブシ調整が施され、刃部は両面調整で直線状に作り出している。A4区出土。126は長さ7.3cm、幅3.5cm、厚さ0.8cm、重量20.9gである。一部を欠損するが、サスカイト製のスクレイバーである。背部には弱めの刃ツブシ調整がおこなわれ、刃部は片面調整で外済する。128は長さ8.3cm、幅4.8cm、厚さ1.3cm、重量56.0gである。サスカイト製のスクレイバーであり、折れ面を打面として調整を加えていることから完形である。背部に自然面を残し、刃ツブシ調整を施されている。刃部は主に両面調整で直線状を呈す。また、石材の節理方向と素材剥片の剥離方向が平行することから、節理方向に沿って剥離していたことが窺える。

打製石庖丁（127・129） 127は長さ7.3cm、幅5.0cm、厚さ0.9cm、重量40.8gであり、サスカイト製の打製石庖丁である。抉り部を欠損するため詳細は不明であるが、少なくとも一方に抉りが施される。背部には弱めの刃ツブシ調整がおこなわれ、刃部は階段状剥離が激しいが、両面調整により内済する。また、石材の節理方向と素材剥片の剥離方向が平行することから、節理方向に沿って剥離していたことが窺える。T6区出土。129は長さ6.2cm、幅5.2cm、厚さ1.4cm、重量41.7gである。サスカイト製の打製石庖丁である。欠損するため詳細は不明であるが、少なくとも一方に抉りが施される。背部はほぼ全体を自然面に覆われており、刃ツブシ調整はおこなわれていない。刃部は両面調整でやや外済する。

この他、SD001黒褐色土層からは、打製石庖丁やスクレイバーパーなどが大量に出土している。

SD001暗黒褐色土層出土遺物 (Fig.47~49, Pla.39~40)

弥生土器

壺（1~3） 1は長頸壺で、頸部に列点文を施し、胴部は縱方向に精緻にヘラミガキを施す。胴部内面下半は団上左から右方向にヘラケズリをする。L1径10cmである。2は口縁部に二条の凹線をし、頸部外面に指頭圧突帯を貼り付ける。3は胴部片で、外面に櫛原体により直線文と波状文を描き、胴部下半には指突文を施す。内面はナデ調整を施す。

甕（13） 口縁部片で口径30.2cmで、内面には粗く横方向のヘラミガキが認められる。

高环（6・7・11・12） 6は口縁部片で、口縁端部は内傾し「鉤手」状を呈する。内面はナデ調整をする。7は同じ口縁部は内傾し、外面は横方向、内面は縦方向にヘラミガキをする。11・12は脚部で、11は裾端部がやや拡張し、円盤充填の痕跡が認められる。12は口縁端部がやや拡張し二条の形態化した凹線を施し、裾部に矢羽状の透し孔を穿つ。器面全体に白色の化粧土が塗布されている。

鉢（8） 内外面とも精緻に縦方向のヘラミガキをし、口縁端部外面に浅い刻目をする。ここでは一応鉢としたが、高环の可能性もある。

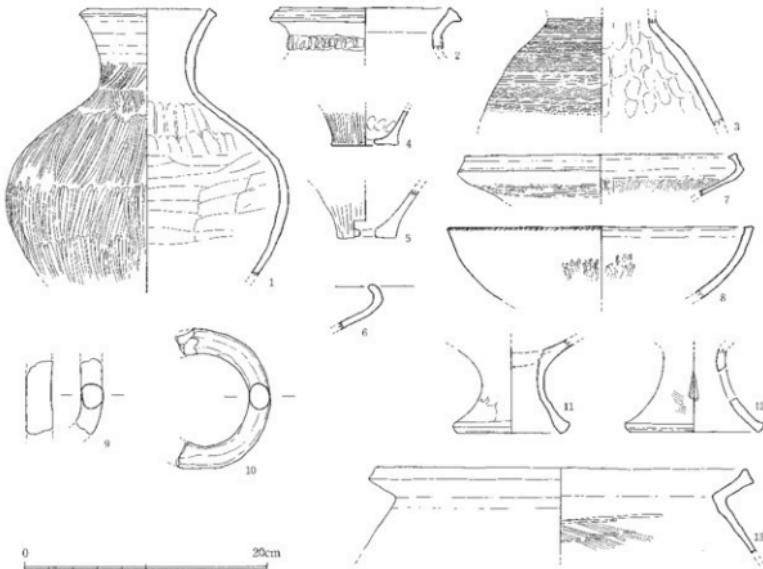


Fig.47 SD001暗黒褐色土層出土土器実測図 (1/4)

有孔土器 (4・5) いずれも甕に焼成後穿孔を穿ったもので、外面は縦方向に精緻なヘラミガキをし内面はナデ調整する。

把手 (9・10) いずれも破片資料で、おそらく水差形土器の把手部になるものと考えられる。

#### 土製品

土製円盤 (14・15) 14は土片を転用した加工円盤で直径3.7cm、厚さ0.6cmである。外面にハケ目が認められる。15は転用ではなく当初から製品として製作された円盤で表面全体は粗くナデ調整がされる。直径3.7cm、厚さ1.3cmである。

#### 石器

砥石 (16・17) 16は長さ28.5cm、幅7.0cm、厚さ9.6cm、重量2,836.7gである。香色山産の流紋岩製の砥石であり、使用面は1面のみである。通常、砥石は扁平な幅広の面を利用するが、これは縦長の幅の狭い面のみを使用している。擦痕方向から、使用の方向は長軸方向、ないしやや斜め方向であったことが窺える。C2区出土。17は長さ23.1cm、幅9.1cm、厚さ6.9cm、重量2,024.2gである。香色山産の流紋岩製の砥石であり、使用面は2面である。先端の一部を欠損しているが、その欠損部周辺において擦痕が明瞭に観察される。擦痕方向は主に長軸方向によく観察されるが、斜め方向や横方向にも認められる。C2区出土。

打製石斧 (18) 長さ10.4cm、幅6.0cm、厚さ1.5cm、重量123.0gである。サスカイト製の打製石斧であり、素材面を残しているわけではないが、節理方向に沿って素材を作り出し、そこから調整を加え成形していることが窺え

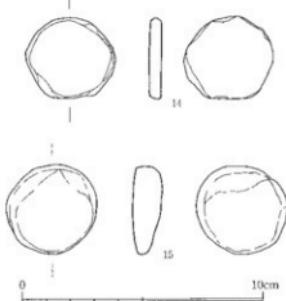


Fig.48 SD001暗黒褐色土層出土土製品実測図 (1/2)

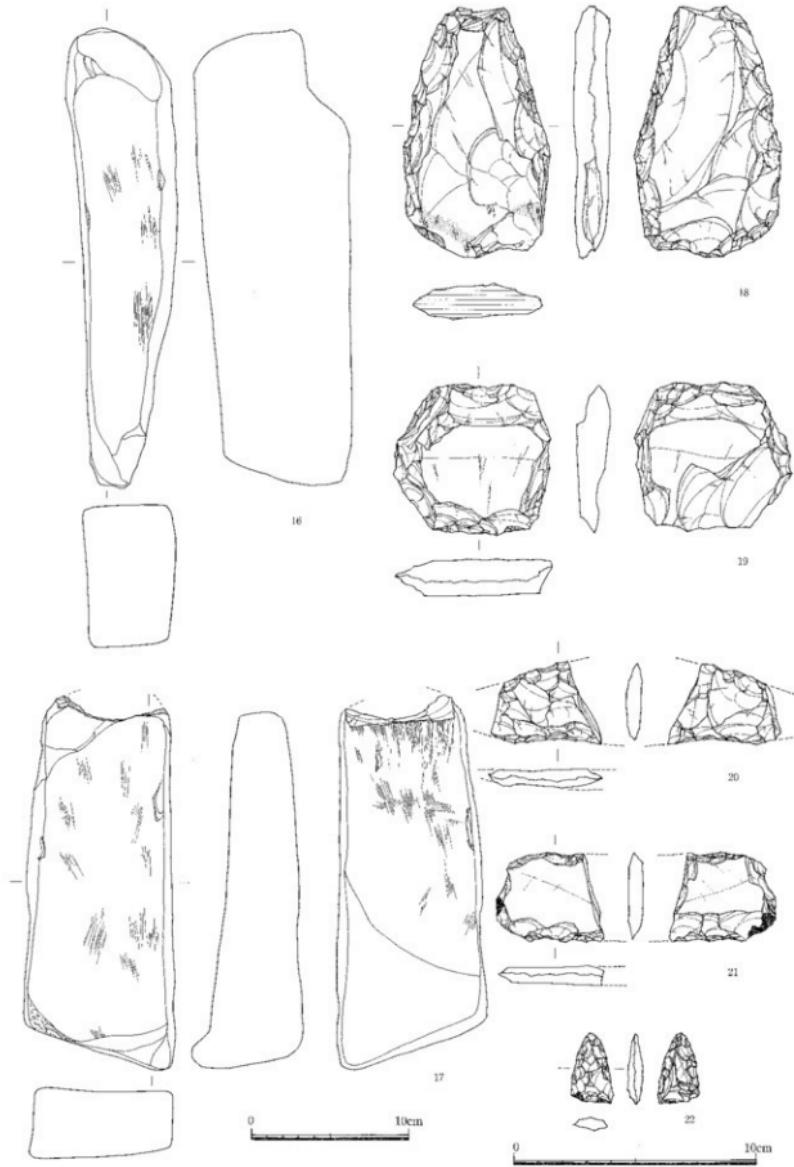


Fig.49 SD001暗黑褐色土層出土石器實測圖 (1/2 · 1/3)

る。左図の刃部付近（網掛け部）が摩滅しており、長軸方向に若干の線条痕が観察される。右図には摩滅痕・線条痕とともに観察されない。D5区出土。

スクレイパー（19・20） 19は長さ6.5cm、幅6.3cm、厚さ1.5cm、重量67.7gであり、サスカイト製のスクレイパーである。両面に素材面を残し、全周から剥離し、六角形状をなすことなどから、板状の剥片素材石核の可能性が高い。その剥片素材石核を転用し、下端のみに片面調整で刃部を直線状に作り出している。A2区出土。20は長さ4.6cm、幅3.4cm、厚さ0.7cm、重量13.5gである。サスカイト製のスクレイパーであり、素材面を残さないほど全体に両面調整をおこなっている。また、平面形態は両側縁とも欠損しているため明らかではないが、長方形をしておらず先端がすぼまる形状をしているようである。このことから石鏃の可能性もあるが、詳細は不明であるのでスクレイパーと認定した。C3区出土。

打製石庖丁（21） 長さ4.4cm、幅3.7cm、厚さ0.8cm、重量16.5gであり、サスカイト製の打製石庖丁である。欠損するため詳細は不明であるが、少なくとも一方に抉りが施される。背部には弱めの刃ツブシ調整が施され、刃部は両面加工により直線状を呈している。B2区出土。

石鏃（22） 長さ2.9cm、幅1.8cm、厚さ0.7cm、重量2.7gであり、サスカイト製の半基式石鏃である。両面ともに素材面は残っていない。A2区出土。

この他にもSD001哈黒褐色土層からは、スクレイパー片などが出土している。

SD001黒灰色土層出土遺物 (Fig.50・51, Pla.40)

壺（2・3） いずれも広口壺である。2は口縁部は上下方に拡張し、二条の回線を施す。頸部内面はナデ調整するが、ハケの痕跡が認められる。また頸部外面に刷毛状工具原体によって羽状文を描く。3は口縁端部が上

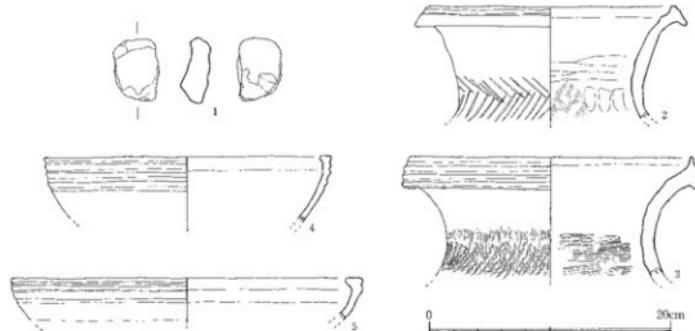


Fig.50 SD001黒灰色土層出土土器実測図 (1/4)

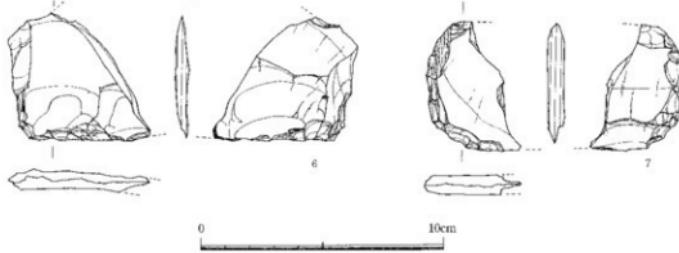


Fig.51 SD001黒灰色土層出土石器実測図 (1/2)

下方に拡張し三条の凹線を施す。頭部外面はハケ調整後、刷毛状工具によって斜め方向の列点を描く。

鉢（4・5） いずれも内外面とも精緻にヘラミガキをし、口縁端部がやや拡張する。外面には4条、5は二条の凹線文を施す。

発泡土器（1） 土器の底部が高温によって発泡したもので、比重が極めて軽い。

石器

スクレイパー（6・7） 6は長さ5.8cm、幅4.7cm、厚さ1.0cm、重量21.0gである。サスカイト製のスクレイパーである。欠損により形状は不明であるが、刃部は両面調整が施され、直線状に作り出されている。また、石材の節理方向と素材剥片の剥離方向が平行することから、節理方向に沿って剥離していたことが窺える。B2区出土。7は長さ2.9cm、幅5.0cm、厚さ0.9cm、重量18.7gである。一部に自然面を残す、サスカイト製のスクレイパーであるが、欠損が大きく詳細は不明である。主に両面調整により成形している。また、石材の節理方向と素材剥片の剥離方向が平行することから、節理方向に沿って剥離していたことが窺える。A2区出土。

SD001灰白色土層出土遺物（Fig.52、Pla.41）

石器

石鏨（1・2） 1は長さ1.8cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重量0.6gである。

サスカイト製の凹基式石鏨である。極めて小型の完形品であり、全体を丁寧に調整する。その形態的特徴や風化が激しいことなどから、縄

文時代まで遡る資料かもしれない。A5区出土。2は長さ2.2cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、重量1.0gである。先端部と基部を欠損するため詳細は不明であるが、平基式ないし凸基式石鏨である。片面に素材面を残す。A5区出土。

この他製品としては、SD001灰白色土層からの出土は認められない。

SD005黒褐色土層出土遺物（Fig.53～59、Pla.41～48）

弥生土器

壺（1～41） 1は広口壺で、頭部に三条の凹線を施す。肥厚し頭部外面は縦方向のハケ調整を施す。2は広口壺で、口縁部に凹線を施し頭部外面に斜め方向の列点を施す。3・4はいずれも口縁端部が水平に傾曲し、口縁端部が上下に拡張し二条の凹線を施す。4の頭部外面は縦方向のヘラミガキが認められる。5の口縁部は外湾して短く延び口縁端部が上方に拡張する。また口縁端部外面は三条の凹線を施す。6は口縁端部が上下に拡張し頭部に凹線を施す。7は口縁部片で、口縁部内面に木葉状の線刻を施す。口縁端部が上下に拡張し二条の凹線を施す。内面には赤色顔料の塗布が認められる。8～12の口縁部は外湾して短く延び端部は上下方に拡張する。口縁端部外面には形骸化した凹線を施す。9・10・11の側部外面は縦方向のヘラミガキをし、11の胴部内面は刷毛状工具の痕跡が顕著に認められる。12の頭部外面に刷毛状工具原体による羽状文を施す。13は口縁端部が上方に拡張し二条の凹線を施す。頭部内面にはハケ目が残る。14・15は頭部片で、外面はハケ調整をし、内面はナデを施す。14は竹管文を、15は羽状文を施す。16は口縁部が大きく外反し、口縁部内面に棒状浮文を施す。器面全体をナデ調整する。17は口縁端部が上下に拡張し、二条の凹線を施した後、三個一単位の円形浮文を貼り付ける。11口縁部内面には外側から指紋文、刻目列点文をし、その間に円形浮文を貼り付ける。18・19は口縁部が外方向に直線的に伸び、11口縫部外面に二条の貼り付け突帯を持ち、突帯に浅い刻目を施す。18の胴部は縦方向のヘラミガキをする。19の表面には白色の化粧土の塗布が認められる。20は11口縫端部が上下に拡張し二条の凹線を施し、頭部外面に三条の凹線をする。21は口縫部が大きく外反する。22は大型壺頭部で、頭部外面に刺突文と列点文を巡らせ、内面はナデ調整をし指痕压痕が顕著に残る。23・27・29・33は11口縫端部を上下に拡張し、口縫部に凹線文を施した後に加飾するものである。23は鋸齒文を描き、27は縦方向の刻目をし、一個一単位の棒状浮文を貼り付けた後横方向の刻目を施す。29は上部に刺突文を二段にわたって巡らし、下部には鋸齒文を描く。33は斜め方向の刻目を施す。24・25は口縫部が内傾し袋状口縫を呈する。24は口縫端部外面に鋸齒文を描き、表面には白色の化粧土の塗布が認められる。26は11口縫端部を下方に拡張し口縫部に二個一単位の竹管文を施す。28は11口縫端部を上下に



Fig.52 SD001灰白色土層

出土石器実測図 (1/2)

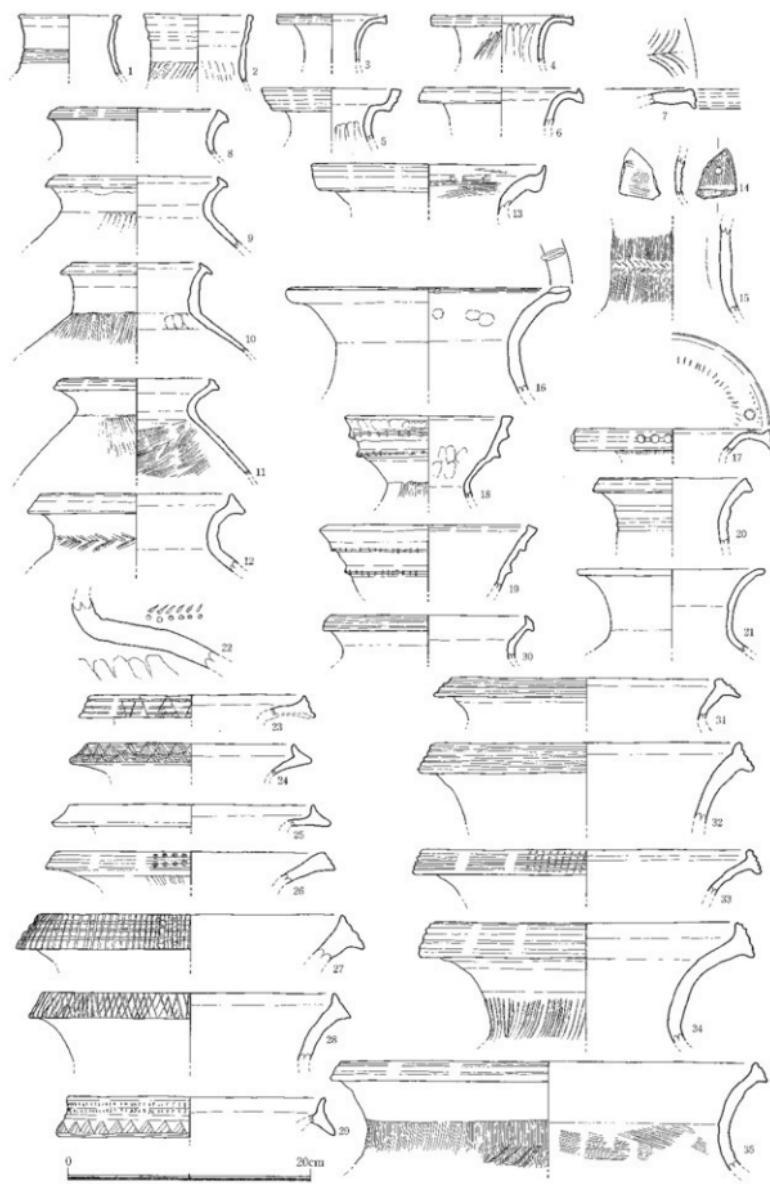


Fig.53 SD005黑褐色土层出土上器实测图1 (1/4)

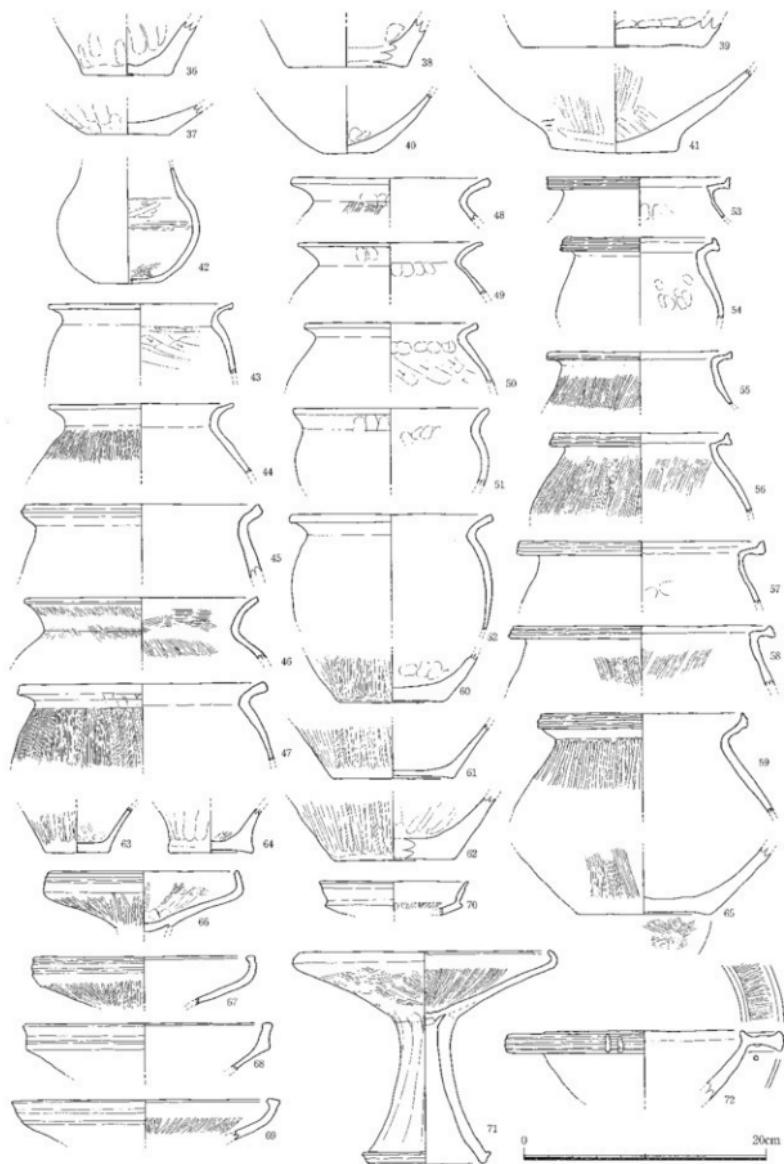


Fig.54 SD005黑褐色土層出土土器實測圖2 (1/4)

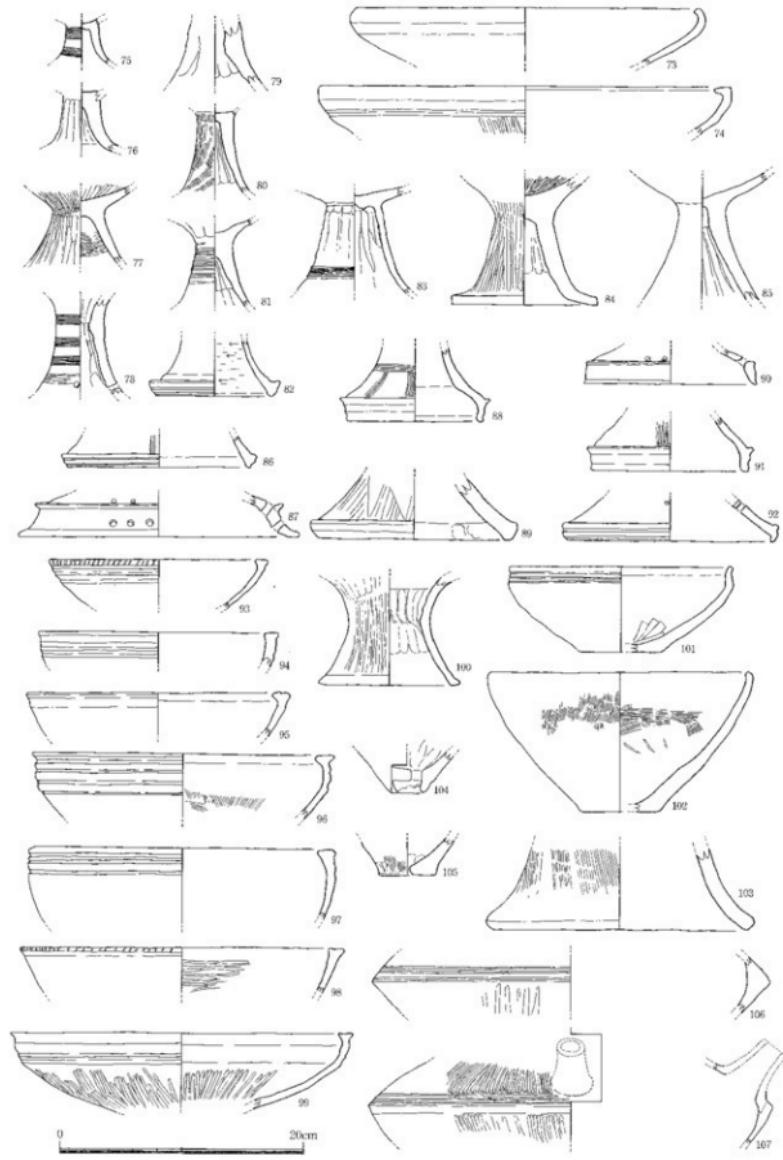


Fig.55 SD005黑褐色土層出土土器実測図3 (1/4)

拡張し口縁部に斜格子文を飾る。31~35は口縁端部が上下に拡張し、凹線を施すものである。34・35は頸部外面に崩毛状工具原体による列点文を施す。35の頸部内面にハケ目が残る。36~41は底部で、36~39は表面を丁寧にナデ調整する。40は底面が狹く珠形を志向する。鉢の底部である可能性もある。41は大型のもので、胴部外面上にヘラミガキを施す。43は小型壺で球形を呈し内面に粗いミガキが認められる。底径5.6cmである。

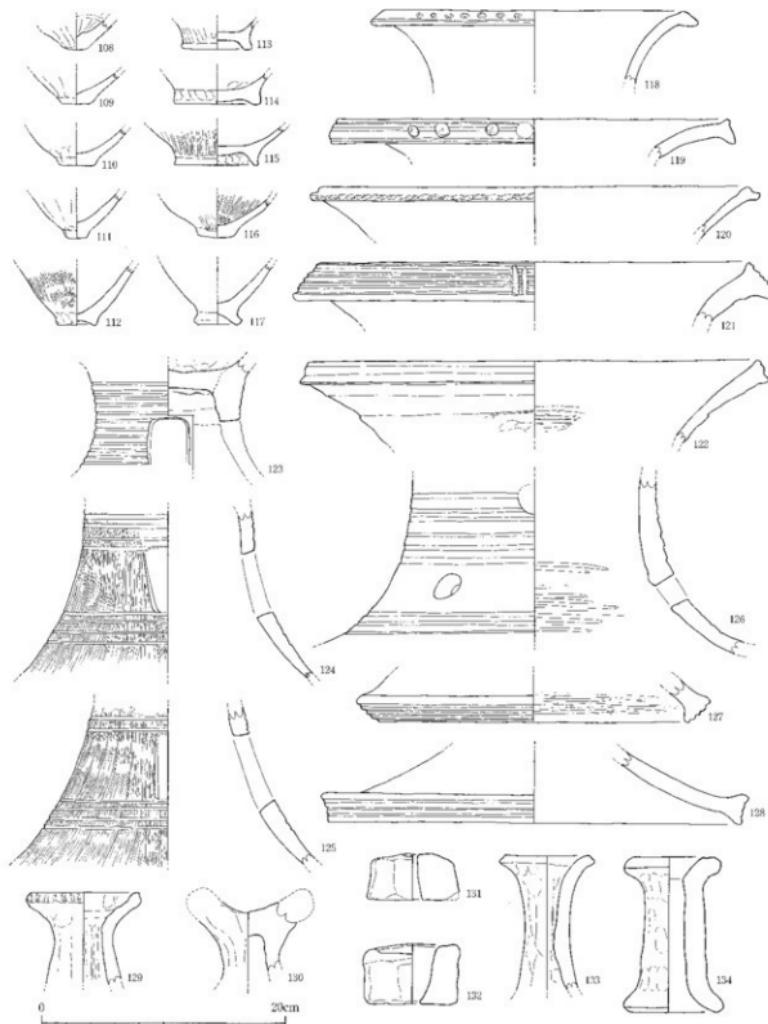


Fig.56 SD005黒褐色上層出土土器実測図4 (1/4)

甕（43～65） 42～59は口頭部片である。大別して、口縁端部が単純口縁で「く」字状に屈曲するもの（43～50）、同様に単純口縁ではあるがやや緩やかに屈曲するもの（51・52）、口縁端部を上方に拡張し口縁部外面に凹線文を施すもの（53～59）がある。胸部外面は基本的にはナデ調整をするが、ハケ調整が認められるもの（44・46・47・48・55・56）とヘラミガキを施すもの（59）がある。胸部内面は基本的にはナデ調整をするが、ハケ調整が認められるもの（46・58）とヘラケズリされたもの（43・50）がある。

60～65は底部で、60～62・65は胴部外面をハケ調整後ナデを施す。63・64は胴部外面ヘラミガキをし内面はナデ調整をする。

高杯（66～92） 66～70・72～74は杯部で、71は脚部は元存し杯は約半分が残存する。これらは口縁部の形態からいくつかのタイプに類別できる。単純口縁で端部がやや内傾するもの（66）、口縁端部が内側に拡張するものの（67・69・74）、浅く内湧気味に立ち上がる休部から外上方に直線的に伸びるII縁部を有するもの（68・70）、口縁部が内傾し「鉤手」状を呈するもの（71・73）、水平口縁を持つもの（72）である。杯部外間に注目すると、口縁部外面に凹線を施し縱方向の精緻なミガキをするものがある（66・67・74）。内面については精緻なヘラミガキが認められるものがある（66・69）。72は拡張した部分の内面に縱方向のヘラミガキを施す。

75～81・83～85は脚柱部片である。基部外面はヘラミガキを施すもの（76・77・84）、櫛描直線文を描くもの（75・78・83）、ヘラ描きス線による直線文を描くもの（81）、ハケ後ナデ調整されるもの（81）などの特徴がある。また78の脚部付近に円形の透し孔が認められる。

82・86～92は脚部片<sup>17</sup>である。裾端部の形態から以下のように幾つかに類別できる。上方に拡張した裾端部がやや内傾し外面に凹線を施すもの（82・86・89）、上方に拡張した裾端部が内傾もしくは直立するもの（88・90・91）、上下に拡張した裾端部がやや内傾し外面に凹線を施すもの（92）、裾端部が大きく外反するもの（87）。また、脚部外面に櫛描による直線文を描くもの（86・88・91）、鋸歯文を描くもの（89）、透し孔を穿つもの（87・92）があり、82は裾部内面にヘラケズリを施す。

鉢（93～117・123） 93～99は口縁部片で、いずれも口縁端部はやや拡張し、内傾もしくは直立する。口縁端部に凹線を施すもの（95・99）、II縁端部に浅い刻印を施すもの（93・98）、II縁部外面に凹線を施すもの（93・94・96・97・99）などの特徴が認められる。また、96の内面にはハケの痕跡が認められ、98の内面は横方向に、99の内外面は縱方向にミガキを施す。本資料は鉢としたが、高杯の可能性もある。

100・103は台付鉢の脚部片で、100の外面は精緻なヘラミガキを施し、内面はナデ調整をする。103は外面をハケ後ナデ調整をする。

101は口縁端部がやや外傾し、口縁部外面に三条の凹線を施す。内面底部付近には工具痕が認められる。口径18cm、器高7cm、底径6.6cmである。102は口縁部が緩やかに立ち上がり、器面全体をハケ後ナデ調整をする。口径20.1cm、器高11.6cm、底径6.2cmである。107は注口付き台付鉢の胴部片で、胴部最大径よりやや上に三条の凹線を施し、外面は体方向の密なヘラミガキをする。外面に赤色顔料を塗布する。106も同様に注口付き台付鉢の胴部片と考えられるが、107とは胎土・調整・器厚が異なることから別個体と判断した。胴部下半に粗いミガキが認められる。

108～117は底部である。底面の形状から丸底のもの（108～111・116）、窪み底状のもの（112・114・117）、高台状のもの（113・115）に大別可能である。器面調整は、外面とも内面ともナデ調整するもの（108・111・114・117）、外面はハケ調整、内面はナデ調整するもの（112）、外面はヘラミガキ、内面はナデ調整するもの（113・115）、内外面ともヘラミガキをするもの（116）がある。123は台付鉢の脚部と考えられる。外面に凹線文を施し裾部に方形透しを穿つ。

有孔土器（104・105） 104は焼成前穿孔をし全体をナデ調整する。105は甕の底部に焼成後穿孔を穿ったものである。外面はハケ後ナデ調整し内面はナデ調整を施す。

器台（118～122・124～128） 118～122はII縁部である。118のII縁端部が下方に拡張し、外面に竹管文を描く。119はII縁端部が上下方向に拡張し、口縁部外面に凹線を施した後二個一単位の円形浮文を貼り付ける。120

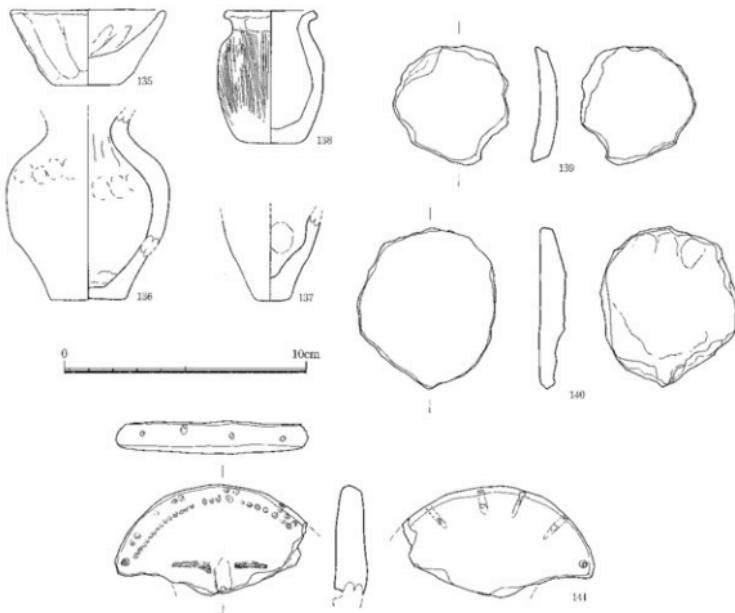


Fig.57 SD005黒褐色上層出土土器・土製品実測図5 (1/2)

は薄手の造りで口縁端部外面に浅い刻目を施す。121は口縁端部は上下方向に延張し、外面に六条の凹線を施した後二個・単位の棒状浮文を縦方向に貼り付ける。122は頭部に3条の凹線を施し内面にミガキが認められる。

124・125は脚柱部で外面はハケ後ナデを施し凹線文を描く。いずれも方形透しを穿つ。127・128は裾部で、裾端部外面に127は4条、128は三条の凹線を施す。

支脚 (129～134) 129は長脚で外反する口縁部に浅い刻目を施し、脚部は筒状を呈するタイプである。130は脚が「Y」字状を呈するタイプである。131・132は短脚で筒状を呈するタイプである。133・134は長脚で口縁部及び脚部が外半するタイプである。133の脚柱部は細い。いずれも指頭圧痕を頭著に残し、全体的に粗い造りである。

#### ミニチュア土器

壺 (136・137) いずれも破片資料である。指頭圧痕を頭著に残し、全体的に粗い造りである。

甕 (138) ほぼ円形で口径3.6cm、高さ5.5cm、底径2.8cmである。肩部外面はハケ後ナデ調整をする。

鉢 (135) 口径6.4cm、高さ3cm、底径2.8cmである。器面全体をナデ調整をする。

#### 土製品

土製円盤 (139・140) いずれも上片を転用した加工円盤で139は直径4.5cm、厚さ0.7cmで140は直径6.5cm、厚さ1.1cmである。

分銅形土製品 (141) 上半部で表面は竹管文による列点を二列と、工具による目の表現が認められる。中央には粘土の剥離痕が認められ鼻を表現したものと考えられる。端部には表面から裏面方向の穿孔が穿たれる。また、上側面から裏面方向に斜め方向の穿孔が認められる。

#### 石器

**石錐（142・143）** 142は長さ9.1cm、幅7.8cm、厚さ4.2cm、重量414.1gであり、砂岩製の有溝石錐である。側辺の全周と片面の中央に敲打により溝が作り出されている。側縁は幅約1cm、深さ約0.2cmの溝が一周し、左図の中央に幅約1.5cm～2cm、深さ0.3cm程度の溝が認められる。全体的に敲打の痕跡が残っていて、あまり精巧な造りとはいえない難い。15区出土。143は長さ6.4cm、幅4.7cm、厚さ2.0cm、重量88.5gであり、砂岩製の切目石錐である。扁平な自然石をそのまま用い、長軸の両端に切目を施している。また、上端の切目付近から側縁にかけてうすい赤色に変色しており、被熱したものと考えられる。T7区出土。

**磨製石斧（144）** 長さ4.2cm、幅3.5cm、厚さ0.9cm、重量24.9gである。薄緑色を呈した、緑泥片岩製の磨製石庖丁である。背部には、研磨以前の成形段階での剥離痕が若干観察される。穿孔されている部位で欠損しているが、穿孔は両面から施されている。刃部は両刃であり、直線状を呈す。K5区出土。

**砥石（145）** 長さ9.1cm、幅5.2cm、厚さ4.9cm、重量219.9gであり、砂岩製の砥石である。長さ6.5cm、幅0.6cm、深さ0.2cmのU字状の溝が一条ある以外は、他の痕跡は何も無い。土砥石の可能性が高いが、用途不明である。J5区出土。

**磨製石斧（146）** 長さ7.4cm、幅4.7cm、厚さ3.0cm、重量226.9gである。緑黒色を呈した、緑泥片岩製の磨製石斧である。断面形態がほぼ長方形で、柱状片刃石斧の基部の可能性が強い。体部には研磨前の剥離痕が観察される。基端面にはツブレ痕が顕著に認められ、一方の側縁にも若干観察される。T7区出土。

**被熱痕のある自然石（147～150）** 147は長さ5.4cm、幅3.2cm、厚さ2.0cm、重量25.7gであり、砂岩製の被熱痕のある自然石である。全体的にうすい桃色に変色しているが、右面の一部のみ濃い赤色に変色している。J5区出土。148は長さ6.4cm、幅4.6cm、厚さ2.0cm、重量61.2gであり、砂岩製の被熱痕のある自然石である。右面の全体と折損面の全てが赤色し、被熱による損傷が激しい。また、左面は変色していないが、ひび割れが起こっている。K5区出土。149は長さ5.0cm、幅3.2cm、厚さ1.3cm、重量17.5gであり、砂岩製の被熱痕のある自然石である。右面と折損面の全てを被熱する。K5区出土。150は長さ2.6cm、幅3.4cm、厚さ2.1cm、重量16.1gであり、砂岩製の被熱痕のある自然石である。折損面全体が赤色に変色している。K5区出土。

**石鎌（151～154）** 151は長さ2.0cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重量0.8gであり、サヌカイト製の平基式石鎌である。一方の側縁の肩がやや張り出した平面形態を呈す。両面とも素材面を残している。K1区出土。152は長さ2.6cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重量1.9gである。サヌカイト製の平基式石鎌であり、両面とともに素材面を残している。L5区出土。153は長さ3.0cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重量1.6gであり、若干基部が凹むタイプのサヌカイト製の右鎌である。最大幅が中央部にあり、基部がすぼまる平面形態をする。片面のみに素材面を残す。K3区出土。154は長さ2.2cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重量1.6gである。欠損が激しいが、サヌカイト製の閉基式石鎌である。両面とも素材面を残さない。P5区出土。

**スクレイバー（155～157）** 155は長さ7.2cm、幅4.4cm、厚さ1.3cm、重量36.9gであり、サヌカイト製のスクレイバーである。背部には刃ツブシ調整をせず、刃部は簡単な片面調整を施し、直線状に作り出す。KS区出土。156は長さ3.6cm、幅3.9cm、厚さ0.6cm、重量12.8gであり、サヌカイト製のスクレイバーである。背部には刃ツブシ調整を施されず、刃部は両面調整で直線状に作り出す。L5区出土。156は長さ4.9cm、幅3.0cm、厚さ0.9cm、重量13.0gであり、サヌカイト製のスクレイバーである。背部には刃ツブシ調整が施され、刃部は両面調整により直線状に作り出されている。J1区出土。

**石鎌（158・159・161）** 158は長さ5.3cm、幅2.5cm、厚さ0.6cm、重量7.6gであり、サヌカイト製の小型石鎌である。両面とも素材面を残している。左右非対称であり、先端がやや鎌状に湾曲していること、刃部の中央に浅い抉りが施されていることなどから石鎌と認定したが、右鎌の可能性もある。K4区出土。159は長さ3.1cm、幅2.3cm、厚さ0.4cm、重量1.7gであり、サヌカイト製の小型石鎌である。素材面を残さない程全体に調整を加え、薄く仕上げている。また、先端部付近に両側縁から浅い抉りが施されていることから、小型の石鎌として認定した。J3区出土。161は長さ8.7cm、幅4.2cm、厚さ1.4cm、重量54.4gであり、サヌカイト製の大型石鎌である。先端部を若干欠損するが、背部には刃ツブシ調整が施されている。刃部は両面調整によりやや内湾する形状に作り出

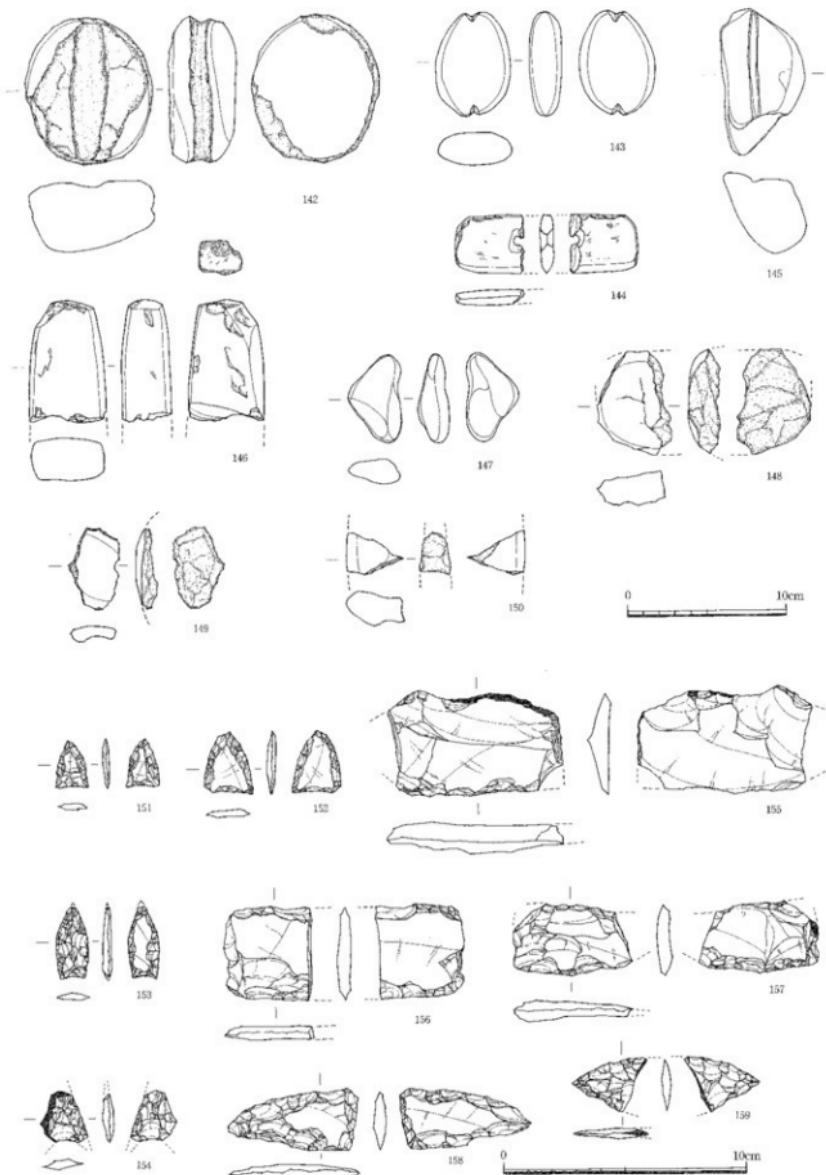


Fig.58 SD005黑褐色土层出土石器实测图1 (1/2 · 1/3)

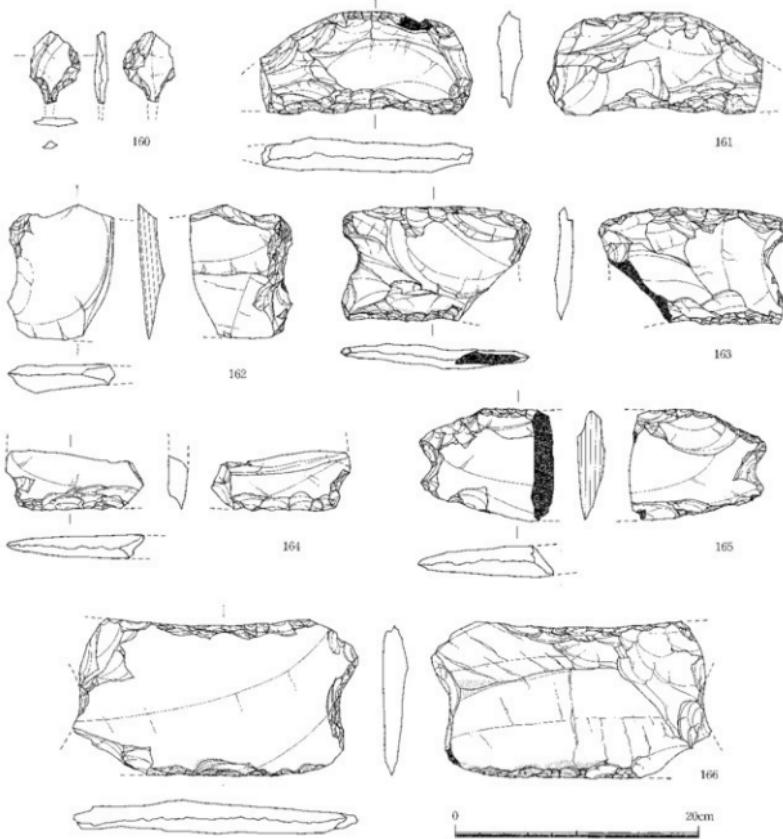


Fig.59 SD005黒褐色土層出土石器実測図2 (1/2)

されている。また、刃部の先端付近には自然面を残している部位もある。

石錐（160） 長さ2.9cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm、重量2.7gであり、サヌカイト製の石錐である。つまみを持つタイプの石錐であるが、機能部をほぼ欠損する。つまみ部の両面ともに素材面を残す。H2区出土。

打製石庖丁（162～166） 162は長さ4.2cm、幅5.5cm、厚さ1.2cm、重量26.2gであり、サヌカイト製の打製石庖丁である。側縁に集中的に調整を施し、抉り部を作り出している。刃部と考えられる部位に調整は施されていないことから、未製品かもしれない。また、刃部に加工を施す以前の最も原初的な形態の可能性もあるが、刃部には摩滅痕は観察されない。石材の節理方向と素材剥片の剥離方向が平行することから、節理方向に沿って剥離していたことが窺える。J5区出土。163は長さ7.7cm、幅4.7cm、厚さ1.0cm、重量33.6gであり、サヌカイト製の打製石庖丁である。背部に弱めの刃ツブシ調整は施し、刃部は両面調整で直線状に作り出される。また、刃部には光沢をもった摩滅痕が認められ、抉部にも摩滅痕が観察される（網掛け部）。J5区出土。164は長さ5.7cm、幅2.5cm、厚さ1.0cm、重量16.3gであり、サヌカイト製の打製石庖丁の一部である。刃部は両面調整で直線状に作り出され

おり、摩滅痕は認められない。K5区出土。165は長さ5.5cm、幅4.7cm、厚さ1.3cm、重量32.1gであり、サヌカイト製の打製石庖丁である。背部には刃ツブシ調整が施され、一部に自然面を残し、刃部は片面調整で外溝する。また、石材の節理方向と素材剥片の剥離方向が平行することから、節理方向に沿って剥離していたことが窺える。II区出土。166は長さ11.3cm、幅6.5cm、厚さ1.3cm、重量108.5gである。ほぼ完形のサヌカイト製の打製石庖丁であり、背部には刃ツブシ調整が施されている。刃部は両面調整により直線状に作り出されており、光沢を持った摩滅痕が認められる（網掛け部）。T7区出土。

この他、SD005黒褐色土層からは、石錐6点（凹基式2点、若干基部が凹むもの2点、先端のみのもの2点）、磨製石庖丁の石材片が3点、打製石庖丁、スクレイパーなどが多量に出土している。

#### SD005暗黒褐色土層出土遺物 (Fig.60~62, Pla.49~51)

##### 弥生土器

壺（1~18） 1は直頸壺で、頸部外面に四条の突帯を貼り付け、浅い刻みを施す。2は無頸壺で口縁部付近に二個の紐通し孔を穿つ。3・4は口縁部が外方向に直線的に伸び、口縁部外面に二条の貼り付け突帯を持ち、突帯に浅い刻目を施す。5は口縁端部が上下方向に拡張し口縁部外面に二条の凹線を施す。口縁部内面に刺突文と円形浮文を施し、頸部外面には二条の突帯を貼り付ける。6は口縁端部が上下方向に拡張し、口縁部外面に二条の凹線を施す。口縁部内面に斜格子文を施し、頸部外面には棒状工具で斜め方向の列点を施し、ヘラミガキ調整をする。7は口縁部を欠き、頸部外面と内面下半部は縦方向の精緻なヘラミガキを施す。頸部外面に幅広の薄い突帯を貼り付け、棒状工具で斜め方向の列点を施す。底径5cmである。8は頸部外面に断面三角形を呈する突帯を一条貼り付け、胴部外面はヘラミガキをし、内面はハケ後ナデ調整を施す。9は口縁端部が上下方向に拡張し、口縁部外面に二条の凹線を施す。口縁部内面に斜格子文を描き四個の穿孔が認められる。10は広口壺で、口縁端部が上下方向に拡張し外面に二条の凹線を施す。胴部外面を精緻なヘラミガキをし内面はナデ調整を施す。11はほぼ完形で、口縁端部が上方向に拡張し外面に3条の凹線を施す。胴部上半外面はハケ後ナデ調整し、木葉状の記号文を描く。胴部下半外面は精緻にヘラミガキをし、内面はナデ調整を施す。口縁部内面にはミミズバレ状の浮文を貼り付ける。口径9.9cm、器高20.3cm、底径6.1cmである。12は口縁部が大きく外反し、口縁端部は上下方向に拡張し垂下する。口縁部外面に斜格子文をし、内面には刺突文で二状の列点を構成している。13・14は口縁端部が上下方向に拡張し、外面に13は3条、14は二条の凹線を施す。頸部外面に指頭圧突帯を貼り付ける。15は口縁端部が上下方向に拡張し口縁部外面に二条の凹線を施し、二条一単位の棒状浮文をその上から貼り付ける。また、頸部外面に指頭圧突帯を貼り付け、胴部内面にはハケ調整が認められる。16は口縁端部が上下方向に拡張し口縁部外面に二条の凹線を施し、頸部外面は縱方向、内面は横方向のハケ調整をし、頸部外面に刷毛原体による斜め方向の列点文を施す。17は口縁端部が上下方向に拡張し口縁部外面に斜格子文を施し、頸部外面に指頭圧突帯を貼り付ける。18は口縁部片で、口縁端部が下方に拡張し垂下する。口縁部外面に二条の凹線を施し、二条一単位の円形浮文をその上から貼り付ける。

甕（19~21） 19は口縁部片で、「如意」状口縁を口縁端部は外傾し浅い刻目を施す。胴部外面には六条のヘラ状工具による沈捺が認められる。20は胴部下半片で、外面は縦方向の精緻なミガキを、内面はランダムなやや粗いミガキを施す。底径9.2cmである。21は口縁部片で、胴部外面は密にヘラミガキが施され、表面に赤色顔料の塗布が認められることから壺か鉢であることから壺か鉢である可能性もある。

器台（22・23） 22は脚柱部片で、外面はハケ後ナデを施し据端部は凹線文を描く。据部に方形透しを穿つ。23は口縁部で、口縁端部は上方に拡張し、口縁部外面に四条の凹線を施す。

##### 蓋（29） 小型のもので、外面は縱方向に精緻なヘラミガキを施す。恐らく壺蓋と考えられる。

高杯（30~34） 30口縁部片で、口縁端部は拡張し形態化した二条の凹線を施す。31は脚柱部片で外面に柳原体による直線文を一条描く。32は脚部で据部外面にヘラ書き沈捺をし、据端部外面には3条の凹線文と縦方向の列点文を描く。33は据部片で、据端部外面に形態化した凹線文を二条施し、据部外面には刷毛原体による縦方向の直線文と、二条一単位の円形透しを穿つ。34は据部片で据部外面に刻目列点と網織文を施す。

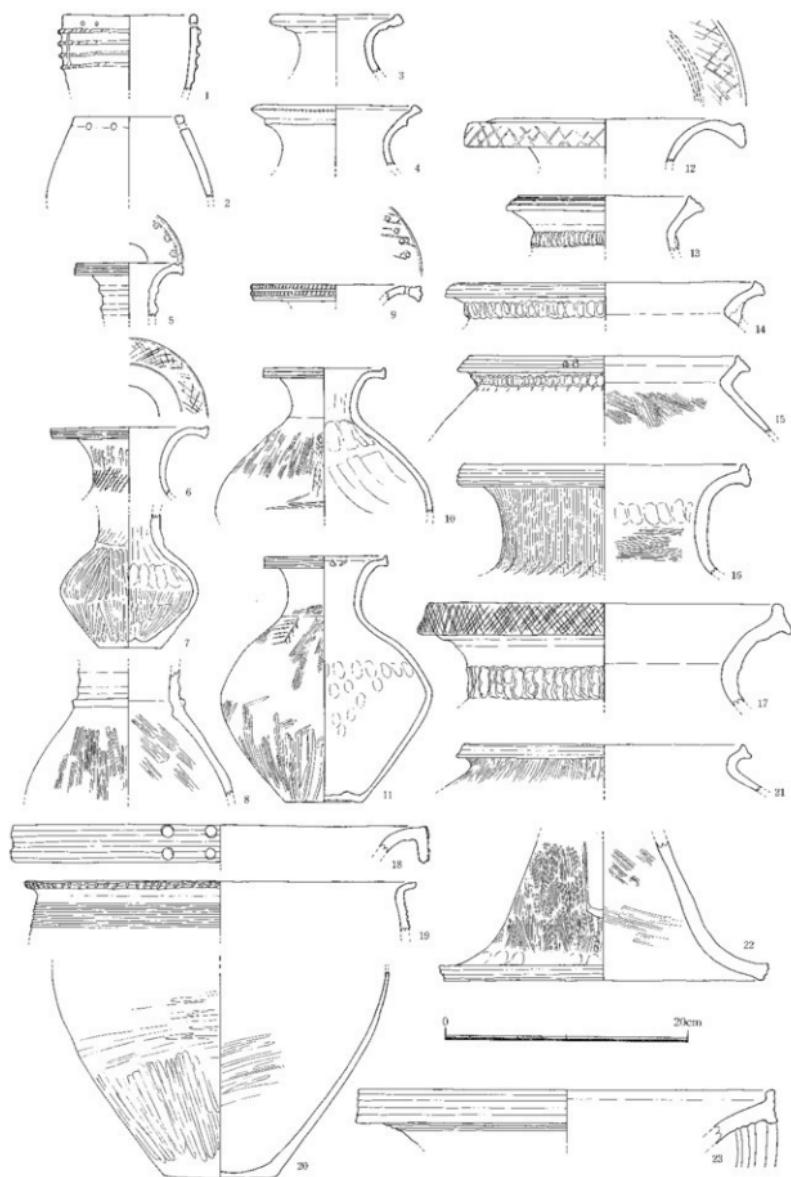


Fig.60 SD005暗褐色上層出土土器実測図1 (1/4)

鉢（24～28） 24台付鉢の脚部で、低脚である。器部外面には二個の透し孔と竈状工具による沈線を巡らす。25は台付鉢の脚部で外面には、三本一単位の竈状工具による沈線文を二帯巡らせる。また、脚部に矢羽状の透し孔を穿つ。26はコップ形を呈するもので、器面全体をナデ調整する。27は台付鉢の脚部で、外面は縦方向に丁寧にヘラミガキを施す。円盤充填された状態が明瞭に見て取れる資料である。28は一応鉢としたが、別器種である可能性も大いに考えられる。外面口縁部は縦方向のハケ後ナデ調整をし、胴部最大径付近には粘土紐の剥離痕が認められる。突帶を巡らしていた可能性が高い。胴部内面は図上左から右方向にヘラケズリをする。また、外面には赤色顔料の塗布が認められる。

有孔土器（4・5） いずれも甕に焼成後穿孔を穿ったものである。いずれも外面は縦方向に精緻なヘラミガキをし、内面はナデ調整をする。

#### ミニチュア土器

壺（37・38） いずれも破片資料である。38の内面には指頭圧痕を顯著に残し、いずれも全体的に粗い造りである。

#### 土製品

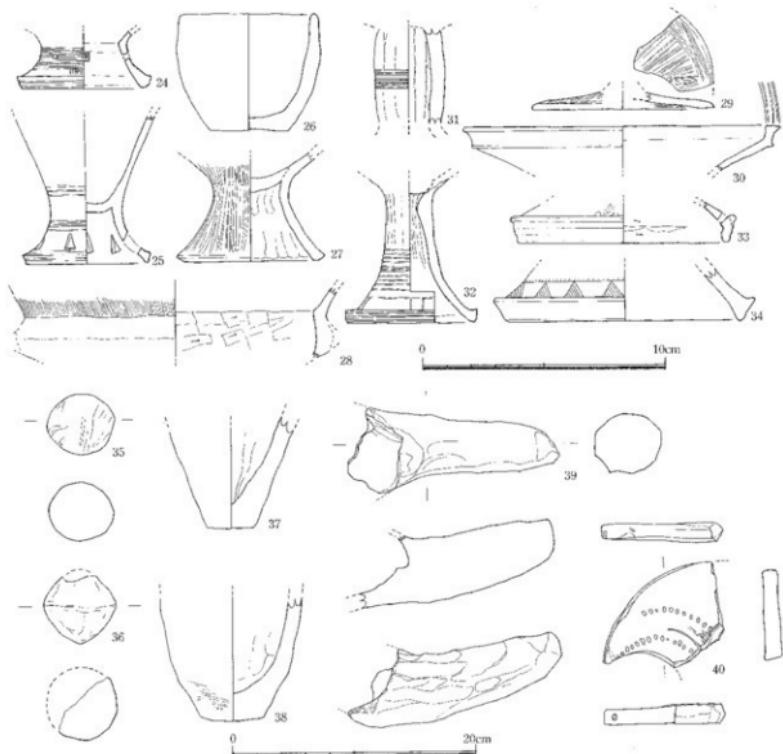


Fig.61 SD005暗黒褐色土層出土土器・土製品実測図2 (1/2・1/4)

土玉（35・36） いずれも穿孔を穿たないもので、35は完存し、36は約半分が欠損する。直径は、35は2.8cm、36は3cmである。いずれも表面全体は粗くナデ調整がされる。

匙形土製品（39） 柄部は完存し器面全体に指頭圧痕を顕著に残す。

分銅形土製品（40） 上半部片で表面は竹管文による列点を二列と弧状に描き、その間にハケ口を施す。端部側面上方から下方に向けて穿孔を穿つ。器面全体にナデ調整を施す。

#### 石器

石鎌（41～48） 41は長さ2.6cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重量1.9gである。脚部の両端を欠損するが、サスカイト製の凹基式石鎌である。両面とも素材面を残さない。T8区出土。42は長さ2.4cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量1.0gである。サスカイト製の凹基式石鎌であり、完形である。両面とも素材面は残さない。T8区出土。43は長さ2.1cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重量1.1gである。サスカイト製の平基式石鎌であり、若干を欠損する。両面とも素材面を残さない。H4区出土。44は長さ2.6cm、幅1.2cm、厚さ0.7cm、重量1.6gである。サスカイト製の平基式石鎌である。右岡の中央部分に、剥離がうまく伸びず、瘤状の突起物が残存している。両面とも素材面は残さない。T8区出土。45は長さ2.5cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重量3.3gである。若干に基部が凹むタイプのサスカイト製の石鎌である片面のみに素材面を残し、ほぼ完形である。I3区出土。46は長さ3.1cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重量2.0gである。サスカイト製の石鎌であり、基部が若干凹む。完形品であり、片面のみに素材面を残す。H2区出土。47は長さ3.6cm、幅2.7cm、厚さ0.6cm、重量4.9gであり、サスカイト製の石鎌である。基部が若干凹むタイプである。先端部を若干欠損するがほぼ完形である。両面とも素材面を残しているが、左面の素材面のみ風化が激しく、周辺の調整が施された剥離面とは風化の度合いが異なる。K6区出土。48は長さ3.4cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm、重量1.1gである。サスカイト製の凸基式石鎌である。最大幅は中央よりやや先端にある。完形であり、両面とも素材面は残さない。J5区出土。

打製石庖丁（49～52） 49は長さ6.2cm、幅5.1cm、厚さ1.1cm、重量54.8gであり、サスカイト製の打製石庖丁である。背部は刃ツブシ調整が施され、刃部は両面調整により直線状に作り出される。H4区出土。50は長さ6.0cm、幅4.7cm、厚さ1.0cm、重量25.8gであり、サスカイト製の打製石庖丁である。背部には刃ツブシ調整が施されている。抉りが2箇所作り出されており、特異である。刃部は欠損により不明である。T8区出土。51は長さ6.6cm、幅4.3cm、厚さ1.0cm、重量35.4gである。サスカイト製の打製石庖丁であり、背部には弱めの刃ツブシ調整は施されている。通常、短辺の両側縁に抉りが施されるが、この資料は片方のみに施されている。刃部は両面調整によりやや外湾する。F2区出土。52は長さ5.0cm、幅4.8cm、厚さ0.9cm、重量18.7gであり、サスカイト製の打製石庖丁である。欠損により刃部は残存しないが、背部には刃ツブシ調整が施されている。I2区出土。

磨製石斧（53） 長さ8.5cm、幅3.7cm、厚さ1.3cm、重量64.0gであり、薄緑色を呈す、綠泥片岩製の磨製石斧である。節理に沿うように素材剥片を作出していることが窺えるが、左面は丁寧に研磨されているが、右面全体には研磨以前の成形段階での剥離痕が若干残されている。両刃の刃部には研磨後の刃こぼれが認められる。また、厚さや平面形態から、磨製石剣の欠損品を再利用したもの可能性が高い。L3区出土。

スクレイバー（54・55） 54は長さ4.5cm、幅3.9cm、厚さ1.2cm、重量26.4gであり、サスカイト製のスクレイバーである。背部には刃ツブシ調整が施され、側縁には自然面が残っている。刃部は両面調整により直線状を呈す。J5区出土。55は長さ3.0cm、幅3.3cm、厚さ1.1cm、重量13.1gであり、サスカイト製のスクレイバーである。素材剥片に両面から簡単な調整を施して刃部を作り出していること以外は、欠損がはげしいため不明である。左図では刃部を越えて中央にまで強い摩滅痕が認められ、右図には刃部に稜が不明瞭になっており、中央にも強い摩滅痕が観察される。K4区出土。

石鎌（56） 長さ3.4cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重量3.6gであり、サスカイト製の小型石鎌である。完形品であり、両面とも素材面を残す。左右非対称であり、先端がやや湾曲していること、刃部の中央に浅い抉りが施されていることなどから小型の石鎌と認定した。I5区出土。

この他SD005暗黒褐色上層からは、石鎌1点（平基式1点）、磨製石庖丁の石材片1点、打製石庖丁、スクレイ

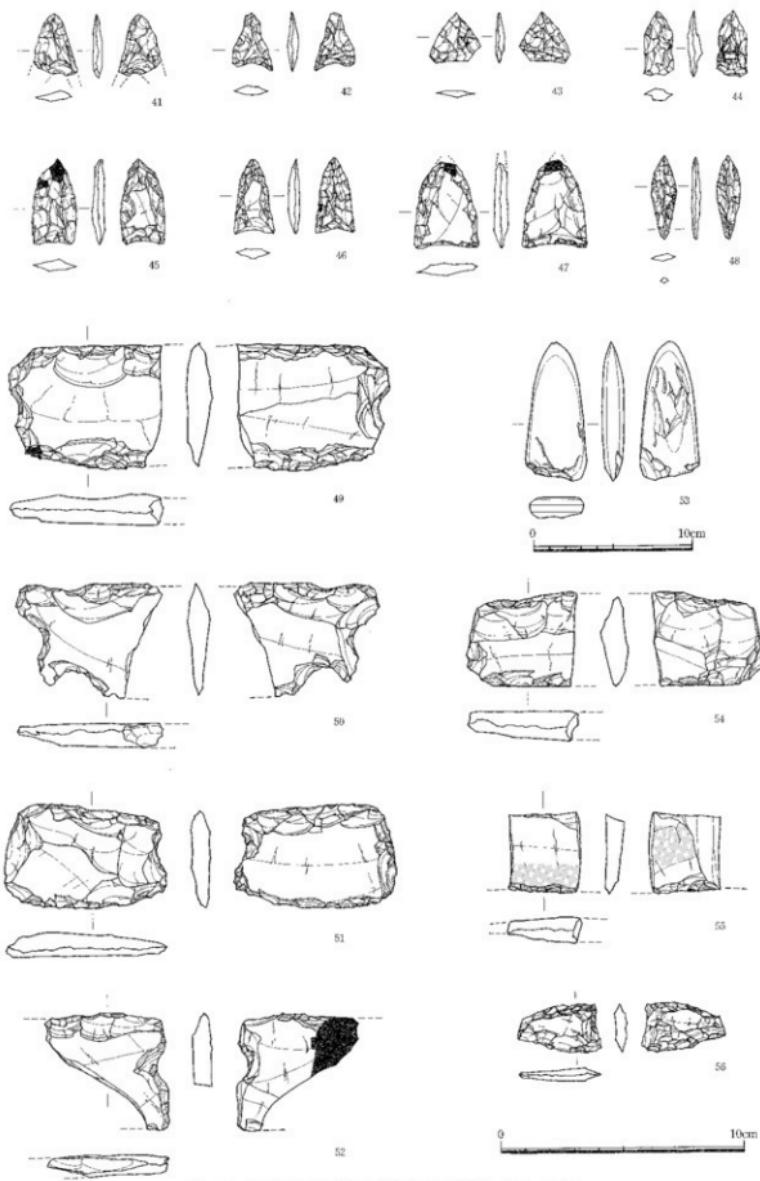


Fig.62 SD005暗褐色上層出土石器実測図 (1/2・1/3)

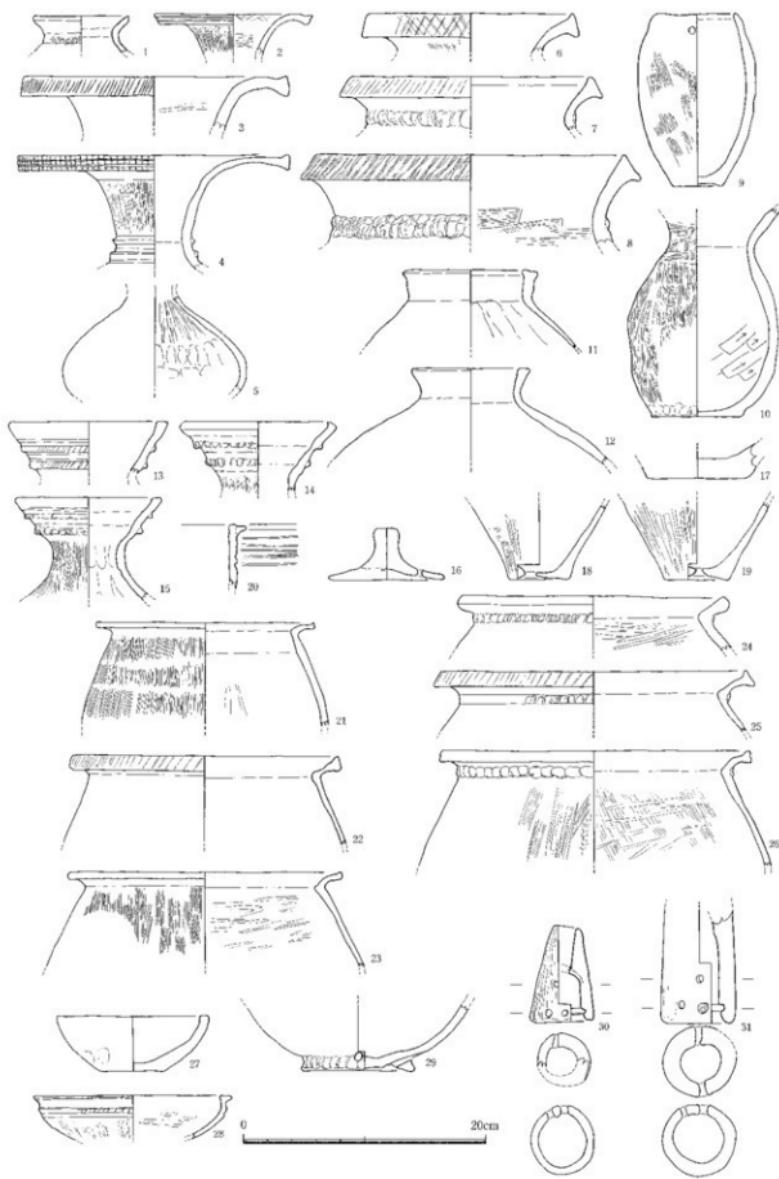


Fig.63 SD005黒灰色土層出土上器尖測図1 (1/4)

バーなどが出土している。

SD005黒灰色土層出土遺物 (Fig.63~68, Pla.53~55)

弥生土器

壺 (1~17) 1は小型のもので、胴部外面はハケ後ナデ調整をする。2は広口壺で、口縁部に二条の凹線を施し口縁部内面に斜格子文を描く。3は口縁端部が上下に拡張し口縁部外面に斜め方向の刻目列点を施す。4は口縁部が外面へ伸び、口縁部は上下に拡張し口縁部外面に二条の凹線を施した後、刻目列点を施す。5は胴部片で算盤玉状を呈し、外面は精緻にヘラミガキを施す。また、外面には赤色顔料の塗布が認められる。6は口縁端部が上下に拡張し口縁端部外面に斜格子文を施す。7・8は口縁端部が上下方向に拡張し口縁部外面に斜め方向の刻目列点を施す。また、頸部外面に指頭圧突帯を貼り付け、8の胴部内面にはハケ調整が認められる。9は無頭壺で制部外面は縱方向にヘラミガキし、内面にはナデ調整を施す。10は粗製の壺で口縁部を欠く。胴部外面はハケ後ナデ調整し、内面下半にはT工具による下から上方向の搔き取り痕が認められる。11・12は短頸壺で口縁端部は拡張し、いずれも表面をナデ調整する。13~15はいずれも口縁部が外方向に直線的に伸び、口縁部外面に二条の貼り付け突帯を持ち、突帯に浅い刻目を施す。14・15は頸部外面にハケ調整の痕跡が認められる。17は底部片で内面を丁寧にナデ調整する。

壺 (16) 小型のもので二個の紐通し孔を有す。恐らく壺蓋と考えられる。

有孔土器 (18・19) いずれも甕の底部に焼成後穿孔を穿ったものである。外面は縱方向にヘラミガキを施し内面はナデ調整を施す。

甕 (20~26) 20は口縁部片で外面に四条の範状工具による沈線を施す。口頸部片である。「逆L字形」のL字模様を呈するものと思われる。21~26は口縁部で、口縁端部は上下方向に拡張する。口縁部外面に刻目列点を施すもの (22・25)、胴部外面にハケ目が残るもの (21・23・26)、頸部外面に指頭圧突帯を貼り付けるもの (24・25・26)、胴部内面にミガキを施すもの (23・24・26)などの特徴がある。

鉢 (27~29・32~41) 27は小型のもので表面をナデ調整し、口径11cm、器高4.6cm、底径5cmである。28は口

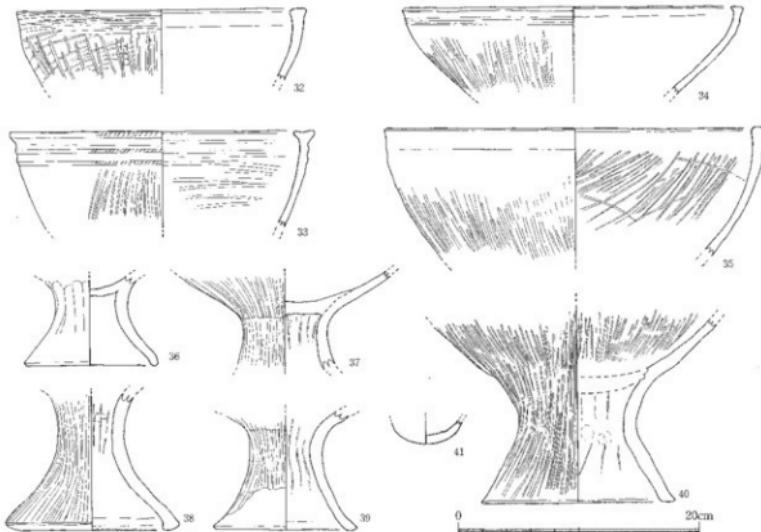


Fig.64 SD005黒灰色土層出土上上器実測図2 (1/4)

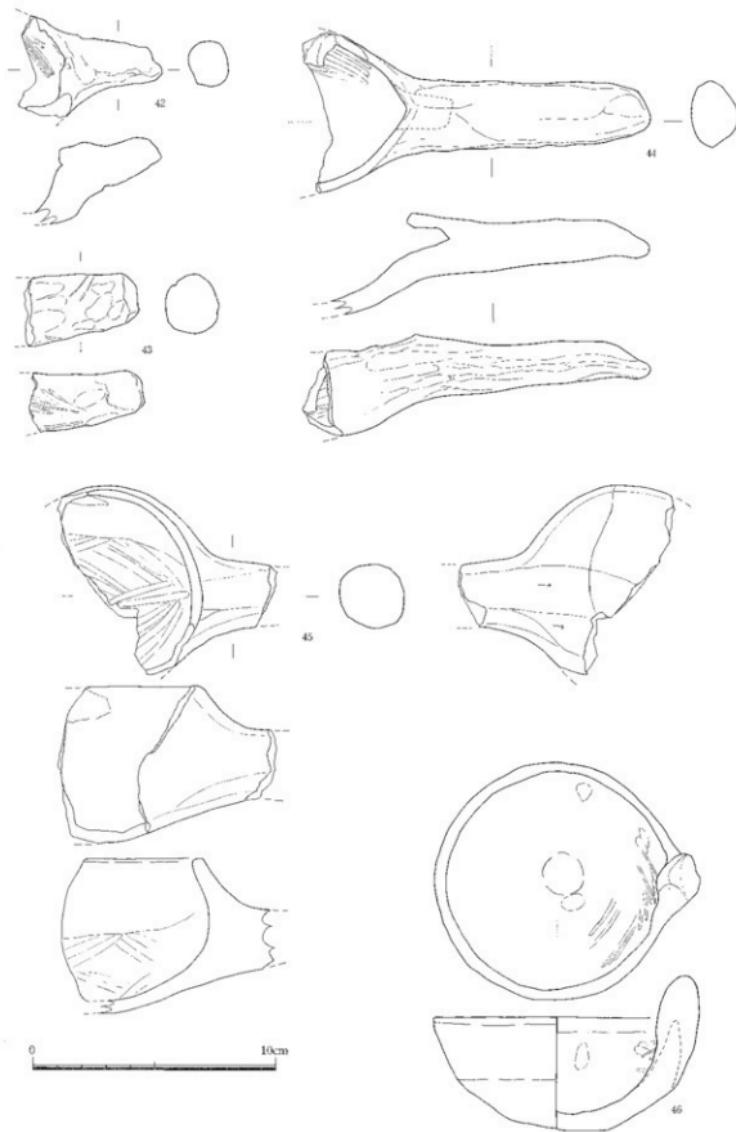


Fig.65 SD005黑灰色土層出上上製品實測圖1 (1/2)

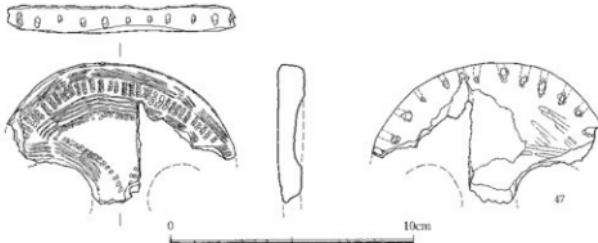


Fig.66 SD005黒灰色土層出土土製品実測図2 (1/2)

縁端部は拡張し、口縁部外面に二条の凹線を施し、口縁端部外面と凹線間に浅い刻目を施す。体部下半は縦方向、内面は横向方にヘラミガキをする。29は底部に指頭圧突起を貼り付け、突起直上から底面に斜め方向に穿孔を穿つ。32~41は台付鉢である。これらの中には高环の可能性が高いものもあるが、ここでは一括して鉢として報告する。32~35は口縁部でいずれも内外面とも精緻なヘラミガキを施す。33は口縁部外面に3条の凹線を施し、口縁端部外面と凹線間に浅い刻目を施す。36~40は脚部でいずれも外表面は精緻なヘラミガキを施す。38の脚部端部は内側に拡張する。41は円盤充填用の円盤が剥離したものである。

特殊土器 (30・31) 類例を見ない形状を呈するもので、ここでは一応特殊土器として紹介しておく\*。30・31はいずれも筒状を呈し、外面に精緻な縱方向のヘラミガキを施す。30は団上とした部分は平まり、内面は閉塞されていた状態が看取される。いずれも胴部中央の対称位置に円形の孔を穿ち、底部に二個の穿孔を有する。底面部内面は溝状を呈する。用途としては何かの装飾品の可能性が考えられる。

#### 土製品

匙・杓子形土製品 (42~46) 42~44は匙形土製品と考えられ、42・44は身部を欠き柄部は完存する。43は柄部のみの破片である。これらには器面全体に指頭圧痕を残す42は柄部長3.2cm、44は柄部長8.8cmである。45・46は杓子形土製品と考えられる。45は柄部と身部の半分を欠き、身部内面はやや粗いミガキをし、身口縁部は強いヨコナデを施す。身部外表面は強い板ナデを施す。46は円形の鉢に垂直に短い柄が付くもので、身部内面に粗いミガキが認められる。身部口径9.8cm、身部高4.7cm、柄部長2cmである。

分銅形土製品 (47) 上半部片で、表面は外から内に二個一単位の列点文を二列、ハケ目、二個一単位の列点文を一列、弧状に描く。また側縁部は外から内に向かってハケ目、二個一単位の列点文を一列を施す。端部側面上方から下方に向けて穿孔を施す。器面全体にヘラミガキ調整を施す。

#### 石器

石錐 (48) 長さ10.9cm、幅5.0cm、厚さ1.9cm、重量108.7gであり、凝灰岩製の大型石錐である。両面ともに自然面を残しており、扁平な石材を利用していたことが窺える。周辺部のみに両面から調整を施しただけの簡単な作りである。また、左図の自然面には、刃部に対して右斜め上方に擦痕様のキズが観察される。しかし、軟質な石材であるため、このキズが使用痕や装着痕を現しているのか判断することはできなかった。J5区出土。

打製石庖丁 (49・52) 49は長さ11.2cm、幅4.8cm、厚さ1.5cm、重量97.7gである。サヌカイト製の打製石庖丁であり、完形である。背部は刃ツブシ調整が施され、刃部は両面調整でやや内湾する。H3区出土。52は長さ4.7cm、幅5.5cm、厚さ1.1cm、重量30.9gであり、サヌカイト製の打製石庖丁である。刃部はそれほど明瞭に作り出されていないが、片面調整により直線状に作り出している。T8区出土。

スクレイパー (50・51・53) 50は長さ10.1cm、幅5.9cm、厚さ0.9cm、重量50.7gであり、サヌカイト製のスクレイパーである。背部は刃ツブシ調整が施され、自然面も残存し、刃部は両面調整によりほぼ直線状に作り出される。I2区出土。51は長さ4.5cm、幅5.2cm、厚さ1.6cm、重量25.4gであり、サヌカイト製のスクレイパーである。平面形態が椭円形を呈すと考えられる。上端は刃ツブシ調整が施され、刃部は両面調整により外湾する。H3区

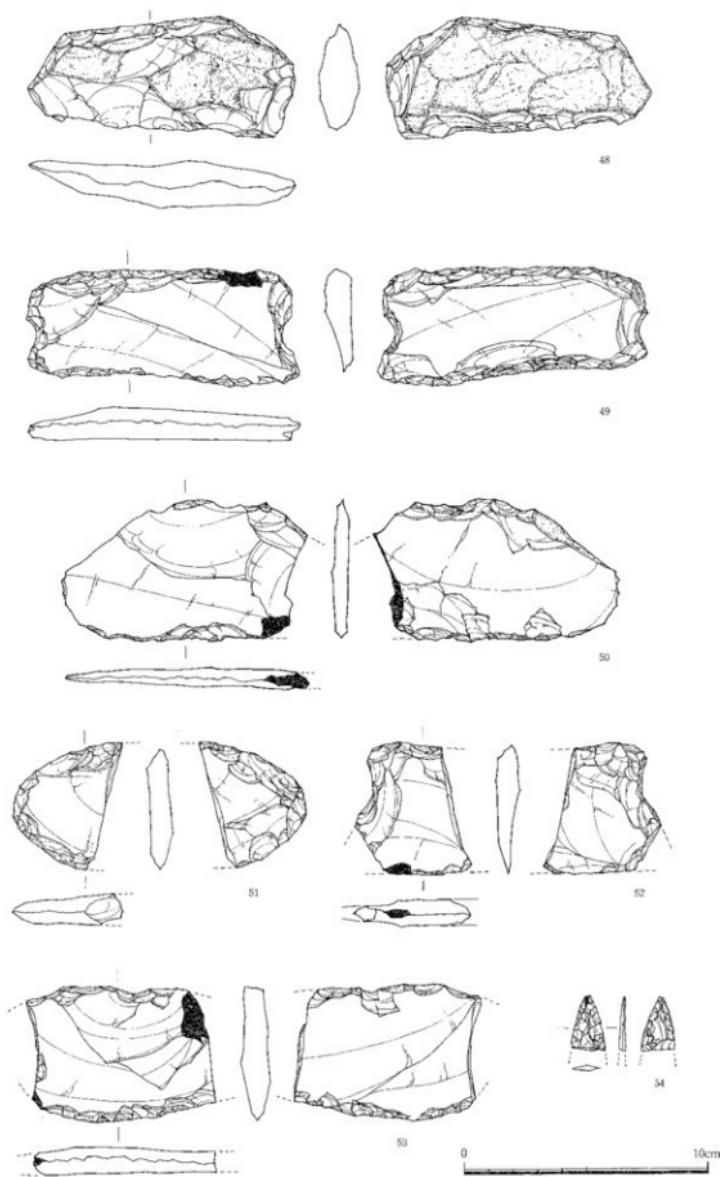


Fig.67 SD005黑灰色上层出土石器实测图1 (1/2)

出土。53は長さ7.7cm、幅5.7cm、厚さ1.2cm、重量58.6gであり、サスカイト製の打製石砲である。背部は刃ツブシ調整が施されており、刃部は両面調整により若干外湾する。J6区出土。

石鎌（54） 長さ2.3cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重量1.3gである。サスカイト製の石鎌であるが、下半部を欠損するため形態は不明である。両面とも素材面は残さない。T7区出土。

凹石（55） 長さ9.9cm、幅7.8cm、厚さ6.1cm、重量746.4gであり、砂岩製の凹石である。両面の中央部に敲打痕が認められる。左面は長軸方向に広がり、右面では短軸方向に広がっている傾向が窺える。T7区出土。

その他、SD005黒灰色土層からは、香色山山流紋岩製の底石1点と、若干のスクレーパーなどが出土している。

#### SD020出土遺物 (Fig.69, Pla.55)

##### 弥生土器

壺（1） 口径22.6cmで、口縁端部は上下方向にやや拡張する。表面はナデ調整をする。

高杯（2） 底径18.3cmの脚部付で、外面をナデ調整し、内面はヘラケズリする。脚部に円形の透孔を穿つ。

##### 小穴

#### SP098出土遺物 (Fig.70, Pla.26)

##### 石器

石鎌（1） 長さ2.9cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重量2.4gであり、サスカイト製の平基式石鎌である。両面ともに素材面を残す。

#### 黄橙色シルト層出土遺物 (Fig.71, Pla.55)

##### 石器

大型船刀石斧（1） 長さ14.7cm、幅5.0cm、厚さ7.6cm、重量1,011.4gであり、砂岩製の大型船刀石斧である。SD005の暗黒褐色上層を除去した際、その下層である黄橙色シルト層に突き刺された状態で検出された。刃部はツブレ痕が顕著である。基部にはツブレ痕など観察されない。M4区出土。

#### 淡青灰色土層出土遺物 (Fig.72, Pla.56)

##### 弥生土器

壺（2） 同一個体と思われる破片から復元した。頸部及び胴部最大径付近に施状工具による沈線をし、器面全体に密なヘラミガキをする。また底部は粘土繩を貼り付けて高台状を呈し、窪み底状になる。底径6.8cmである。

壺（1・3） 1は口縁端部や下部に突帶を貼り付け、浅い刻口をする突帶文系の壺である。3は所謂「段壺」で、口縁端部と段の部分に刻目を施す。内外面ともにまばらなミガキをし、口径35.3cmである。

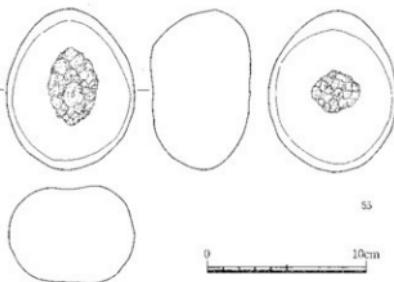


Fig.68 SD005黒灰色土層出土石器実測図2 (1/3)

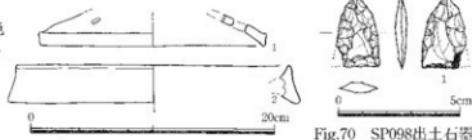


Fig.69 SD020出土土器実測図 (1/4)



Fig.70 SP098出土石器実測図 (1/2)

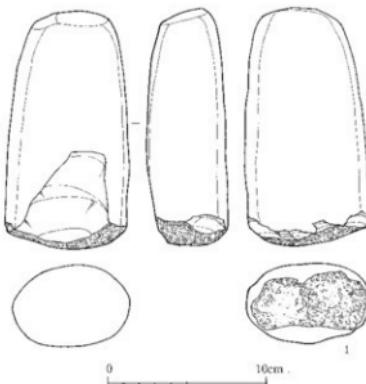


Fig.71 黄橙色シルト層出土石器実測図 (1/3)

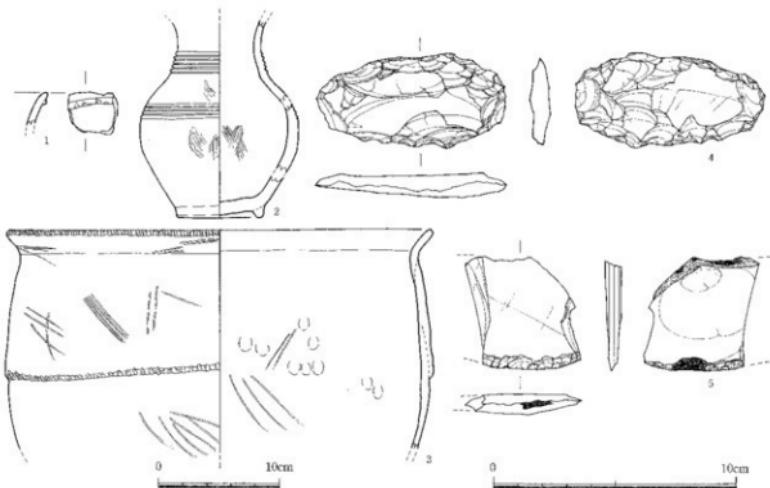


Fig.72 淡青灰色土層出土上器・石器実測図 (上器1/4、石器1/2)

#### 石器

スクレイパー（4・5） 4は長さ7.7cm、幅4.0cm、厚さ1.0cm、重量32.3gであり、サヌカイト製のスクレイパーである。平面形態が楕円形を呈し、全周に両面調整を加える。刃ツブシ調整は無く、背部と刃部の区別は無いものと考えられる。H3区出土。5は長さ4.7cm、幅4.7cm、厚さ0.9cm、重量18.8gであり、サヌカイト製のスクレイパーである。背部は全て自然面で覆われており、刃ツブシ調整は施されていない。刃部は両面調整によりほぼ直線状になる。H3区出土。

#### 古墳時代～中世 (Fig.73、Pla.56)

##### 須恵器

高环（1） 基部のみ残存する。杯部が碗形を呈するタイプで、古墳時代のものと考えられる。C6区灰茶層出土。

皿（2） 口径11cm、器高1.6cm、底径8.1cmで、器面全体をナデ調整し、外面には火燎状の焼成痕が認められる。奈良時代のものと考えられる。C4区灰茶層出土。

坏（3） 底部のみの破片である。底径9.8cmで、底部外面に高台を貼り付ける。奈良時代のものと考えられる。B6区灰茶層出土。

##### 陶器

押鉢（4） 備前焼と考えられる口縁部片で、口縁端部は玉縁状を呈し、内面には八条一単位のやや粗い摺目が刻まれている。口縁部及び摺目の特徴から、16世紀後葉～17世紀第1四半期のものと考えられる。清SD021出土上。

##### 瓦

軒丸瓦（5） 瓦当部片である。外面に巴文と連珠文が認められ、瓦当面の約8分の1程度が残存する。宝町時代後半（16世紀後半）のものと考えられる。表面採集資料。

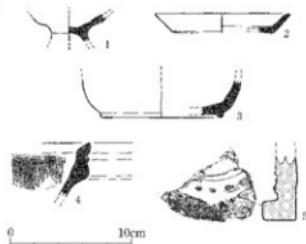


Fig.73 古墳時代～中世の遺物実測図 (1/4)



Fig.74 近代の遺物実測図 (1/4)

近代 (Fig.74、Pla.57)

#### 磁器

軍用食器<sup>①</sup> (1・2) 1は汁碗で口径10.6cm、器高6.9cm、底径8.4cmである。2は飯碗で口径16cmである。いずれも口縁内面に旧陸軍の軍章である星印が青色に染め付けされる。また、1の底部外面中央に「名陶」<sup>②</sup>と染め付けされている。1はG1区表土出土、2はU1区表土出土。

#### ガラス

瓶 (3~5) 3はスカイブルーの色調で、表面は無文である。おそらく表面には紙が貼られていたと考えられる。口径2cm、器高22cm、底径4.6cmである。出土時には口縁部に腐食した王冠で蓋がされた状態であった。4・5は牛乳瓶で、色調は胎色状にやや墨った透明色である。4には胴部外面に「森岡虎夫」「香川縣牛乳協會」「電話普通寺番」と陽刻され、背面には「高温」「殺菌全乳」「一、八分入」と陽刻されている。口径2.2cm、器高17.3cm、底径4.4cmである。5には同様の陽刻がされるが、電話番号の部分は「電話普通寺一七四番」となっている。これらも出土時には口縁部に腐食した王冠で蓋がされた状態であった。これらのガラス瓶は近接した場所から、いずれも蓋がされたままの状態で横倒しで出土した。

これらの遺物は昭和期の陸軍病院と関係し、病棟が取り壊された際にそのまま残されたものと考えられる。いずれもU1区灰黄色粘質土層出土。

#### 【註】

- 1) 軍用食器は基本的に飯碗、汁碗、皿の三器種で構成されていたという。
- 2) 「名陶」とは名古屋製陶の略号で、現在の鳴海製陶の前身である。名古屋製陶は、昭和13（1938）年に名古屋市北区弦町に最新鋭のトンネル窯を整備した工場を建設した。第二次大戦中の昭和18（1943）年、住友財團に買収され南区へ移転し、終戦後鳴海製陶として独立した（江浦ほか 2000,服部ほか 2000）。

#### 【引用・参考文献】

- 江浦 洋ほか 2000 『駿波宮跡北西の発掘調査』 (財) 大阪府文化財調査研究センター  
 乗岡 実 1999 『近世前後の攝鉢』 [関西近世考古学研究] 1 国内近世考古学研究会  
 服部芳人ほか 2000 『石築網東古墳群・石築網東遺跡』 三重県埋蔵文化財センター  
 \*松木和彦氏の御教示によれば徳島県徳島市名東道路の4号穴式住居（SB2004）埋土より当遺跡出土資料と類似した資料が1点出土しているとのことである。住居跡の時期は、弥生時代後期前半である。  
 管原 康夫ほか 1995 『名東遺跡』 徳島県教育委員会・(財) 徳島県埋蔵文化財センター

## IV. 自然科学分析

### 旧練兵場遺跡出土土器付着顔料の分析

#### 1. 分析対象遺物と分析内容

##### 1-1 分析資料

- 土器片S-44 …… 住居跡SH044柱穴Gから出土 (Fig.75)
- 土器片S-5 …… 溝SD005黒褐色土層から出土 (Fig.55-107)

##### 1-2 分析内容

- 顔料分析（赤色顔料）



Fig.75 SH044出土  
赤色顔料塗布土器

#### 2. 使用機器

- エネルギー分散型ケイ光X線分析装置 (XRF) (セイコーインスツルメンツ㈱SEA5230)

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光X線を検出することにより元素を同定する。

\*分析条件 モリブデン管球使用、大気条件下、コリメータ0.1mm、管電圧50kV

#### 3. 方法

土器の赤色部分と赤くない部分をXRFで分析し、その差を求ることにより赤色顔料を同定した。

#### 4. 結果

- 土器片S-44の赤色部分から主な元素として水銀 (Hg) が検出された。赤色顔料は水銀朱 (Hgs) である。
- 土器片S-5の赤色部分からは主な元素として鉄 (Fe) が検出された。顔料であるならばベンガラ (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) と考えられた。

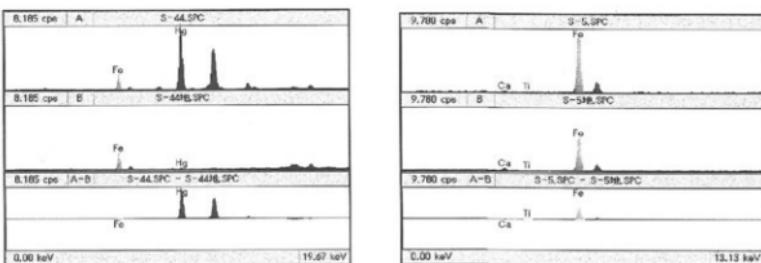


Fig.76 分析資料の赤色部分と赤くない部分のXRF差スペクトル

## V. 小結

### 遺構のまとめ

#### 土坑について

SK048は、出土遺物から弥生時代後期中葉に埋没したと考えられる。SK048をはじめとして調査区東部分には不定形もしくは舟形を呈する上坑が多く検出された。これらは概ね弥生時代後期の遺物を包含している。旧練兵場遺跡のこれまでの調査例からすると、住居跡が短時間のうちに何度も切り合う状態が普遍的に認められる。しかし、今回の調査区では西部分はさておき、東部分で住居跡がほとんど確認されなかったのは特異といえる。SK045やSK048・SK089・SK116などは、いずれもベースの黄橙色シルトと区別がつきづらく、掘削されて間もなく埋まつたものと考えられる。また、SH044に隣接してSH117があり、また北東でもSH124・SH125・SH126が重複している状況が認められる。恐らく調査区南や北東では住居跡が密集している可能性が高い。これらのことから、調査区東部分は弥生時代後期段階で形成された遺構か比較的短時間に埋棄され、その残欠が不定形な土坑状になって埋没したと考えられる。恐らくこのエリア内にも住居跡は存在したと考えられ、壁溝の残欠が上坑状になってから埋没したものと考えておきたい。

SK053は出土遺物から弥生時代後期中葉に埋没したと考えられるが、この土坑の断面は「V」字状を呈し、他の土坑の掘り方とは様相を異にする。溝になる可能性を考えられるが、東壁面と接しておりどのようになるかは確認できなかつた。ただし、道路を挟んで東側の県教育委員会による調査区では確認されておらず、現状では溝になる可能性は少ないと考えておく。

SK077は一部に弥生時代終末の土器 (Fig.30-7・15) が含まれるが、これは溝が埋没する際の沈み込みである可能性が高い。これら以外は概ね弥生時代後期前葉段階のものである。器種として甕がほとんど出土せず、壺や器台が多く出土した。また拳大の罐も大量に出土している。これらの点から、この場所近辺で執り行われた祭祀の後片づけの際に投棄した可能性が高い。

焼土塊が多く出土したSK103についてであるが、この土坑からは焼土以外は出土せず炭化物もなかった。更に、上坑全体も被熱の痕跡はなく、ここで焼成がされたとは考え難い。また、SD001やSD005からも層位に関わらず大小の焼土塊が出土し、SK104とSK105からも小片が多数出土した。SK103から出土した一点を除くと、面を持ったものは出土していない。当遺跡出土の焼土は、壁上が火を受けたものとされるスサが入つたものではなく、きめの継かな胎土である。これらのことから、現段階では焼土は青銅器の鋳造などと関係する生産用具や、土器焼成過程と関連するものではなく屋外で煮炊きなどをする時に生じたもので、二次的に投棄された可能性が高いとしておく。ただSD001の黒灰色粘質土層から発泡土器が出土しており、この付近で土器が発泡するような高温に火が焚かれたことがあったことは事実であり、詳細は今後の調査に期待したい。

#### 溝について

SD001のそれぞれの層位では、黒褐色粘質土層には中期中葉～弥生時代終末の遺物が包含される。暗黒褐色粘質土層には、弥生時代中期前葉～中期後・後期初頭の遺物が包含される。黒灰色粘質土層には、弥生時代中期中葉の遺物が包含される。同様にSD005のそれぞれの層位では、黒褐色粘質土層には、中期中葉～弥生時代終末の遺物が包含される。暗黒褐色粘質土層には、弥生時代中期前葉～後葉の遺物が包含される。中央部付近でSD001とSD005が合流する部分があり、この部分には暗黒褐色粘質土が堆積していた。またSD005のベースである黄橙色シルト層の下層には淡青灰色粘土の堆積が認められ、弥生時代前期前半の土器を包含していた。これらの事実から、各層位の遺物の下限時期を基準として遺構の形成から埋没過程を想定してみたい。

SD005付近では弥生時代前期段階以前に淡青灰色粘土が堆積し、続いて弥生時代中期中葉段階以前に黄橙色シルトが堆積し以後のベースとなる。SD005からは弥生時代中期前葉の資料が2点出土した。暗黒褐色土層中から出土した「如意」状の口縁を呈する甕 (Fig.60-19) と、黒灰色土層中から出土した「逆L」字状の口縁を呈する

甕 (Fig.63-20) である。これらはいずれも後に混入したものと考えられるが、前述した淡青灰色粘土片出土の弥生時代前期前半の土器との間に弥生時代前期後半段階の断絶が認められることになり、この断絶間に黄橙色シルト層が堆積したことが想定される。続いて中期中葉段階にSD001とSD005が形成された際、黄橙色シルトが削平されSD001付近では灰白色砂礫層、SD005付近では淡青灰色粘質土層のそれぞれ上に溝の堆積が開始されたと考えられる。その後、弥生時代中期後葉までにはいずれの溝中にも黒灰色粘質土層が堆積し、SD001では中期末・後期初頭に、SD005では後期前葉に暗褐色粘質土層が堆積する。最後に弥生時代終末には、黒褐色粘質土層が堆積し溝はほぼ同時に埋没が完了したと考えられる。また、特に黒褐色粘質土層の堆積の契機に注目してみると、包含層中にはほぼ完形の土器や隼人以上の大きな石が多く含まれており、溝がある程度埋没した後にこの場所が一気に整地された結果ではないかと考えられる。また、SD020から出土した遺物からは時期の限定期間の困難であるが、埋土がSD005の黒褐色粘質土層と極めて類似することから、この溝の埋没は弥生時代終末前後であると考えられる。

なお、SH044については後述するのでそちらを参照されたい。

#### 遺物のまとめ

##### 土器

ここでは外来系土器の時間的位置付けを中心に述べてまとめてみたい。

外来系土器と考えられるものがいくつか出土している。SD001黒褐色土層出土の長頸壺 (Fig.40-12) は吉備地方にそのルーツが求められる。香川県下では高松市大空遺跡 (大崎 1996)、高松市上天神遺跡 (大久保 1995)、坂出市下川津遺跡 (藤好ほか 1990)、志度町鴨部南谷遺跡 (國木 1990) で類似した資料が出土している。県西部では初出の資料となる。これらのことから当遺跡出土資料は、弥生時代後期前葉前後に位置付けたい。

SD005黒褐色土層出土の注口付き脚台付鉢 (Fig.55-107) もまた吉備地方と関連付けて考えられる資料である。香川県下では三豊郡詫間町紫雲山遺跡からの類例が知られる。また、視野を広くして四国という単位を見てみると徳島市南庄遺跡などで類例が散見される程度で、極めて珍しい遺物と考えられる。当資料の外縁は丁寧にヘラミガキが施され、更にベンガラにより赤く彩られている。しかし、注口付き脚台付鉢は祭祀に使用した後に意図的に破壊したと考えられる資料が多く、このため完形での出土はほとんどないようだ (妹尾 1992)。当遺跡の資料も破片のみである。これらの点から、当遺跡資料は弥生時代後期前葉前後のものと考えておきたい。

SD005暗黒褐色土層の台付鉢 (Fig.61-25) 脚臺部の尖頭状透視は、弥生時代中期後葉で伊予地方で特徴的に多く見られるもので、この地域からの影響かもしれないは搬入された可能性が高い。

SK077から出土した大型の壺台 (Fig.30-21) は、当地域では弥生時代中期には存在せず、後期段階に入つてから回線・櫛文などで加飾したものが出現するが短時間で姿を消してしまう。大型壺台は弥生時代後期前葉に特徴的な器種と考えられる。

SD001黒褐色土層出土の袋状口縁を呈する壺 (Fig.40-26・27・28) は伊予東部地方で弥生時代時代終末に多く見られるものであり、この地域からの影響か搬入が想定される。

また銅鏡面が施文されるものは、SD005暗黒褐色土層出土の高環脚部 (Fig.61-34) が弥生時代後期前葉段階と考えられ最も古い。SD001黒褐色土層やSD005黒褐色土層、SK077から出

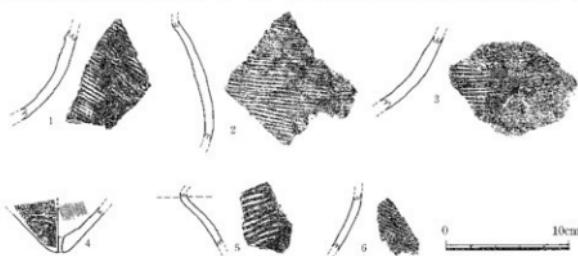


Fig.77 SD001・SD005出土のタタキ目のある土器 (1/4)

土した鋸削文をU縁部に有する壺（Fig.30-7）は、いずれも弥生時代終末頃と考えられる。鋸削文自体は吉備地方で弥生時代中期後葉頃から盛んに用いられ、集落出土のものは農耕儀礼との関連が、墳墓出土のものは葬送儀礼との関連が考えられている（宇垣 2000）。四国では吉備の対岸になる香川・徳島で多くの出土をみる（石尾 1998）。

破片資料ではあるが、タタキ甕がSD001とSD005の黒褐色粘質土層から一定量出土している（Fig.77）。当地域で明確なタタキを施す甕が見られるようになるのは弥生時代後期後葉からで、量的に主体となるのは終末段階になってからと考えられる。この時期に四国ではほとんどの地域において粗製のタタキ甕が普遍的に見られるようになる。タタキ目を施すという技術は近畿地方との関連が指摘されている（岡本 1992）。

また支脚については、当地域で粗製の器台=支脚が出現するのは弥生時代後期段階からで、この器種も伊予地方からの影響と捉えられる。口縁部に浅い刻目を施すタイプ（Fig.43-101）や、「Y」字状のタイプ（Fig.56-130）が現れるのは弥生時代終末以降と考えられる。これらのことにより、SD001とSD005の黒褐色粘質土層出土遺物の下限の時期を弥生時代終末と考えたい。

以上のことから、当遺跡出土資料のうち外米系の要素が見られ始めるのは弥生時代中期後葉段階からで、弥生時代後期段階になってから多くの外来的要素が認められるようになる。交流が窺える地域は吉備と伊予で、吉備からの影響が強いのは弥生時代中期後葉～後期前葉段階と考えられる。

なお特殊遺物については付論で詳説するためそちらに譲る。

#### 石器

旧練兵場遺跡から出土した石器は、弥生時代の瀬戸内海沿岸に多くみられるように、サヌカイト製の打製石庖丁とスクレイバーが大量に出土した。これらは主にSD001およびSD005の2本の流路から出土しているが、大部分は欠損品であり、中には肉眼でも、明らかに摩耗痕や装着痕を残しているものが観察される。SD001及びSD005以外で比較的まとまって出土したの遺構は、SH044とSK045及びSK077である。また、サヌカイトの剥片や碎片などは多くの遺構から出土しているが、製品としてはSB015、SK023、SK036、SK100、SP098から出土している。

弥生時代前期前半の資料が、SD005が形成される以前の淡青灰色層より2点出土した。楕円形状に調整されたスクレイバー1点と、四国産のサヌカイトの特性を利用した、扁平な素材測片の先端に簡単な調整を施しただけのスクレイバー1点が共伴している。後者は、下川津遺跡第2低地帯Ⅲ層に多く認められ、この弥生時代前期の頃には既に、サヌカイトの特性を上手く生かした石器製作がなされていたことが窺える。

その後、前期後半の資料は空白であるが、中期段階の資料がSD001及びSD005の黒灰層から出土している。この弥生時代中期になると、両側縁に抉りを施す定型的な打製石庖丁が出土するようになる。また、スクレイバーも数多く出土している。他の遺物としては、砥石や凹石がみられる。磨製石器は、小片であるため図化していないが、緑黒色を呈する緑泥片岩製の磨製石斧の刃部片だと考えられる遺物と、その堆積状況から、中期前葉のものだと考えられる大型船形石斧が出土しているが、その他は一切出土していない。このように、この弥生時代中期段階は、県内の一般的傾向であるが、打製石庖丁とスクレイバーなどのサヌカイト製打製石器が大部分を占め、磨製石器がほとんど出土しない。

中期末～後期初頭にかけては打製石庖丁、スクレイバーとともに石鎌（主にSD005から）の出土が目立つ。この時期に比定できる石鎌は10点あり、凹基式が2点、若干基部が回むタイプが3点、平基式4点、凸基式1点となる。いわゆる戰闘用といわれる、長さ3.0cm以上、重量2.0g以上の石鎌（佐原 1964）は、10点中4点（筆者が小型の石鎌としているものを石鎌として含めると、11点中5点）あり、約半数を占める。この時期には、いわゆる戰闘用の石鎌が増加することが指摘されているが、今回の調査でも同様の傾向が認められた（松木 1989）。また、凸基式石鎌は最大幅が中央より基部側にあり、1点のみの出土であるが吉備地方との関係性を示す遺物も認められる（松木 1989）。その他の器種としては、打製石斧や大型の砥石、磨製石斧、磨製石器の未製品が出土している。砥石は近隣の香色山で採集される流紋岩を利用し、磨製石器は石斧、石材とともに、薄緑色の緑泥片岩製が利用されている。また、SK036の資料もこの時期に相当し、粘板岩製の磨製石庖丁が1点出土している。

後期初頭～前葉にかけては、SH044の資料が相当する。当地域において、石器のほとんどをサヌカイトで製作するにもかかわらず、SH044の大形石鎌は輝緑凝灰岩製を利用している点で特徴的である。他にもサヌカイト製の石鎌が1点出土しており、SH044には石鎌が多くみられる。

後期以降は、打製石包丁とスクレイバーの出土が極めて多いが、器種が極めて豊富になる。石鎌は12点出土しており、円基式が3点、苔干基部が凹むタイプが4点、平基式2点、凸基式1点、先端のみの残存が2点となる。いわゆる戦闘用といわれる、長さ3.0cm以上、重量2.0g以上の石鎌は、12点中9点（筆者が小型石鎌としているものを石鎌として含めると、16点中9点）あり、ほぼ半数程度である。また、石製武器と考えられている石槍も先端のみの残存ではあるが、1点出土している。この時期になると、磨製石包丁や柱状片刃石斧などの大陸系磨製石器が認められるようになる。緑泥片岩製の磨製石器の未製品と考えられる破片などが出土し、砥石の点数も増加することなどから、遺跡内で磨製石器の製作をおこなっていた可能性が高い。砥石は、中期末以来の香色山産の流紋岩を使用することに変化はないが、小型する点で以前までの様相とは異なる。また、砂岩系の石材を用いた玉砥石状のものが出土するようになるが、本調査では勾玉や管玉などは出土していないため、詳細は不明である。

この時期の地域間の交流を示す遺物として、有溝石錐がある。有溝石錐には、擦り切り技法によるものと敲打によるものがある。敲打によって溝を施すものは、岡山県南部（古備地城）に特徴的な技法であるといい（秦松2000）、先に述べた円基式石鎌と同様、岡山県南部（古備地城）との交流が窺える資料である。また、磨製石器の石材として緑泥片岩があるが、この石材は吉野川流域で採集されているものと考えられる。この石材が当遺跡でも出土していることは、岡山県南部（古備地城）との交流だけではなく、吉野川流域方面とも交流があり、この時期には多方面との関係があったことが指摘できる。

ここまで、時期ごとの変遷を追ってきたが、以下、個別に触れておきたい。先にも述べたように、当遺跡からは肉眼でみても刃部や抉部などに、穢が摩滅により不明瞭になっている痕跡やロウ状光沢などの摩滅痕が観察されるもののが4点ある。その内1点は打製石斧の刃部付近であるが、残りの3点は打製石包丁及びスクレイバーであり、刃部中央と抉部などに摩滅痕が認められる。これらの資料を、太宰府市教育委員会・山村信榮氏のご指導のもと、金属顕微鏡を用いて使用痕分析を試みた。その結果、イネ科を対象とした、いわゆるコーングロスといわれる使用痕は観察されなかった。ただし、ごく稀に、発達したらコーングロスになると考えられるような微小な痕跡が認められるが、もともとサヌカイトの中にある鉱物との判断がしにくい石材であること、実際にサヌカイトを用いて実験を試みた例がなく、実際に用いられていた作業との間を埋めるデータの蓄積がないことなどから、現状では、これらの摩滅痕を、イネ科を対象としたコーングロスだと同定することはできない。これらの摩滅痕は、肉眼では容易に認識できるにもかかわらず、発達した使用痕が観察されないということは、もともとサヌカイトという石材が、使用痕のつきにくい石材であって、今回観察した資料がたまたま使用痕が形成される以前の段階であったのか、それともイネ科以外のものを対象としていたためなのか分からぬ。今後、微細剥離痕や実験のデータなどから総合的に判断しなければならないであろう。

次に、石鎌についてであるが、石鎌には2つのタイプがある。1つは長さが10cm以上ある大型のものである。大型の石鎌は、SD005の黒灰色土層で1点（中期）、SH044（後期初頭～後期前葉）の床面直上で1点、黒褐色土層（後期初頭～終末期）で1点の合計3点出土している。石材はそれぞれ、凝灰岩、輝緑凝灰岩、サヌカイトと様々である。また、中期段階では凝灰岩を、中期末～後期初頭では輝緑凝灰岩を用いており、後期初頭まではサヌカイト以外の石材を利用していることが窺える。刃部形態には直線状を呈するものと、内湾するものがある。もう1つは、長さが4～5cm程度の小型のものである。これはSD005暗黒褐色土層で1点（中期～後期初頭）、黒褐色土層から2点（後期初頭～後期前葉）、SD001黒褐色土層から2点（後期初頭～後期前葉）の合計5点出土している。全てにサヌカイトを用いており、他の石材は一切利用しない。いわゆる戦闘用といわれる大型の石鎌と似た形態をしているが、左右非対称形であること、一方の側縁中央に浅い抉り状の調整を施す、一定の規則性が認められることなどから、石鎌とは違った装着や用途・機能を考えた方がよいと考えられる。また、当遺跡においても5点出土し、ある程度の量的保証が認められること、下川津遺跡など他の遺跡でも出土していることなどから、石

鎌とは分離して考えるべき資料ではないだろうか。その形態などから、現在では小型の石鎌と考えたが、今後検討が必要な石器であろう。

以上のことから、今回の調査成果は次のようにまとめられる。

- ① 打製石庖丁とスクレイパーが大量に出土し、弥生時代の瀬戸内地方には一般的な様相を示す。特にSD001及びSD005から大量に出土しているが、そのほとんどが欠損品である。また、の中には肉眼で容易に観察できる摩滅痕を持つものがあるが、金属顕微鏡を用いた使用痕観察では発達した使用痕は認められず、コーングロスとして認定できなかった。
- ② 弥生時代中期末～後期にかけては、最大幅が基部側にある凹基式の石鎌や敲打技法による有溝石鎌の存在など、岡山県南部地城との関係を示す遺物が出土している。
- ③ 弥生時代後期には、大陸系磨製石器が出土し、石器の出土量・器種構成とともに豊富となる。また、磨製石器の素材と考えられる片岩製の石材が、いずれも小片であるが4点出土していることから、古野川流域方面とも関係があったことが窺える。

#### 【引用・参考文献】

- 石尾和仁 1998 「銅鏡文土器の分布と上野式土器」『ウエノ遺跡』（財）徳島県埋蔵文化財センター
- 宇垣匡雅 2000 「銅鏡文をもつ土器」『考古学研究』47.2 考古学研究会
- 大久保徹也 1995 「土火神道跡」（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 大崎和則 1996 「大空遺跡出土弥生土器の概要」『高松市歴史資料収録資料目録』 高松市歴史資料館
- 岡本健司 1990 「鴨部南谷遺跡発掘調査概要」 恵庭町教育委員会
- 岡本健児「南国圏における即日のある弥生土器と土師器」「森貞次郎博士古稀記念古文化論集」
- 篠田龍一 1986 「彼ノ字道路の発掘調査とその問題点」『香川史学』15 香川歴史学会
- 篠田龍一 1995 「讃岐の分割型土製品」『香川考古』4 香川考古巡回会
- 佐原 義 1964 「石製武器の発達」「紫雲浜」 記録町文化財保護委員会
- 曾原康夫 1993 「古面型盤式の普及と変容」「真朱」2 （財）徳島県埋蔵文化財センター
- 雄辻廣二 1992 「注! 付き脚台付鉄器について」「古代古墳」14 古代古墳研究会
- 藤好史郎ほか 1990 「下川津遺跡」香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 松木武彦 1989 「弥生時代の石製武器の発達と地域性 -特に打製石鎌について-」「考古学研究」35.4 考古学研究会
- 真鍋昌宏 2000 [2]「讃岐地城」「弥生土器の様式と編年 四国編」 木耳社
- 乗松貞也 2000 「中国・四国における有溝石鎌の地域差」「財團法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要」 増補（財）香川県埋蔵文化財調査センター

## VI. 付論

### 住居跡出土ガラス小玉の意義 —住居跡廃棄の祭祀行為復元の可能性—

#### 1.はじめに

住居跡SH044の埋土中及び床面からは、ガラス小玉が合計23点もの数量が出土した。また柱穴内から壺が掘られた状態で出土したり、同じく柱穴内から獸骨や水銀朱が塗布された土器片が出土したりしている。水銀朱が塗布された土器は、当地においては弥生時代後期になってから顯著になるものと考えられる。出土土器からこの住居跡は弥生時代後期初頭に廃棄されたと考えられるが、過去の調査事例からみると、普通寺市域では主として弥生時代終末前後の住居跡からガラス玉や管玉、勾玉、鏡などの「貴重品」が出土することが多いようだ。これらの「貴重品」は埋没時に混入したり単純に置き忘れた結果ではなく、廃棄の際に祭祀の行為がおこなわれた結果であると積極的に考える説が提示されている（笛川 1986）。このように解釈するならば、掘立柱建物跡SB050の柱穴内からガラス小玉が1点出土したのも、建物の廃棄に際して祭祀が執りおこなわれた結果と考えることも可能である。

ここでは、これらの玉が単なる住居跡内の遺失物や混入ではないと考えることを前提に、香川県下での「貴重品」の集落での出土状況を概観する。この作業の結果より、SH044を検討しガラス小玉の意義を考えてみたい。これらの評価から、かつて提示された住居廃棄の祭祀行為復元へと積極的にアプローチすることを目的とする。

#### 2. ガラス玉など「貴重品」の出土例

近年類例が増加し散見されるため、以下やや詳しく住居跡からガラス小玉、青銅製品、玉などの「貴重品」が出土している事例をみていく。

旧練兵場遺跡（森下 1996） 竪穴住居SH11下層床面からガラス小玉1点が出土した。竪穴住居SH11は円形堅穴住居で、出土土器から弥生時代後期初頭段階のものと考えられる。掘立柱建物SB01の柱穴中から碧玉製管玉1点が出土した。この建物は出土遺物より弥生時代中期末のものと考えられる。竪穴住居SH11出土のガラス小玉は床面から出土していることが注目される。

彼ノ宗遺跡（笛川 1985） 開丸方形の住居跡ST-09から、懸垂鏡に転用された小型内行花文鏡片が床面直上より出土した。この他に土玉が出土している。この住居跡は弥生時代終末頃のものと考えられる。開丸方形の住居跡ST-12の床面上からは、硬玉製勾玉1点、ガラス小玉1点が出土した。出土遺物より弥生時代終末頃のものと考えられる。円形の住居跡ST-13壁溝からは碧玉製管玉1点が出土した。この住居跡は弥生時代後期中葉のものと考えられる。円形の住居跡ST-20では、ベッド状造構上からガラス小玉1点が出土した。また、この住居跡埋土中からは獸骨片が出土した。弥生時代終末頃の遺構と考えられる。更に円形の住居跡ST-24の埋土上からは様々な特殊遺物が出土している。硬玉製勾玉1点、碧玉製管玉1点、ガラス小玉1点、イノシシ形土製品1点、ミニチュア土器、銅鏡1点などである。弥生時代終末頃の遺構と考えられる。また、住居跡ST-25の床面からはガラス小玉1点が出土した。時期は弥生時代後期中葉のものと考えられる。六角形を呈する住居跡ST-26のベッド状造構からは、ガラス小玉1点と碧玉製管玉1点が出土した。弥生時代終末頃の遺構と考えられる。開丸方形の住居跡ST-27埋土からはガラス小玉1点が出土した。弥生時代終末頃の遺構と考えられる。開丸方形の住居跡ST-30 床面上からは碧玉製管玉1点が出土した。弥生時代終末頃の遺構と考えられる。

弘田川西岸遺跡（片桐 1996） 普通寺市内に所在する。円形の竪穴住居跡SH27からガラス小玉1点と蛇文岩製勾玉1点が出土した。住居跡の時期は出土土器より、弥生時代中期後葉と考えられる。

稻木遺跡（笛川 1989） 普通寺市に所在する。出土土器は無いが、遺構の切り合い関係から、古墳時代初頭と考えられる方形の竪穴住居SH-03より硬玉製勾玉1点が出土した。

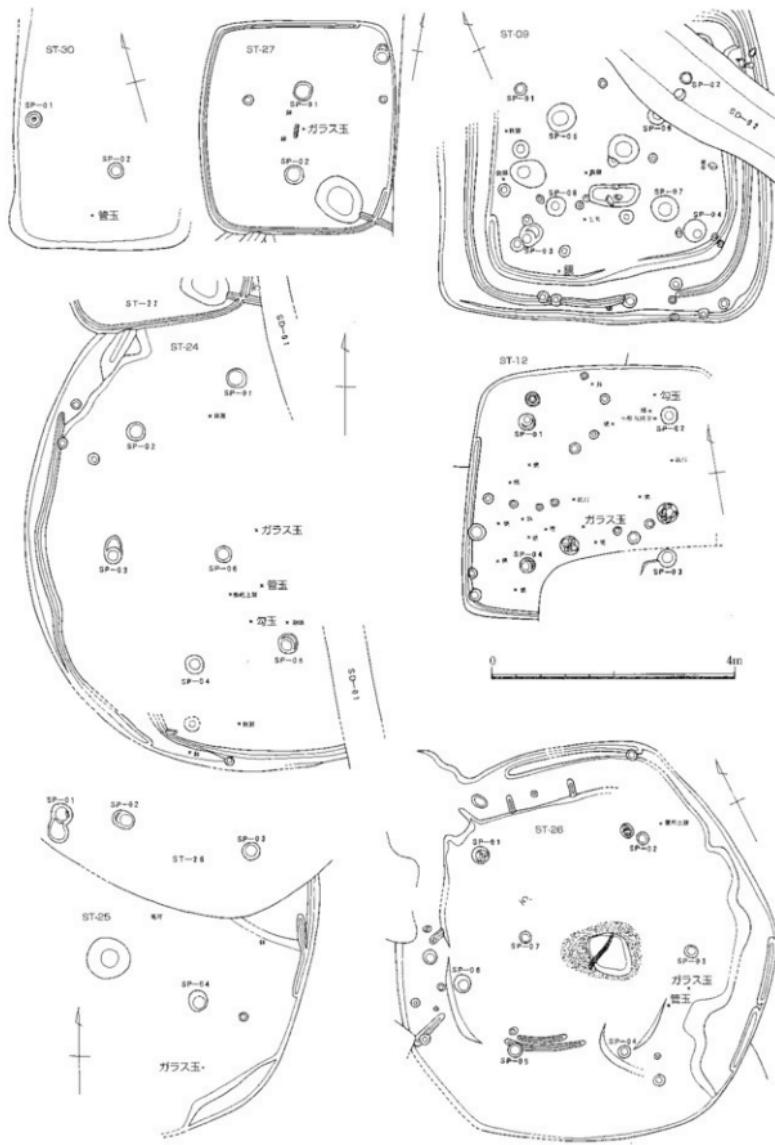


Fig.78 住居跡の「貴重品」出土状況1（彼ノ宗遺跡1/80、篠川 1985より一部改変）

龍川五条遺跡（宮崎 1996）普通寺市にあり、古墳時代前期と思われる。方形の竪穴住居SH01から、埋土中から薄い青色を呈するガラス製の小玉1点が出土した。共伴遺物には土師器広口壺、小形丸底壺、甕、高环、サヌカイト製石鏡4点である。石鏡4点は形態的に弥生時代以前のものであり、出土した土器の年代観とは齟齬を来している。これらの石鏡は住居の東半部を中心とした床面直上で出土している。

以上の報告書の記載からいくつかの解釈が成立する。つまり、石鏡が作った住居跡以前の遺構が周辺にあり住居跡を建てた際に巻き上げられて混入したとの考え方と、意図的に採取した石器を住居跡に持ち帰り遺棄したとの考え方である。

以上のように概観すると、香川県下ではかつて指摘されたように普通寺市域の住居跡では特に「貴重品」の出土が顕著であるという傾向が変わらず認められるといえよう。

### 3. 他地域の事例との比較検討

香川県下では少なくともガラス小玉については普通寺市域で特徴的に住居跡から出土することが判明した。では、香川県以外の地域ではみられるのだろうか。対象地域をやや広げて同時期の他地域ではガラス小玉が出土している事例を検索してみた。ここでは報告者という紙幅の都合上、特徴的な事例をあげるのみにとどめ今後の検討の際に改めて西日本全体の中で位置付けを試みるつもりである。

まず、四国の事例として高知県香美郡野市町下ノ坪遺跡の事例を紹介する。円形の竪穴住居跡ST7からはガラス小玉が9点、石製勾玉1点が出土した。これら装身具のほとんどが床面から出土している。この住居跡からは胎土などより謂岐地方からの織入品と考えられる鉢他の土器が出土している。また隅丸方形の竪穴住居跡ST17埋土からは、ガラス小玉が34点出土した。このことから当地域において住居跡内からの玉の大量と謂岐地方との交流の因果関係が窺える事例である。

対岸の岡山県の事例として岡山県岡山市足守川矢部南向遺跡を検討してみたい。この遺跡では弥生時代後期前半の竪穴住居跡が24棟、後期後半の竪穴住居跡が20棟検出された。このうち後期前半の1棟、後期後半の1棟からそれぞれガラス小玉が1点ずつ出土した。後期前半の竪穴住居20は円形を呈し、ガラス小玉の他に碧玉製

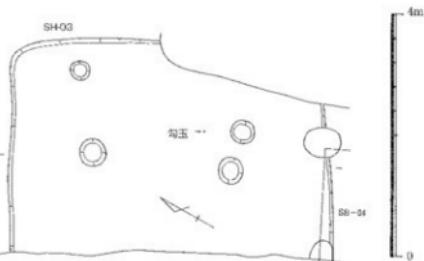


Fig.79 住居跡の「貴重品」出土状況2  
(稲木遺跡1/80、篠川 1989より一部改変)

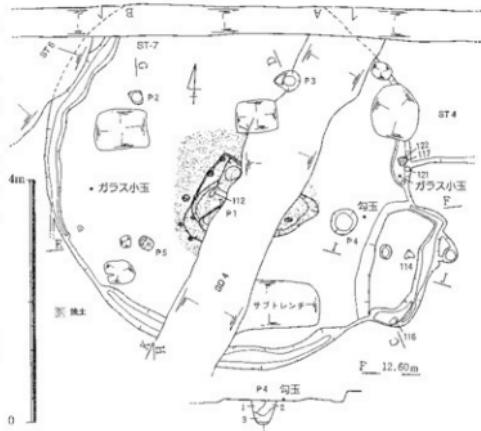


Fig.80 住居跡の「貴重品」出土状況3  
(下ノ坪遺跡1/80、出原ほか 1997より一部改変)

管玉1点が出土している。後期後半竪穴住居31も円形を呈しているが、同様に後期後半の円形を呈する竪穴住居43から管玉が出土している。どうやら弥生時代後期前半には対岸の岡山県でも類似した現象が認められるようである。

また、北部九州での事例も一例紹介しておきたい。福岡市博多区の南八幡遺跡2号住居跡では床面・埋土中から合計68点のガラス小玉が出土している。この住居跡は弥生時代後期の所産と考えられる。遺物の出土状況を見てみると、ガラス小玉は埋土でも下部に集中している状態が見て取れる。つまり、これらのガラス小玉は住居が埋没しきってしまう前に散らばったと考えられる。このような状況でガラス小玉を遺失物として捉えるよりも、意識的にばらまいたと解釈した方が無理がないのではないかと考える。

以上紹介した他地域での事例を手掛かりとして、今回調査で出土したガラス小玉の出土状況を検証してみたい。まず住居跡SH044から出土したガラス小玉のうちいくつかは床面付近からの出土で、その他のものは埋土をサンプリングしたものを水流した時に発見したものである。調査時に遺失したものもあった可能性はあるが、その数はこれまでの旧練兵場遺跡から出土した事例とは比較にならないほど大量に出土したことになり、南八幡遺跡例と類似した状況にあったのではないかということが窺える。

次に掘立柱建物SB115からガラス小玉1点が出土したが、以前調査した旧練兵場遺跡掘立柱建物SB01の柱穴中からも碧玉製管玉が1点出土している（森下 1996）。素材は異なるが、いずれも1点のみの出土であることにより、定の規則性が見いだせる可能性があるだろう。このようにガラス小玉が1点見つかるという事例は対岸の岡山県つまり占領地方でも弥生時代後期には存在しているようだ。

さらに、彼ノ宗遺跡住居跡ST-12・ST-24例、足守川矢部南向遺跡例、弘田川西岸遺跡例のからは、ガラス小玉と他の遺物がセットで出土している。しかし、今回の調査では発見できなかった。今後の調査でも発見される可能性は高いだろう。

こういった観点からの研究はまだまだ少ないが、徐々にではあるが問題意識を持つ研究者があらわれている。例えば、青木一男は長野県下の弥生時代後期の住居に廃棄された土器を分析しパターン化しており、大量の土器が出土するものについては、建物の火焚き行為を伴う建物の廃絶にかかる共飲共食儀礼行為を考えている。また、多量の土器群の他にも青銅製品、ガラス製品、石製品が出土することもあり、ガラス製品ではガラス小玉が主体であるとしている。このような住居跡の埋土からは、焼土粒・炭化粒が出土することが多い（青木 1999）。SH044の埋土からも、炭化粒が多く出土した。当遺跡例も火焚き行為を伴う儀礼が執り行われ、これに伴ってガラス小玉が投棄されたことが想定できるのではなかろうか。

#### 4. おわりに

ガラス小玉の出土は偶発的な要素が大きく、資料が今回の場合も出土してからの対応を余儀なくされた。しかし、ここで検討したように普通寺市域では弥生時代後期～古墳時代前期にかけて住居跡からガラス小玉などの「貴重品」が出土する場合が多いことは確実であり、これらを住居跡廃棄の祭祀かどうかを検証していくためにも

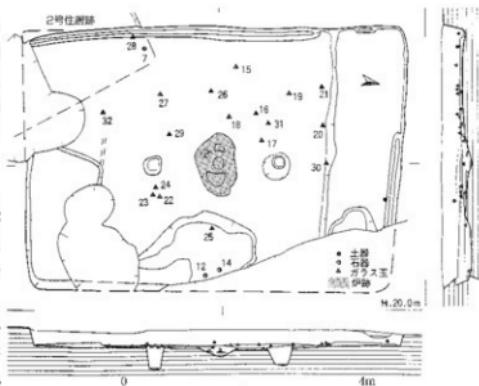


Fig. 81 住居跡の「貴重品」出土状況  
(南八幡遺跡1/80、小林 2000より一部改変)

資料が霞散しないことが肝要である。その対策として、住居跡を掘る際には、土器・石器以外の微細な「貴重品」が出土するという前提での調査が必要であると自省の意味も込めて記しておきたい。

【引用・参考文献】

- 齊木一男 1999 「梅雨水期における上田魔女の一種相」『長野県埋蔵文化財センター紀要』7 長野県埋蔵文化財センター
- 片桐季治 1996 『弘田川西岸遺跡』 (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 小林義彦 2000 『市八幡遺跡』 福岡市教育委員会
- 香川龍一 1985 『彼ノ宗遺跡』 普通寺市教育委員会
- 香川龍一 1986 「彼ノ宗遺跡の発掘調査とその問題点」『香川史学』15 香川歴史学会
- 香川龍一 1989 「櫛木遺跡」 楠木遺跡発掘調査団
- 山野恵三ほか 1997 「トノリ遺跡」 I 野町教育委員会
- 宮崎信治 1996 『前川五条遺跡』 I 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下英治 1996 『日神兵場遺跡』 III 香川県教育委員会

## 香川県下の絵画・記号土器

### 1.はじめに

旧練兵場遺跡では、今回の調査で記号土器が4点出土した。内訳は、住居跡SH044からは壺の胴部上半部に列点ほ施したもののが1点、満SD001黒褐色土層からは壺頸部下に竹管文を施すものと壺胴部下半に三叉状の文様を施すもの2点、満SD005暗黒褐色土層からは壺胴部上半部に綾杉状の記号を施したもの1点である。しかしこまでの調査ではわずか1点確認されているだけである。

香川県における絵画・記号土器研究は古く、六平恵一による多度津郡多度津町白方遺跡の資料に始まる（六平 1959）。しかしその後、資料の増加が無かったため研究の対象とはされない時期が続いた。再び絵画・記号土器に注目が集まるのは、高松市久米池南遺跡で壺物の描かれた土器が出土した際であろう（藤井 1989）。その後、県下では少ないながらも資料の増加がみられる。そこで、ここでは香川県下の絵画・記号土器を集め概観し、今回出土した資料の位置付けを試みてみたい。

### 2.香川県下の様相

香川県下の絵画・記号土器資料は15遺跡54点が管見に触れた。ただし、資料の中には同一個体の可能性があるものも存在するため、実際の個体数は少なくなるものと考えられる。香川県下では絵画・記号土器の出現は弥生時代中期末～後期初頭段階になってからであり、久米池南遺跡例や高松市上天神遺跡例などがこの時期の資料である。この段階に最も多くの絵画・記号土器が製作されているようだ。その後、弥生時代終末～古墳時代初頭の段階まで一定量の出土があるが、次第に個体数は減少していき、古墳時代前期段階にはほとんど姿を消してしまうようである。

絵画土器のうちモチーフが特定できそうなものには、前述した久米池南遺跡例の建物、高松市太田下・須川遺跡例の鹿、吉野寺市九龍神遺跡例の船などがある。この他にも所謂バチ形を呈するものを描いた資料が九龍神遺跡と坂出市川津ノメ遺跡SR02から1点ずつ出土している。しかし、その他の資料は線刻が何をモチーフと

Tab.1 香川県下の絵画・記号土器一覧表

No.	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	文献
1	前田東・中村	高松市	G区SR02	弥生・末～古墳・初	森ほか 1995
2	前田東・中村	高松市	F区SR01	弥生・中末～後初	森ほか 1995
3	久米池南	高松市	第2号土坑	弥生・中末～後初	藤井 1989
4	太田下・須川	高松市	SR02	弥生・中末～後初	北山編 1995
5	空港跡地	高松市	Site138	弥生・後・復	戸曾 1997
6	上天神	高松市	3区SD02	弥生・中末～後初	大久保 1995
7	上天神	高松市	3区SD03	弥生・中末～後初	大久保 1995
8	上天神	高松市	3区SK01	弥生・中末～後初	大久保 1995
9	上天神	高松市	3区SR01	弥生・中末～後初	大久保 1995
10	上天神	高松市	4区SD08	弥生・中末～後初	大久保 1995
11	上天神	高松市	4区SK01	弥生・中末～後初	大久保 1995
12	大穴	高松市		弥生・後・前	大崎 1958
13	川津二ノ又	坂出市	SR01	弥生・末～古墳・初	山下 1997
14	川津二ノ又	坂出市	SR02	弥生・末～古墳・初	山下 1997
15	都家原	丸亀市	SD107下層	弥生・末～古墳・初	真鍋ほか 1993
16	旧城氏場	善通寺市	SH-01	弥生・後・復	森下 1994
17	旧城氏場	善通寺市	SH044	弥生・後・前	本報告
18	旧城氏場	善通寺市	SD001黒褐色層	弥生・後・前	本報告
19	旧城氏場	善通寺市	SD005暗黒褐色層	弥生・中末～後初	本報告
20	九頭蛇	善通寺市	SD-05	弥生・末～古墳・初	篠川 1958
21	九頭神	善通寺市	第3種検査カクラン層	弥生・末～古墳・初	篠川 1958
22	楠木	善通寺市	第3号集積窓	弥生・末～古墳・初	西岡ほか 1989
23	森広	大川郡寒川町	SH-303	弥生・後・復	山本ほか 1997
24	石田高校校庭	大川郡寒川町	SK-101上層	弥生・後・復	山本 1997
25	源伏・中所	木田郡三木町	SD07・08	弥生・後・復	西村ほか 1995
26	白方	多度津郡多度津町			六車 1959

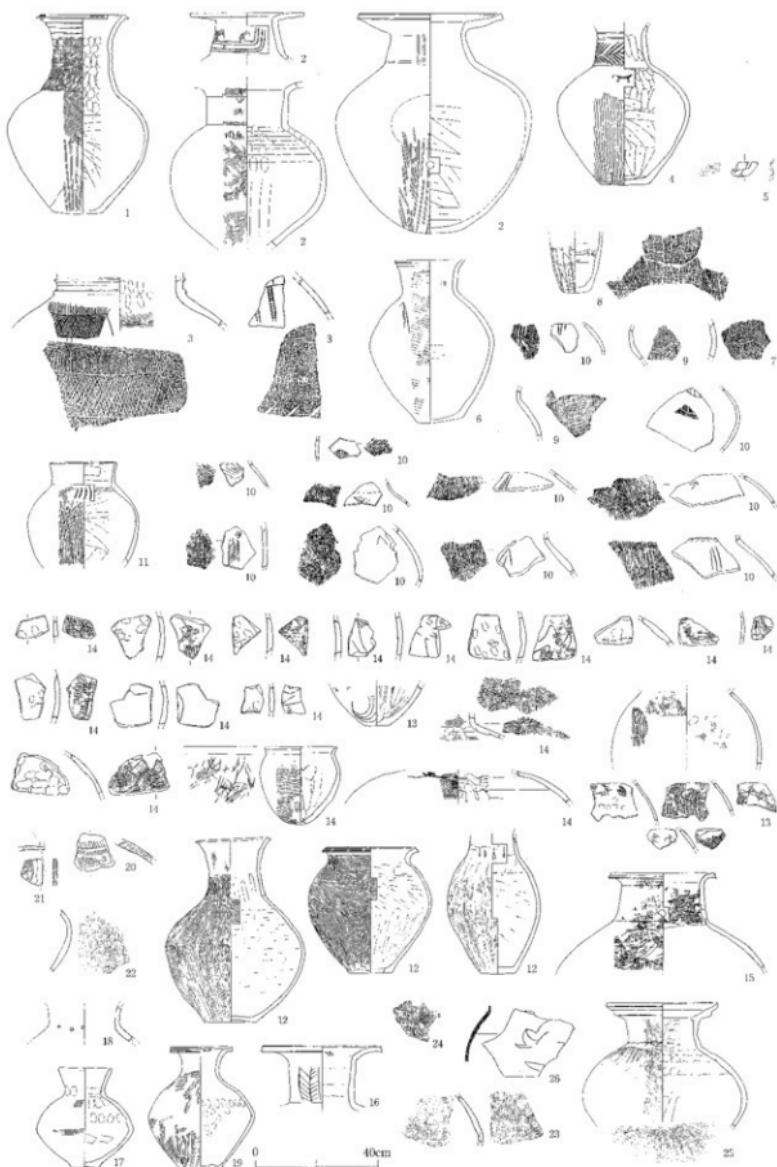


Fig. 82 香川県下の絵画・記号土器（各文献より）

しているかが判断できないものが多い。畿内地方と共に施される記号も一定数は存在しているが、全体としては記号はバラエティーに富まない。絵画・記号が施される器種は、高松市大空遺跡と川津一ノ又遺跡SR02の壺にある例を除いてほとんど全てが壺に描かれたものである。施文される部位については、胴部上半部が最も多く次いで頭部に施される場合が多い。

### 3. Ⅲ練兵場遺跡出土資料の位置付け

当遺跡出土資料はSH044出土資料を除いては畿内でも同様の記号が認められ、一定の情報が畿内と普通寺市域で共有されていたものと考えられる。SH044出土資料は住居跡柱穴からの出土であり、柱止めと考えられる石に押しつぶされた状態で下層より出土した。このことは住居を建てる際に、例えば後世の地鎮めのように意識的に埋置した可能性が考えられる。そのような祭祀に記号を描いた上器が用いられたと考えることも可能ではないか。また、SD005暗黒褐色出土の壺も溝内から出土した際に一部を破損してしまったが、本来は完形で投棄されていたものと考えられる出土状況であり、口が粘土によって栓をされた状態になっており内部は空洞であった。別の箇所でも述べたが、この溝は集落域の境界と考えられ祭祀関連の遺物も多く出土している。SD001黒褐色上層出土の壺は胴部下半部に記号が施される珍しいもので、描かれた三叉形記号は水鳥の絵画が記号化したものであると考えられる（春成 1991）。もしそうであれば、このような水と関連した記号を水場に投棄すること自体に祭祀的な要素が窺えるだろう。当遺跡出土資料は、比較的記号としては畿内の様相に近い資料であり使用された場も住居跡廃棄の祭祀が行われた可能性がある柱穴や、集落の境界と考えられる溝からの出土している。記号上器は焼成前に記号が施文される段階ですでに、記号が付された上器がどのような祭祀の場で用いられるかが、例えば住居を建てる際であるとか、水と関係した祭りの場であるとか使用を前提に計画設計されていたものではなかろうか。

### 4. 小結

香川県下から出土する絵画・記号土器は従来、数が少ないと考えられており注目されることは少なかった。しかし、近年の調査成果によって一定の個体が出土していることが今回の作業で確認できた。

弥生時代後期前葉段階には旧練兵場遺跡でも畿内系七器が多く出土していることなどから、今回の調査で出土した記号上器の存在は、畿内との交流によって記号を用いた祭式が受容されたことを物語っている。しかし、香川県下では隣接する占碑地方・伊予地方と比べて数量的には少なく畿内からのインパクトはあったものの、石川県下や宮崎県下のように畿内との距離があるにもかかわらず記号が盛行するようなことはなかったといえるだろう。今後は、隣接する伊予東部地方を含む愛媛県の資料の比較検討をおこなうことが肝要となつて来るだろう。

#### 【引用・参考文献】

- 井内貴子 1992 「弥生時代の絵画紋と記号紋」『菅原遺跡』 大阪府教育委員会  
大久保徹也 1996 「土天神遺跡」 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター  
人始和則 1996 「大空遺跡出土弥生土器の概要」『高松市歴史資料館収蔵資料目録』 高松市歴史資料館  
北山健一郎編 1995 『太田下・須原遺跡』 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター  
藤木吉司 1997 『空港跡地遺跡』 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター  
篠川龍一 1988 「九頭神遺跡発掘調査報告書」 九頭神遺跡発掘調査団・善通寺市教育委員会  
佐原 桥 1980 「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』66-1 高松市歴史民俗協会  
西岡達哉ほか 1989 「船木遺跡」 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター  
西村伸文ほか 1995 「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター  
春成秀樹 1991 「絵画から記号へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』35 国立歴史民俗博物館  
橋本哲行 1996 「弥生時代の絵画」『弥生人の鳥獣絵画』 雄山閣

- 藤井雄三 1989 「久米池南麓調査報告書」 高松市歴史民俗協会
- 藤田三郎 1982 「発生時代の記号文」「考古学と古代史」 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 真鍋昌宏ほか 1993 「郡家原遺跡」 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 六車憲一 1959 「考古学ノートから」「文化財協会報」特別号4 香川県文化財保護協会
- 森 格也ほか 1995 「前田東・中村通路」 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下英治 1994 「旧練兵場遺跡」 香川県教育委員会
- 山下平重 1997 「川津一ノ又通跡」 I 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 山本一伸 1997 「石田高校校庭内遺跡」 寒川町教育委員会
- 山本一伸ほか 1997 「森広遺跡」 寒川町教育委員会

## 四国の匙・杓子形土製品

### 1.はじめに

今回の調査では、溝SD001と溝SD005から匙・杓子形土製品が計7個体出土した。これらの帰属時期は弥生時代中期中葉～終末のものと考えられる。特にSD005黒灰色土層よりタイプの異なるものが5個体集中して出土したことには非常に注目された。そこで、ここでは四国四県出土の匙・杓子形土製品を集成し当遺跡出土資料について考察を試みてみたい。

まず、どうして「匙・杓子」と区別しているのかという理由であるが、この二者は似通ってはいるものの根本的に機能面では異なり、厳密な区別が必要であるとの考え方からである。つまり、匙・杓子にはそれぞれ原型として木製品があり、両者の区別は木製品ではつきやすいものの、土製品になってしまふと見分けがつきにくくなるようである。この点から、木製品と土製品とを比較し、その原型を想定することによってはじめて上製品の機能的側面にアプローチすることが可能となると考える。この観点で、筆者はかつて近畿地方出土の匙・杓子を木製品と土製品について集め、まず木製品によって匙・杓子を分類し、この分類をもって上製品も分類し、木製品研究と土製品研究の連動作業を推進することを促したことがある（角南 1993）。ここでは、この方法を用いて四国出土の匙・杓子形土製品の類型化をおこない、それらの機能を推定してみようと思う。

### 2.匙・杓子の定義と分類

匙と杓子の定義・区分は前稿で提示したもので骨子に変化はない。つまり、匙とは容器中の食物・液体を直接口へと運ぶためのものであり、身の部分は紡錘形を呈するものである。杓子は食物・液体を容器へとましくは容器から容器へと移動するためのもので、直接人間の口につけることがないものであり、身の部分は円形である。

分類については一部考えを変えた所があり、新たな分類項目を設けたが基本的には前稿を踏襲するものである。以下、匙・杓子の分類基準を示す。匙と杓子の形態的な大別は身部に依る。身部が紡錘形を呈するものを匙、円形を呈するものを杓子とした。これをもとに主として柄部の取り付き方を主眼に置いて、匙・杓子をそれぞれA・B・C・Dの4類に大別した。更にこれをA類では2つに、B類では4つに、C類では2つに細別をした。

次に分類基準を明示する。Aa類は身部口縁部と柄部付け根の上面とがほぼ一直線をなし、頭部に比して柄部の長いもの。Ab類は身部口縁部と柄部の付け根の上面とがほぼ一直線をなし、頭部に比して柄部の短いもの。B-Ta類は身部口縁部が柄部付け根の上面より一段高くつくられ、両者が鈍角をなして取り付き、頭部に比して柄部の長いもの。B-Tb類は身部口縁部を柄部付け根の上面よりも一段高くつくり、両者が鈍角をなして取り付き、頭部に比して柄部の短いもの。B-IIa類は身部口縁部と柄部付け根の上面との間に段差がなく、両者が鈍角をなしてとりつくもので、頭部に比して柄部の長いもの。B-IIb類は身部口縁部と柄部付け根の上面との間に段差がなく、両者が鈍角をなして取り付くもので頭部に比して柄部の短いもの。B-III類は山形に彎曲した柄部がとりつくもの。Ca類は身部口縁部に対して柄部が直角もしくは直角に近い角度で取り付き頭部に比して柄部の長いもの。Cb類は身部口縁部に対して柄部が直角もしくは直角に近い角度で取り付き頭部に比して柄部の短いもの。以上6類に細別した。D類は舟形を呈する槽状の身に短い柄部が取り付くものである。また、柄部が欠損して長さが不明のものについてはAx類・B-Tx類・B-IIx類・B-IIIx類・Cx類とそれぞれした。木製品では杓子のA・B類は横杓子、C類は縦杓子とされるものである。

### 3.四国出土資料の事例検討

集成作業の結果をもとに、四国の匙・杓子形土製品について検討をおこなってみたい。資料は四国全土で18遺跡28例を確認したが、徳島県では事例が確認できなかった。これは、現在は出土していないだけで、今後資料が発見される可能性は高いだろう。

形態別では、匙は8個体、杓子は13個体ある。細別した結果は表の通りで、集計すると匙はA類5、B類1、D類2

四国出土の匙・杓子形土製品一覧

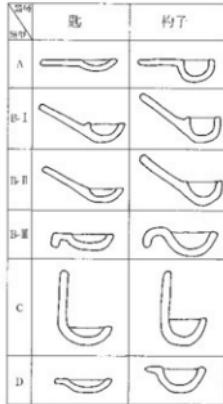
No.	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	器種	類型	文献
1	中居西井坪	香川県高松市	SX01	古墳・前	匙	D	大久保 1995
2	下川津	香川県坂出市	SD-II-01	弥生・後	杓子	Aa	藤好ほか 1990
3	郡家原	香川県丸亀市	SD-I07	弥生・末～古墳・初	杓子	B-Ia	山下 1993
4	郡家原	香川県丸亀市	SD-I07	弥生・末～古墳・初	杓子	B-Ib	山下 1993
5	郡家原	香川県丸亀市	SD-I58	弥生・末～古墳・初	匙	Ax	山下 1993
6	旧練兵場	香川県善通寺市	SH-01	弥生・後	杓子	B-Ia	森下 1995
7	旧練兵場	香川県善通寺市	SD003	弥生・後	杓子	B-IIa	西岡ほか 1998
8	旧練兵場	香川県善通寺市	SD0001黒褐色層	弥生・後	杓子	B-IIa	本報告
9	旧練兵場	香川県善通寺市	SD0005暗黒褐色層	弥生・中末～後初	杓子	B-IIa	本報告
10	旧練兵場	香川県善通寺市	SD005黒灰色層	弥生・中～中・後	杓子	B-Ib	本報告
11	旧練兵場	香川県善通寺市	SD005黒灰色層	弥生・中～中・後	勺		本報告
12	旧練兵場	香川県善通寺市	SD005黒灰色層	弥生・中・中～中・後	匙	Aa	本報告
13	旧練兵場	香川県善通寺市	SD005黒灰色層	弥生・中・中～中・後	杓子	B-Ix	本報告
14	旧練兵場	香川県善通寺市	SD005黒灰色層	弥生・中・中～中・後	杓子	Cb	本報告
15	植木	香川県善通寺市	第5層	弥生・後～末	杓子	D	西岡ほか 1989
16	矢ノ塚	香川県善通寺市	SD85101	弥生・中・中～中・後	杓子	B-Ib	鷹田ほか 1987
17	森広	香川県大川郡森川町	SH-206	弥生・後・後			山本ほか 1997
18	鳥居部・川田	香川県大川郡志度町	DKX-SH07	弥生・中・前	杓子	B-Ix	森 1997
19	中村	愛媛県松山市		弥生・後			松山市教委 1982
20	宮前川	愛媛県松山市	包含層	弥生・末～古墳・初	内子	Ax	西尾・栗田 1987
21	宮前川	愛媛県松山市	包含層	弥生・末～古墳・初	杓子	B-Ib	西尾・栗田 1987
22	福音小学校構内	愛媛県松山市	土壤層	弥生・後	匙	Bx	梅木ほか 1995
23	末住廻寺	愛媛県松山市	VII層		匙	D	梅木ほか 1993
24	西古井荒神堂	愛媛県松山市	DK1	弥生・末～古墳・初	匙	Ab	梅木ほか 1993
25	若原町	愛媛県松山市	ST-08	弥生・後・後	匙	Ax	土井・伊藤 1995
26	平田七反地	愛媛県松山市	(33)×SD3	弥生・末～古墳・初	杓子	B-Ia	西川ほか 2000
27	大塚	愛媛県越智郡玉川町		弥生・末～古墳・初	杓子	B-IIb	正岡 1981
28	林田	高知県香美郡土佐山田町	ST-3	弥生・後	匙	B-Ix	森田 1985
29	西分津井	高知県香川郡春野町	ST-11	弥生・後	匙	Aa	出原 1990

類型別出土点数

	Aa	Ab	Ac	B-Ia	B-Ib	B-IIx	B-IIa	B-IIb	Cb	D	計
匙	1	1	3			1				2	8
杓子				3	4	2	2	1	1	1	15
計	2	1	3	3	4	3	2	1	1	3	23



舟部平面形態



匙・杓子の形態分類模式図

匙・杓子形土製品の消長



Fig.83 四国出土の匙・杓子形土製品の分析

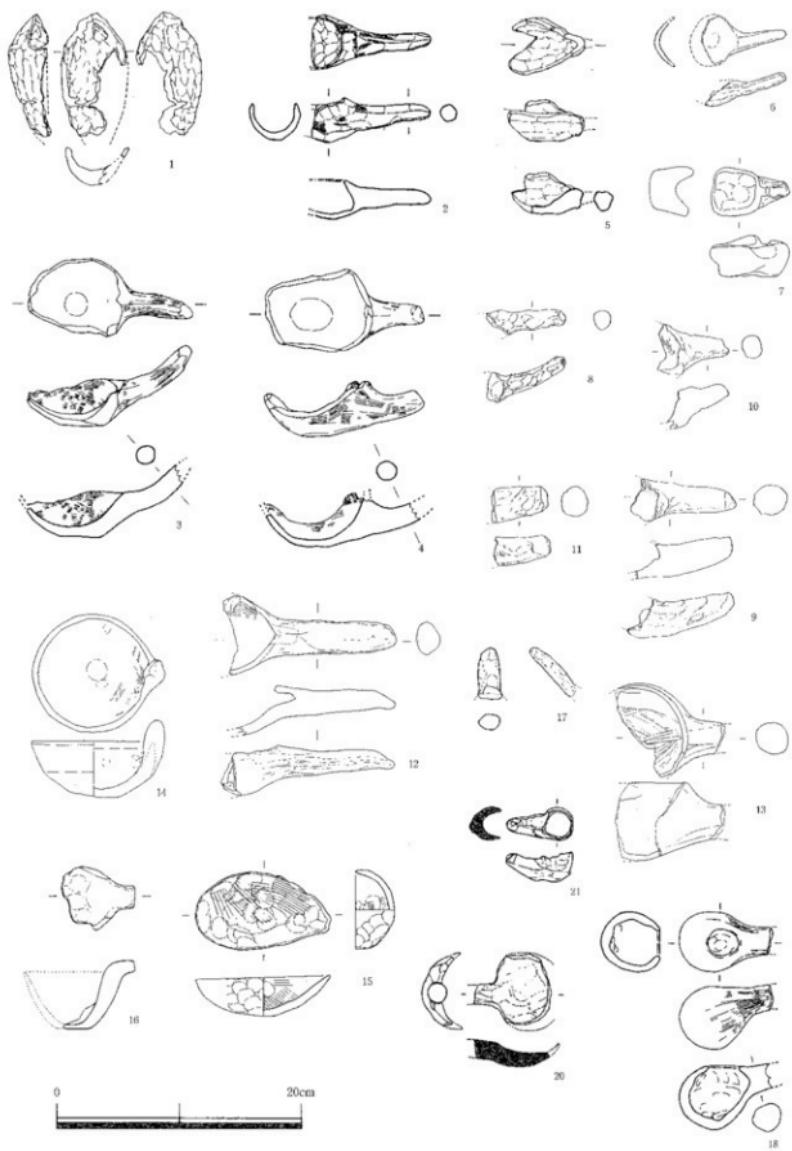
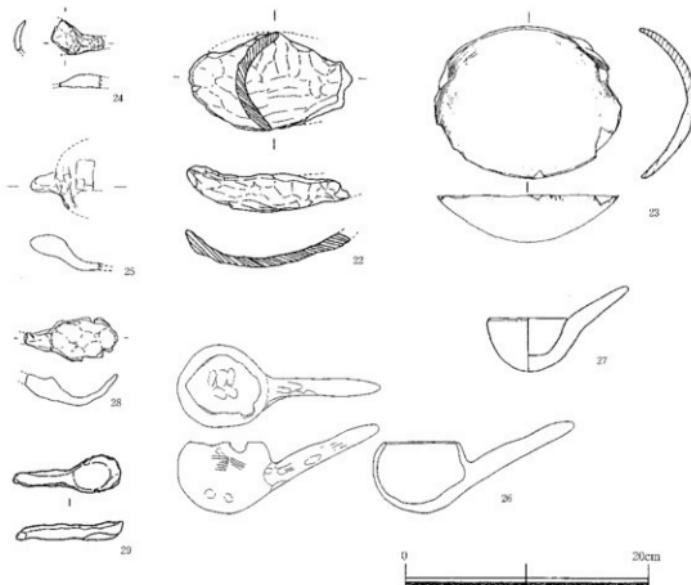
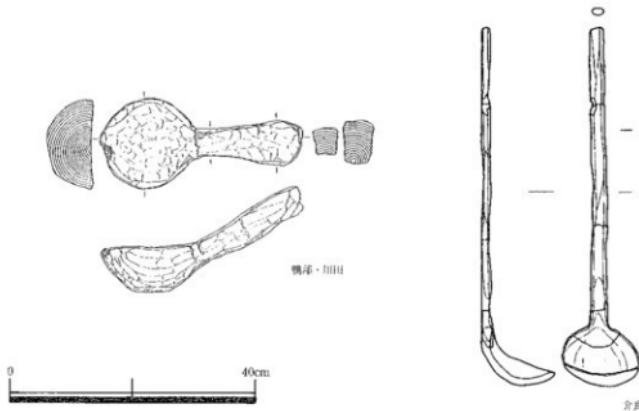


Fig.84 四国出土の匙・杓子形土製品1 (1/4)



四国出土の匙・杓子形木製品2 (1/4)



四国出土の杓子形木製品 (1/8)

Fig.85 四国出土の匙・杓子

で、杓子はA類1、B類10、C類1、D類1となる。

土製品の消長時期を見ると、弥生時代中期前葉の志度町鶴部川田遺跡例が最も古い。その後中期中葉から資料は増加し、古墳時代前期にかけて一定数が出土している。A類について、匙は弥生時代中期中・後葉～弥生時代終末・古墳時代初頭まで継続する。杓子は弥生時代後期に見られる。B類について、匙は弥生時代後期に見られる。杓子は弥生時代中期前葉の鶴部川田遺跡例に始まり、弥生時代終末・古墳時代初頭まで継続する。C類は当遺跡出土資料の杓子が初出で、現在の所は1例しか存在していない。このため弥生時代中期段階にあることしか断定できない。D類について、匙は香川県高松市中間西井坪遺跡出土の古墳時代前期資料があるのみである。杓子は弥生時代後期～弥生時代終末・古墳時代初頭に資料が見られる。

出土遺構は溝か豊穴住居からの出土に占められている。当遺跡出土資料も集落の端に立地する溝からの出土であり、これまで想定されている出土状況と符合する（大野 1989）。

#### 4. 木製品・瓢箪との対応関係

次に四国出土の匙・杓子の木製品について管見に触れた事例を紹介してみる。資料は2例ある。香川県鶴部・川田遺跡環濠SD01からの出土資料は、弥生時代前期～中期のものと考えられる鈎杓子の木製品である。高知県高知市介良遺跡自然河川SRから縦杓子が一点出土している。遺物の時期は弥生時代後期～古墳時代前期を中心であり、杓子もその時期の所産と考えられる。しかし、現状では四国での木製の匙・杓子の出土はまだ少なく、土製品との関連を検討出来るには至っていないようである。

弥生時代前期以降の集落からに製品ではない瓢箪が希に出土しており、古墳時代前期頃の集落からも瓢箪製柄杓が出土することなどより、瓢箪を用いた祭祀が執り行われたと考えられる（角南 2000）。大野薫が指摘した弥生時代前期になると、「球形袋状」のものが出現するという点に留意すると、四国で最古の資料である鶴部・川田遺跡例は「球形袋状」を呈しており、匙・杓子形土製品の性格は弥生時代前期に出現する「球形袋状」の原型と考えられる瓢箪に対する特別な観念・信仰をベースにしたものと考えられ（大野 1989）、実用品というよりも祭祀具であるという説に賛同したい。弥生時代前期以降には瓢箪形の壺が一定量存在することも関連がありそうだ。まず最初に瓢箪に対する特別なイメージがあり、それが匙・杓子へと拡大していくとも考えられる。

#### 5. 小結

以上見てきたことより当遺跡出土資料の評価をしておきたい。今回の調査では集落の端に相当すると考えられるSD005が埋没する過程で、形態が異なる匙・杓子形土製品が複数廻棄された状態で出土した。これらは集落の境界で行われた祭祀行為の後の投棄であると考えられる。

今後の課題として、以下の2点があげられる。第一に木製品と瓢箪との関係、第二に瓢箪と土製品との関連、これらをより広い地域を対象として検討していきたい。

#### 【引用・参考文献】

- 梅木謙一ほか 1995 「福音小学校構内遺跡」 松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財團理誠文化財センター  
梅木謙一ほか 1998 「石井・浮穴の遺跡」 松山市教育委員会・（財）松山市生涯学習振興財團理誠文化財センター  
大久保雅也 1996 「中間西井坪遺跡」 1 香川県教育委員会・（財）香川県理誠文化財調査センター  
大野 薫 1989 「遂形土製品小考」「大阪文化財論集」 （財）大阪文化財センター  
鷹川耕作ほか 1987 「欠ノ塚遺跡」 香川県教育委員会・（財）香川県理誠文化財調査センター  
角南聰一郎 1993 「近畿地方出土の匙・杓子」「河内平野道跡群の動態」 VI （財）大阪文化財センター  
角南聰一郎 2000 「瓢箪製柄杓の用途」「大陸原西遺跡」 （財）元興寺文化財研究所  
田上 浩・松田重治 1999 「介良遺跡」 高知県教育委員会

- 出原恵二 1990「西分増井遺跡群発掘調査報告書」 春野町教育委員会
- 土井光一郎・伊藤祐一 1996「若草町遺跡Ⅱ」 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 西尾半則・栗田茂敏 1987「宮前川遺跡発掘調査報告書」 松山市教育委員会
- 西岡達哉ほか 1989「鷲木遺跡」 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 西川麻美ほか 2000『道ヶ谷古墳・池の島遺跡・平田七反地遺跡』 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 齋藤史郎ほか 1990『下川津遺跡』 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 正岡龍太 1981「愛媛縣越智郡玉川町大塚遺跡について」『古代学研究』96 古代学研究会
- 松山市教育委員会 1982「古代の松山平野」 松山市教育委員会
- 眞鍋昌平ほか 1993「郡家原遺跡」 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 森 伸也 1997「鴨部・川田遺跡Ⅰ」 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下友子編 2000「鴨部・川田遺跡Ⅱ」 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 森田尚吉 1985「林田遺跡」 十作山町教育委員会
- 山之内志郎ほか 1993「来社魔古通跡」 松山市教育委員会・(財) 松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 山本一伸ほか 1997「森広遺跡」 寒川町教育委員会

## 人面付分銅形土製品について

### 1.はじめに

今回の調査では、分銅形土製品が計3点出土している。当遺跡ではこれまでに15個体が出土しており、香川県下においては普通寺市周辺からの出土数が目立って多いことは従来から指摘されてきた（筮川 1995）。特に注目されるのは今回出土したした資料のうち1点に人面の表現がされていることが資料整理の段階で明らかになつたことである。この資料は満SD005黒褐色土層中より出土した。表面に楕状工具により眼の表現が施され、中央付近には粘土の剥離痕が認められることと、剥離した部分に刺突文が一個あることから鼻の表現があったと考えられる。香川県下で人面付分銅形土製品が出土したのは高松市太田下・須川遺跡、三豊郡宍喰町紫雲出山遺跡に次いで3例目である。ここでは、西日本出土の人面付分銅形土製品を概観し、これまであまり語られることのなかった香川県下の地域色を抽出することを試みたい。

### 2.人面付分銅形土製品の分布と消長

まず、本稿で用いる「人面付分銅形土製品」という語の定義について述べておきたい。そもそも、分銅形土製品という遺物は発見当初より、弥生時代における人の形代として認識され研究が開始されている。故に上頭半部にしばしば見られる楕原体による刺突文や直線文は、眉を抽象化したものと考えられ縄文時代上偶との関連から議論されてきた。しかし、このような一群とは趣を異にする資料が広い範囲で分布していることが資料数の増加に伴って認知されるに至った。つまり、粘土紐を貼り付けて眉や鼻を表現したり、刺突文により口、鼻、口を表現する資料もまた一群として認定可能な数量の存在が予想されたのである。この一群についてここでは「人面付分銅形土製品」と呼び分布と消長を概観する。

管見に触れた人面付分銅形土製品は、31遺跡49個体ある<sup>11</sup>。大阪府・兵庫・岡山・広島・山口・鳥取・島根・香川・愛媛各県は分銅形土製品の分布圏中で、いずれの県からも人面付分銅形土製品が出土しているが、分布圏の外縁である福岡県、奈良県、京都府、高知県に事例がない。出現の時期は弥生時代中期中葉段階から後期後葉段階までみられる。出土遺構としては住居跡、上坑、溝などから出土しているが、中でも住居跡からの出土が目立つ。つまり、分銅形土製品が盛行する中期中葉段階に突如として現れ、後期まで継続して存在していることになり、分銅形土製品の消滅する時期までは人面付のものも僅かであるが継続しているということになるだろう。

### 3.地域性と系譜

次に人面付分銅形土製品の地域性と系譜について簡単にコメントしてみたい。

これまで指摘されたように、分銅形土製品には比較的明確な地域差が認められる（谷若 1989）。人面付分銅形土製品は弥生時代中期中葉段階に山口・愛媛県で突如として出現し、ほぼ同時期とされる岡山県用木山遺跡例は顔面の表現方法が全く異なり、人面付分銅形土製品は出現当初から地域差が認められると考えられる。山口県及び愛媛県出土資料は粘土紐を貼り付けて眉と鼻を表現し、表情も柔軟なものが多い。小地域性といえるかどうか断定できないが、山口県出土のものには目の表現がほとんど施されないが、愛媛県下の資料には目と口を表現しようという意識が強いようである。広島県下の資料には粘土紐によって眉を表現するものが認められず表情も硬い。山陰の資料には鳥取県倉吉市阿弥陀寺遺跡出土資料のように、粘土紐を貼り付けて鼻を表現するものもある。倉吉市後中尾遺跡例と島根県安来市十善遺跡例とに共通しているのは、刺突によって施された目の位置が側面部に近くあたかも、顔が狭くなったかのような状態を呈する点であろう。

近年、弥生時代前期後葉～中期前葉段階の分銅形土製品の資料が漸く内で充実してきつつある。香川県普通寺市龍川五条遺跡例や愛媛県今治市阿方遺跡例などがそうである。この段階の分銅形土製品の顔面表現は立体的に



人面付分銅形土製品の分布（東1982より）

No.	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	文献
11	井上山	山口県防府市	包含層	中・中	吉瀬 1979
21	井上山	山口県防府市	A区3号土坑	中・中	吉瀬 1979
31	井上山	山口県防府市	表埋	中・中	吉瀬 1979
41	井上山	山口県防府市	表埋	中・中	吉瀬 1979
51	天玉	山口県萩毛郡萩毛町	A区第3号竪穴住居	中・中	森田 1986
61	天玉	山口県萩毛郡萩毛町	表埋	中・中	森田 1986
71	山田	山口県萩毛郡萩毛町	A区第1号竪穴住居	中・中	森田 1986
81	道道	山口県萩毛郡萩毛町	7号住居	後・前	前田ほか 1988
91	明照	山口県萩毛郡萩毛町布施町	土坑SK22	中・後	岩崎ほか 1994
101	祐方	広島県芦品町新市町	表埋	後・前	鶴坂 1977
111	御所	広島県芦品町新市町	表埋	後期	村上 1940
121	足守川加茂8	岡山県岡山市	包含層	後期	光永ほか 1995
131	加茂政所	岡山県岡山市	竪穴住居44	後・前	柴田ほか 1999
141	加茂政所	岡山県岡山市	块状土器47	中・後	柴田ほか 1999
151	上栗	岡山県京都市	斜面埴輪	後・後	柳原ほか 1977
161	上栗	岡山県京都市	斜面埴輪	後・後	小林・米田 1999
171	西吉田北	岡山県津山市	土壇41	後・前	行田ほか 1987
181	舟木山	岡山県赤磐市舟木山町	住居址	中・中	神原 1977
191	舟木山	岡山県赤磐市舟木山町	住居址	中・後	神原 1977
201	三ツ山	岡山県赤磐市舟木山町	包含層	中・後	神原 1977
211	猪富	岡山県赤磐市舟木山町	包含層	後期	下澤ほか 1996
221	下郷原田代	鳥取県境港市川上村	No.1~6住居	後・後	下澤ほか 1995
231	阿弥大寺	鳥取県境港市	1号住居址	後・前	真田 1986
241	阿弥大寺	鳥取県境港市	馬頭塚	中・後	高橋ほか 1996
251	十日月	鳥取県境港市	馬頭塚	中・未~後期	内山 1970
261	御幸寺山	愛媛県松山市	表埋	森・大山 1981	
271	水通田	愛媛県松山市	SK04	中・後	岡田ほか 1980
281	文京	愛媛県松山市	1号PPD05	中・後	長井ほか 1986
291	文京	愛媛県松山市	2号SB05	中・後	長井ほか 1986
301	文京	愛媛県松山市	2号SB06	中・後	長井ほか 1986
311	文京	愛媛県松山市	2号SB07	中・後	長井ほか 1986
321	文京	愛媛県松山市	2号SB03?	中・後	長井ほか 1986
331	文京	愛媛県松山市	2号SB05?	中・後	長井ほか 1986
341	文京	愛媛県松山市	4号SK01	中・後	長井ほか 1986
351	沢谷アソリ	愛媛県松山市	包含層	中・後	長井ほか 1986
361	沢谷六丁場	愛媛県松山市	SB2	後・前	山之内 1992b
371	沢谷六丁場	愛媛県松山市	包含層	中・中	京崎編 1991
381	沢谷六丁場	愛媛県松山市	包含層	中・中	京崎編 1991
391	沢谷六丁場	愛媛県松山市	包含層	中・後	京崎編 1991
401	福曾小学校境内	愛媛県松山市	SP4522	山之内 1995	
411	福曾小学校境内	愛媛県松山市	SB15	中・中	山之内 1995
421	博味四反地	愛媛県松山市			
431	太田下・清川	香川県高松市	包含層		北山編 1995
441	旧練兵場	香川県高松市	SD005無底層	中・中~後・前	木本報告
451	紫雲出山	香川県三豊郡	包含層		小林・佐原 1964
461	西義峰	徳島県阿波市阿波街			高島 1994
471	魚田	兵庫県尼崎市			
481	魚井	大阪府八尾市	SD3041	中・中~後・前	金光 1980
491	魚井	大阪府八尾市			成善 1991

人面付分銅形土製品一覧

Fig.86 人面付分銅形土製品の分布

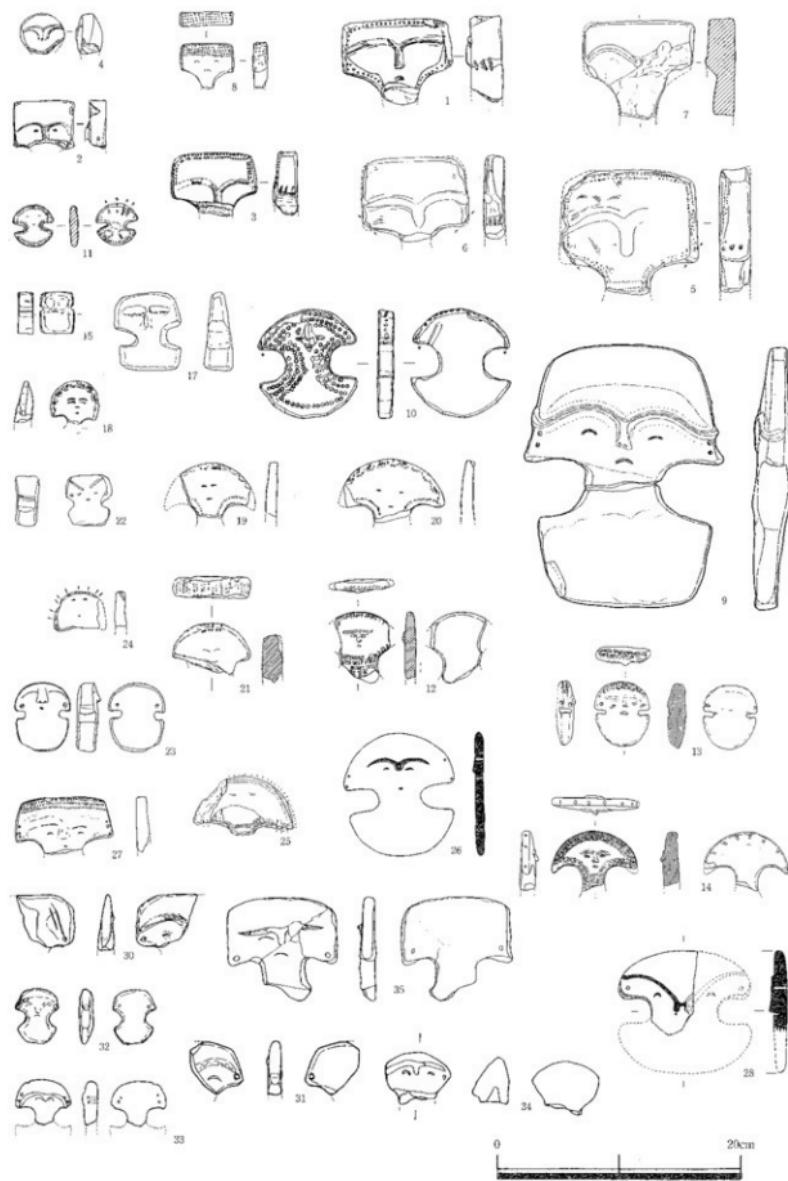


Fig.87 人面付分銅形土製品集成1 (1/4)

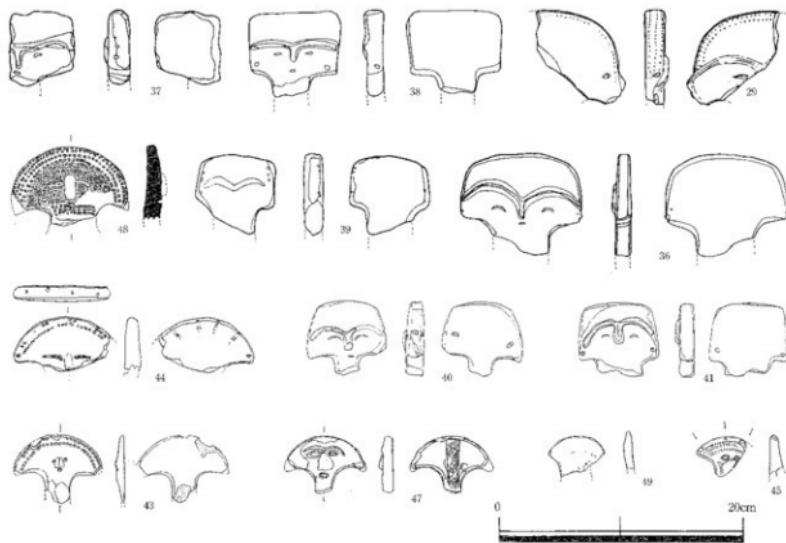


Fig.88 人面付分縫形土製品集成2 (1/4)

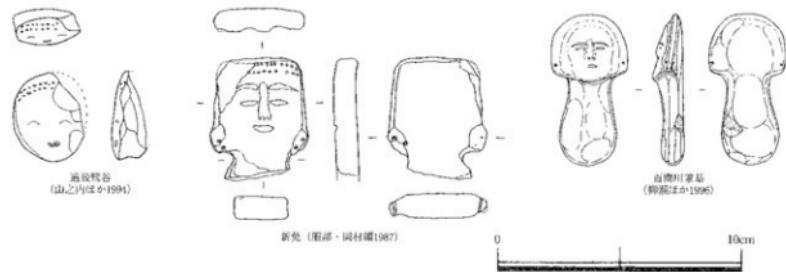


Fig.89 人面付人形土製品 (1/2)

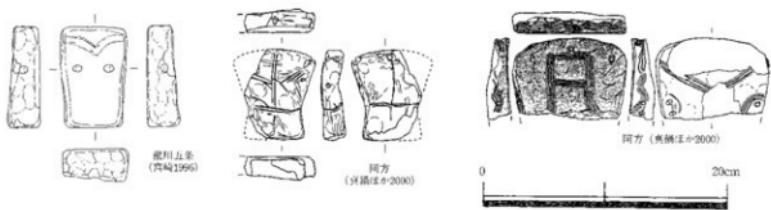


Fig.90 四国地方の初期分縫形土製品 (1/4)

は施されず、表面的に刺突文や直線文による眉などの表現がされたのみであることがこれらの資料から窺える。つまり、人面付分銅形土製品は弥生時代中期中葉に新たに出現する可能性が高くなつたということになろう。

香川県出土資料の特徴は当遺跡例も含めて3点と数量的に少なく、断定はできないが、強いて言うならば、眉を粘土紐で貼り付けて表現することはなく表情も硬いということになる。この特徴は隣接する愛媛県よりも岡山県の出土資料に近いといえる。ただ、岡山県では眉を粘土紐によって表現する資料も出土しているが、香川県下では現在の所出土していない。人面付分銅形土製品に限つていうならば香川県の独自の地域色は薄く、岡山県つまり古墳型の色彩が色濃いことを指摘しておきたい。

古墳において弥生時代中期中葉以降に人面付分銅形土製品が出現する契機として、邪視文銅鐸や人形土製品との関係からであるとの説がある（柴山 1999）。岡山県出土の資料や香川県蛇間町紫雲出山遺跡例では邪視と類似した日の表現が認められる。また、弥生時代の人形土製品の分布も岡山県で後期段階に多くが認められる（角南 2000）。では、愛媛県の柔軟な表情は何に由来するものなのだろうか。人面の表情という視点からも古墳型と西部瀬戸内型は異なった系譜にあると言えそうだ。

#### 【註】

- 1) 岡山遺跡例は兵庫県教育委員会別府洋二氏・岸本一宏氏の御教示に、上東遺跡例は岡山県古代古墳文化財センターの小林利晴氏・河合忍氏の御教示による。

#### 【引用・参考文献】

- 東 潤 1982「分銅形土製品とその祭祀」「古代の顔」 福岡市立歴史資料館  
岩崎仁志ほか 1994「岡地遺跡」Ⅲ（附） 山口県教育財團・山口県教育委員会  
内田 才 1970「原始・古代」「安来市誌」 安来市  
岡田敏彦ほか 1980「一般国道3号姫路道開闢埋蔵文化財調査報告」1 （附） 爰媛県埋蔵文化財調査センター  
藤井智明・松本裕康・守岡正司 2000「山陰地方分銅形土製品集成」「古代文化研究」8 烏根原古代文化センター  
金光正裕 1980「龜井遺跡出土の分銅形土製品について」「龜井・城山」（財）大阪文化財センター  
川越哲志 1983「安芸・備後の分銅形土製品」「広島大学統合野外地質文化財発掘調査年報」II 広島大学統合野外地質文化財調査委員会  
北山健一郎編 1995「太田下・須川遺跡」 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター  
倉吉市 1996「新堀倉吉市」1 倉吉市  
神原英樹 1977「雨木山遺跡」 山陽町教育委員会  
小林利晴・米田义典 1999「(9) 土手方面道兵馬高松線改良に伴う発掘調査」「岡山県埋蔵文化財報告」29 岡山県教育委員会  
小林行雄・佐原 伸 1964「紫雲山」 津町文化財保護委員会  
篠川龍一 1995「因岐の分銅形土製品」「香川考古」4 香川考古刊行会  
真田廣幸 1981「土木積石路群発掘調査報告」Ⅱ 倉吉市教育委員会  
桑田英樹 1999「頬のある分銅形土製品」「加茂政所遺跡」 岡山県教育委員会  
桑田英樹ほか 1999「加茂政所遺跡」 岡山県教育委員会  
下澤公明ほか 1995「下郷原田代遺跡」 岡山県教育委員会  
下澤公明ほか 1996「斎富遺跡」 岡山県教育委員会  
角南聰一郎 1993「奈紀土製品」小考」「大阪文化財研究」5 （財）大阪文化財センター  
角南聰一郎 1995「瀬戸地方の分銅形土製品雑考」「考古文集」 近藤義郎古希記念考古文集刊行会  
角南聰一郎 2000「弥生時代の人形土製品」「奈紀考古学」2 奈紀考古学会  
高島芳弘 1994「描かれた弥生人のくらし」「徳島県立博物館  
高橋 誠 1987「分銅形土製品」「弥生文化の研究」8 雄山閣  
田中筋弘 1994「弥生の折り人」「瀬戸県立安土城考古博物館

- 谷若倫郎 1989 「分銅形土製品にみる地域相」『花園史学』10 花園大学史学会
- 長井千秋ほか 1986 「愛媛県史資料編「考古」「愛媛県」
- 中村倉司 1994 「弥生人の風貌」「検証! 関東の弥生文化」 埼玉県立博物館
- 成海佳子 1991 「毛井遺跡第3次調査」「平成2年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」 (附) 八尾市文化財調査研究会
- 樋本裕行 1997 「弥生人の顔」「考古学ジャーナル」416 ニューサイエンス社
- 服部聰志・岡村耕行編 1987 「新免遺跡第11次発掘調査報告書」阪急宝塚線豊中市内連続立体交差道路調査団・豊中市教育委員会
- 浦田耕次ほか 1988 「追道遺跡」 山口県教育委員会
- 真鍋明文ほか 2000 「阿方遺跡・矢田八反伴遺跡」 (附) 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 光永真一ほか 1995 「足守川加茂B遺跡」 岡山県教育委員会
- 吉崎哲治 1996 「施川五条遺跡」 I 香川県教育委員会・(附)香川県埋蔵文化財調査センター
- 宮崎赤好編 1991 「祝谷六丁場遺跡」 松山市教育委員会・(附)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 村上正名 1940 「備後國宍安郡御野村御前発見石器時代土器に就きて」「備後史談」16-12
- 森 実輔・大山正風 1976 「文京遺跡」 松山市教育委員会
- 森田孝一 1986 「山口大学埋蔵文化財資料館の分銅形土製品」「RELIICS」3 山口大学考古学研究室
- 柳瀬昭彦ほか 1977 「川入・上東」 岡山県教育委員会
- 山之内忠郎 1992a 「遺後城北地域出土の分銅形土製品」「祝谷アイリ遺跡」 松山市教育委員会・(附)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 山之内忠郎 1992b 「分銅形土製品の謎」 松山市考古館
- 山之内忠郎ほか 1994 「遺後城北遺跡群」 II 松山市教育委員会・(附)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 山之内忠郎 1995 「分銅形土製品」「福音小学校構内通路」 II 松山市教育委員会・(附)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター
- 山削進平 1999 「岡山県下出土の弥生時代人面表現について」「田畠町中通路」 岡山県教育委員会
- 行田裕美ほか 1997 「西古田北遺跡」 津山市教育委員会
- 吉瀬徹志ほか 1979 「舟上山」 井上山遺跡発掘調査団
- 福島光彦 1977 「広島県芦品郡新市町相方出土の分銅形土製品」「古代学研究」85 古代学研究会

## 旧練兵場遺跡出土の磨製石包丁未製品について

### 1.はじめに

香川県の弥生時代において、磨製石器の出土量は極めて少ない。弥生時代前期では磨製石庖丁・大型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧などが存在するが、中期になると減少し、磨製石包丁はほとんど姿をみせなくなる。かわってサヌカイトを用いた、打製石器製作の伝統が定着・盛行する。そして、後期には鉄器の普及などの要因から、石斧など的一部を除いて消滅の一途をたどる。このような様相の中で、旧練兵場遺跡からは磨製石斧や磨製石庖丁とともに、弥生時代中期末～後期の、磨製石庖丁の未製品が4点出土した。よって、それらの素材の獲得から製作について、若干の考察をおこなう。

### 2. 旧練兵場遺跡出土の磨製石包丁未製品

1は長さ4.7cm、幅3.3cm、厚さ1.2cm、重量19.1gの緑黒色を呈す、緑泥片岩製の磨製石庖丁の未製品であり、約半分を欠損する。全体を剥離によって大まかに成形し、その後研磨を施している（網掛け部）。研磨は体部の片面と上端面から側面にかけて認められ、ともに節理方向に研磨されている。溝SD005黒褐色土層L7区出土。

2は長さ7.9cm、幅3.5cm、厚さ0.8cm、重量40.1gの黒色片岩製の磨製石包丁未製品であり、若干欠損している。節理によって分割されているため剥離方向は不明である。上端面（網掛け部）のみに弱めの研磨をおこなう。SD005黒褐色土層P5区出土。

3は長さ4.9cm、幅4.5cm、厚さ1.5cm、重量56.7gの薄緑色を呈す、緑泥片岩製の磨製石庖丁の素材である。やや厚手であり、欠損する。

剥離によって大まかに成形するが、片面は自然面（網掛け部）を大きく残している。もう一方の面は荒削り段階の剥離痕を全面に残している。溝SD005黒褐色土層H3区出土。

4は長さ6.8cm、幅3.2cm、厚さ1.1cm、重量22.5gの薄緑色を呈す、緑泥片岩製の磨製石庖丁の未製品であり、全体を大きく欠損している。体部にのみ研磨が施されている（網掛け部）。SD005暗黒褐色土層F2区出土。

これらは、上器との対応関係から、4のみ中期末～後期初頭のものであり、1～3は全て後期以降に帰属すると考えられる。いずれも、少なくとも片面の体部及び背部に研磨痕が認められ、この研磨痕が隣接する剥離面を切っていることから、ある程度剥離して素材を準備した後、研磨されていることが分かる。研磨はその施工部位の組み合わせから、背部→体部→刃部の流れが想定され、おそらく、片面を研磨した後に、反転して同様の作業を繰り返し、製品化するものと考えられる。旧練兵場遺跡から出土した資料は、いずれも欠損しており、研磨途中であることなどから、穿孔以前の荒磨きの段階で欠損したため、溝に廻収されたものであろう。

### 3. 磨製石器と石材との関係

旧練兵場遺跡において、最も早い時期の磨製石器は弥生時代中期前葉の大型蛤刃石斧であるが、それ以前の資料は出土していないため不明である。また、中期の段階は打製石器しか出土せず、磨製石器は皆無である。中期

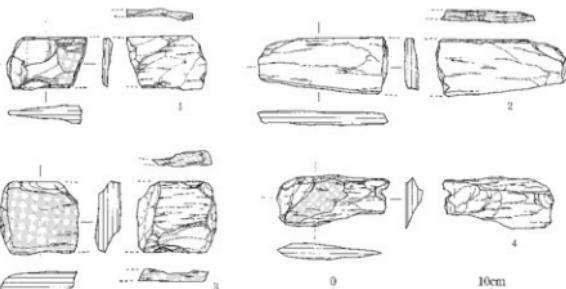


Fig.91 旧練兵場遺跡出土の磨製石包丁未製品 (1/3)

末～後期初頭になると、SD005暗黒褐色土層から、薄緑色を呈す緑泥片岩製の磨製石斧とともに磨製石庖丁の未製品がそれぞれ1点ずつ出土している。また、ほぼ同時期である土坑SK036からは、粘板岩製の磨製石庖丁が1点出土している。続く、後期初頭以降の満SD001及びSD005暗黒褐色土層からは、薄緑色を呈す緑泥片岩製の磨製石庖丁とともに、磨製石庖丁の未製品が3点と、磨製石斧などが出土している。

このように、旧練兵場遺跡から出土した磨製石器は、石鍤3点、磨製石斧3点、磨製石庖丁2点、磨製石庖丁未製品4点の合計12点である。これらは石材により、5つに大別できる。①砂岩系の石材であり、石鍤及び大型蛤刃石斧のみに用いられている。砂岩は、堆積層中にも多く含まれておらず、容易に採集できる石材であろう。②は粘板岩であり、磨製石庖丁の製品のみの出土である。③は薄緑色を呈す緑泥片岩であり、磨製石庖丁と磨製石剝削用の磨製石斧などが出土している。また、1点のみ磨製石庖丁の未製品が出土している。④は暗黒色を呈す緑泥片岩であり、柱状片刃石斧と磨製石庖丁未製品が2点出土している。⑤と⑥はともに、吉野川流域などの中央構造線上の地域で採集できるものと推定される。⑦は黒色片岩系であり、磨製石庖丁未製品のみ出土し、製品としては出土していない。また、磨製石器ではないが、通常、磨製石器に利用される紅麻片岩製の打製石包丁が土坑SK077（中期末～後期初頭）から出土している。以上のように、磨製石器に用いられる石材は5種類、土坑SK077の例を含めると6種類あり、石材により器種の使い分けがなされている。

#### 4. 他遺跡の様相

香川県内において磨製石庖丁の未製品は出土していないが、普通寺市龍川五条遺跡と大川郡志度町鶴部・川田遺跡の資料は磨製石庖丁の未製品の可能性がある。鶴部・川田遺跡では結晶片岩製の打製石包丁がD区SH05か

Tab.2 香川県における片岩製打製石器一覧表

番号	遺跡名	遺構名	器種	石材	備考
1	上天神遺跡	4区SK01	板状剥片	片岩	
2	上天神遺跡	3区SD03	打製石包丁	結晶片岩	
3	上天神遺跡	3区SD03	打製石包丁	結晶片岩	
4	上天神遺跡	4区SK09	打製石包丁	片岩	縁辺片面調整
5	上天神遺跡	4区補遺2	打製石包丁	片岩	やや肉厚。刃・背部調整浅い。
6	上天神遺跡	4区SD16	打製石包丁	片岩	
7	上天神遺跡	4区補遺3	打製石包丁	片岩	
8	上天神遺跡	4区SD08	打製石包丁	片岩	
9	上天神遺跡	4区包含層	打製石包丁	片岩	
10	上天神遺跡	4区	打製石包丁	片岩	
11	上天神遺跡	4区	打製石包丁	片岩	
12	上天神遺跡	4区包含層	打製石包丁	片岩	
13	上天神遺跡	4区	打製石包丁	片岩	
14	上天神遺跡	4区	打製石包丁	片岩	
15	鶴部・川田遺跡	C区包含層	打製石包丁	結晶片岩	
16	前田東・中村遺跡	F3・4区包含層	打製石包丁	結晶片岩	
17	前田東・中村遺跡	G区SR02	打製石包丁	結晶片岩	
18	久米池南遺跡	第7号竪穴住居	打製石包丁	結晶片岩	刃部は磨耗がはげしい
19	長砂古遺跡	I区包含層	打製石包丁	緑泥片岩	片方の側縁に抉りを施す
20	楠木遺跡	第8号集石墓	打製石包丁	結晶片岩	両端部の抉部に摩滅痕あり
21	一の谷遺跡	第6号窓穴住居	打製石包丁	結晶片岩	
22	一の谷遺跡	平塚地区包含層	打製石包丁	結晶片岩	刃部に摩滅痕あり
23	一の谷遺跡	包含層	打製石包丁	結晶片岩	

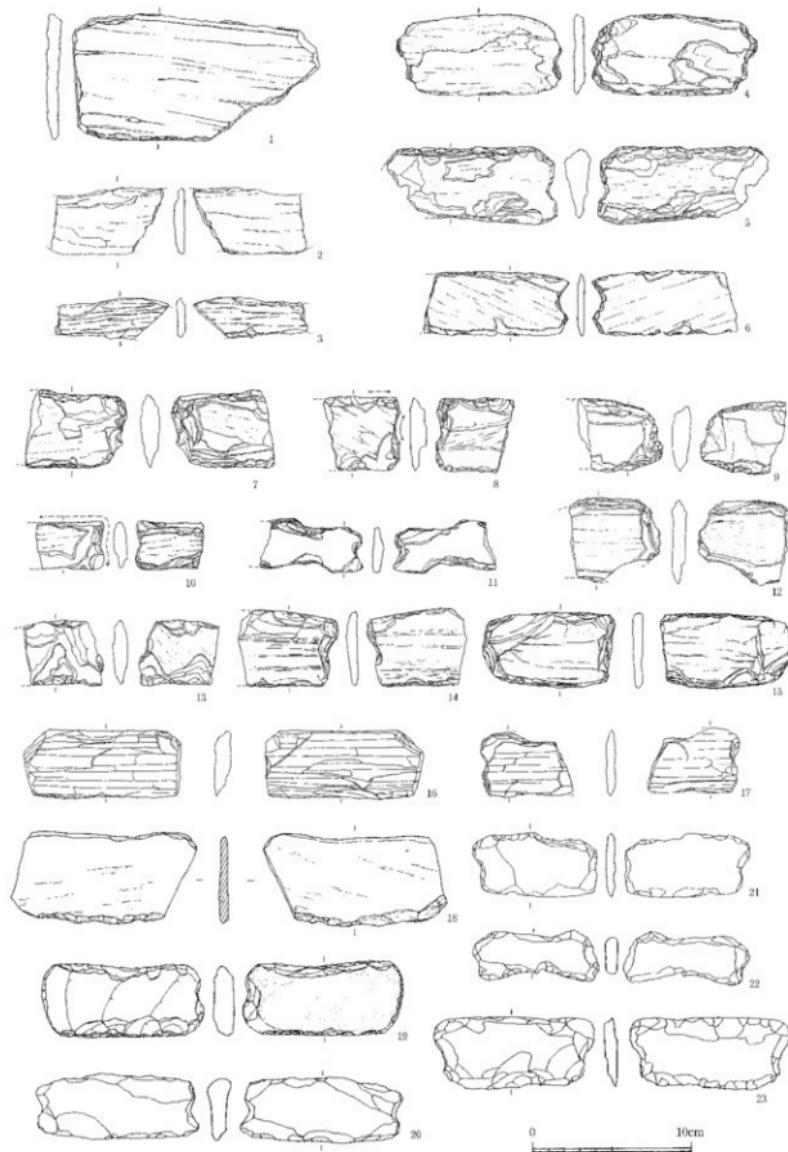


Fig.93 香川県における片岩製打製石器 (1/3)

ら出土している。これは体部の片面に摩滅痕が観察されると報告されているが、研磨途中の未製品の可能性も考えられる資料であろう (Fig.92-1)。また、龍川五条遺跡では弥生時代後期のSD52から、緑泥片岩製の資料 (fig.92-2) が出土しているが、「磨製石器転用時に生成された剥片であろう」と報告されている (森下1998)。素材の厚さが約1cm弱程度であり、平行する長軸に剥離を施して整形していること、研磨途中であり欠損により溝に廃棄されたものと考えられる。この状況は、旧練兵場遺跡と同様のあり方であり、磨製石器の未製品の可能性がある。

また、通常磨製石器に利用する紅麻片岩製の打製石庖丁が土坑SK077から出土しているが、打製石器製作を伝統とする瀬戸内沿岸地域、特に香川県においては、他にも片岩素材を打製によって製作することが多々ある。その内、特に出土点数の多いのが高松市上天神遺跡である。上天神遺跡からは、少なくとも14点以上の片岩製遺物が出土している。また、片岩製の素材と考えられる資料が3点出土しており、注目に値する。1点は4区SK01から出土しており (fig.93-1)、他に凹面なども出土していることから製作途中のものかもしれない。残りの2点はとともに、結晶片岩製の打製石包丁であるが、3区SD03からの出土であり、2点とも欠損している (fig.93-2・3)。その他、前田東・中村遺跡からも、結晶片岩製の資料が溝SR02 (G区) から2点出土している (Fig.93-16・17)。これらは、とともに打製石包丁と報告されているが、ほとんど調整が施されておらず、ほぼ素材の状態であり、欠損している。この他にも、素材に近い状態の資料が、鴨部・川田遺跡 (fig.93-15) などで出土しているが、上天神遺跡や一の谷遺跡などで素材に抉りを施し、明らかに打製石包丁として製作しているものも存在する (fig.92-8・11・14・19-23)。

## 5.まとめ

香川県において磨製石器の未製品がほとんど出土しないことから、製品で流通しているという指摘があるが (菅 1992)、旧練兵場遺跡や鴨部・川田遺跡、龍川五条遺跡などからは、緑泥片岩や結晶片岩など、極めて少量の出土であるが製品とともに未製品も出土する可能性がある。また、各遺跡から石器製作を想わせる砥石や石錐などが出土することから、遺跡内で製作活動がおこなわれていたことが窺える。また、製作に伴って生じる剥片や碎片などが一切出土しないことから、ある程度剥離によって成形された素材の状態で遺跡内に搬入し、研磨以降の作業がなされていたと推定される。これらの資料は、おそらく石材の産出地から、まず上天神遺跡などの搬入點集落に搬入され、集落内で製作されたものと考えられる。そこから、周辺遺跡に移動したと考えられるが、現状では、周辺集落においてどのような様相を呈していたのか不明である。また、溝出土のものは全てが欠損品であり、土壤や住居址から出土するものの中に素材や完形品のものが多いことから、溝出土の資料は製作段階あるいは使用に伴って欠損したために、廃棄されたものの可能性が高い。一方で、土壤や住居址から出土する素材や完形品は製作途中ないし実際に使用されているものと考えられる。

これらは主に弥生時代中期～後期初頭にかけての状況である。この時期は、弥生時代中期に定着した打製石器製作の伝統に、磨製石器の素材である片岩が流通する時期であり、片岩という石材であるにもかかわらず打製

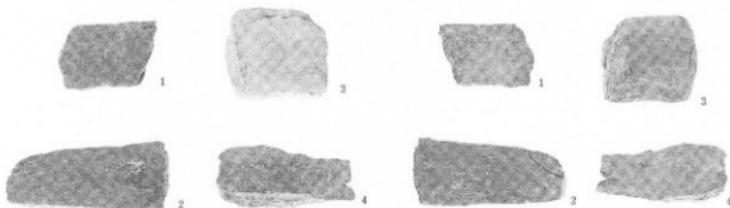


Fig.94 磨製石庖丁の未製品

の石包丁やスクリューが存在する。そのような現象は各遺跡で観察されるが、一方で、同じ石材を用いながら、石包丁などの磨製石器を製作することもある。このように、打製・磨製と製作技術が異なっているにもかかわらず、同時期に同じ石材を両方の方法で製作することは非常に興味深い。

## 6. おわりに

香川県内において磨製石器の未製品の発見はほとんどない。このことは、未製品などが大量に出土する、いわゆる製作址というものが明らかにされていないため、ごく少量しか出土しない遺物が見落とされている可能性がある。このような製作址が未発見であることは、単純にまだ発見されていないだけか、あるいは近畿の様相とは異なった流通システムが存在していたことが考えられる。詳細に調査してからでなければ確定的なことは分からぬが、旧練兵場遺跡や鷹部・川田遺跡、龍川五条遺跡などの例から、県内においても磨製石器の未製品が若干ではあるが出土していることが示せたのではないだろうか。さらに、搬入形態や遺跡間における流通の問題など様々な問題が数多く存在するが、他の遺跡での未製品資料の確認が必要であり、今後の早急に解決しなければならない課題であろう。

### 【引用・参考文献】

- 秋山浩三・仲原知之 1998 「近畿における石包丁生産・流通の再検討（Ⅰ）—池上曾根遺跡の石包丁製作工房—（上）」『大阪文化財研究』15 (附) 大阪府文化財調査研究センター
- 磯崎寛ほか 1988 「石田遺跡・長谷古跡跡・作田八丁遺跡」 香川県教育委員会
- 菅 葉太郎 1992 「弥生時代の石器生産と流路 一讃岐平野における 様相と近畿地域との関係ー」『考古学と生活文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 仲原知之 2000 「和泉地域の石包丁生産と流路—近畿における石包丁生産・流通の再検討（Ⅱ）—」『洛北史学』2 洛北史学会
- 西岡達哉ほか 1990 「一の谷遺跡群」 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 野中寛文ほか 1989 「細木遺跡」 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 藤井雄三ほか 1989 「久米池衛門跡発掘調査報告」 高松市歴史民俗協会
- 村田季子 1992 「轟内における石包丁未製品の分析」『大阪文化財研究』3 (附) 大阪文化財センター
- 森 格也ほか 1995 「上天神遺跡」 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 森 格也ほか 1995 「前田東・中村遺跡」 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 森 格也ほか 1997 「鷹部・川田遺跡」 I 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下英治ほか 1998 「龍川五条遺跡Ⅱ・延野東分山崎南遺跡」 香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター

## 旧練兵場遺跡出土の打製石器素材

### 1.はじめに

旧練兵場遺跡からは、打製石器の素材となるいわゆる「板材」といわれるものが出土している。また、その「板材」を素材とした石核やその石核から剥離された剥片などが出土している。金山産サヌカイトは、縄文時代後期以降、広島県洗谷貝塚や香川県国分寺ハッ目遺跡などの状況から、板材の状態で移動していたと考えられているが（竹広 1988）、弥生時代についてはあまり研究が進んでいない。よって、具体的な分析はできなかつたが、これらの資料提示をおこないたい。

### 2.旧練兵場遺跡出土の石核及び剥片

1は長さ10.0cm、幅5.9cm、厚さ2.0cm、重量137.4gである。土坑SK045の出土であり、弥生時代中期末～後期初頭のものである。大きく欠損しているため元の大きさは不明であるが、いわゆる板状の素材であり、背面側に少なくとも3枚以上を剥離した痕跡を持つことから、板材素材の石核であることが分かる。また、背面の剥離は、その大きさから目的剥片を作出したものだと考えられる。腹面側には板材を剥離した際の大きな面をそのまま残し、側縁には自然面を残している。その自然面の状態から、サヌカイトの節理方向に沿って、板材を作り出していることが窺える。

2は長さ12.7cm、幅7.4cm、厚さ2.8cm、重量209.2gである。溝SD005黒褐色土層出土の資料であり、弥生時代後期初頭以降の遺物である。この資料も大きく欠損しているため、元の大きさは不明であるが、いわゆる板材であり、分類上は剥片となる資料である。背面には剥離面が2枚観察されるが、その大きさや剥離方向などから目的剥片の剥離を意図したものではなく、サヌカイトの節理方向に沿って、板材を準備する段階で形成されたものだと考えられる。側縁には全体的に自然面を残しており、自然面を打面として剥離されている。

3は長さ13.7cm、幅10.3cm、厚さ1.9cm、重量245.9gである。SD005暗黒褐色土層出土であり、弥生時代中期末～後期初頭のものである。背面、腹面ともに1枚の剥離面で形成されている、典型的な板材であるが、欠損のため元の大きさや剥片なのか、石核なのかは不明である。また、欠損面には打点が残っている。両面とも剥離の末端側にまで自然面が残っており、極めて大きな原石を素材として作出されたものだと推定される。

4は長さ8.7cm、幅6.5cm、厚さ1.7cm、重量66.3gである。SD005黒褐色土層出土であり、弥生時代後期初頭以降の遺物である。背面と腹面の両面に平坦で大きな剥離面を残し、扁平な形状をしていることから、板材素材だということが分かる。素材である板材の側縁に残された自然面を打面とし、剥離をおこなう板材素材石核である。剥離された剥片の大きさはそれほど大きくなく、目的剥片の作出を意味する石核であったのか、あるいは調整であり、打製石包丁のようなものの製作を意図するものなのかは、剥離を開始した直後に欠損が起こり、それ以上製作は継続されなかつたようであり、不明である。

5は長さ8.6cm、幅6.4cm、厚さ2.0cm、重量72.2gである。SD005暗黒褐色土層出土であり、弥生時代中期末～後期初頭のものである。一方に板材の素材面と考えられるような、扁平で大きな剥離面を残していることから、板材を素材とする石核であると考えられる。比較的作業面が固定されており、作業面の剥離と板材の素材面は同一方向からの剥離である。上端部（板材の側縁）には自然面を有しているが、欠損により元の大きさは不明である。

6は長さ8.7cm、幅6.5cm、厚さ1.9cm、重量69.0gである。SD005黒褐色土層出土であり、中期中葉～中期後葉にかけての資料である。平坦で扁平な面の一部を取り込むように剥片を剥離する石核であり、目的剥片剥離後にその作業面を打面として調整が施されている。この調整は打面調整と考えるよりは、打製石包丁などの刃器への製作を意図したものと考えられる。

7は長さ4.5cm、幅3.9cm、厚さ1.2cm、重量18.6gである。SD005黒褐色土層出土であり、弥生時代後期初頭以降のものである。剥離した際に垂直割れを起こした剥片であるが、板材などの扁平で大きな剥離面を一部に取り込んでいる。打面には調整が施されているのが観察される。

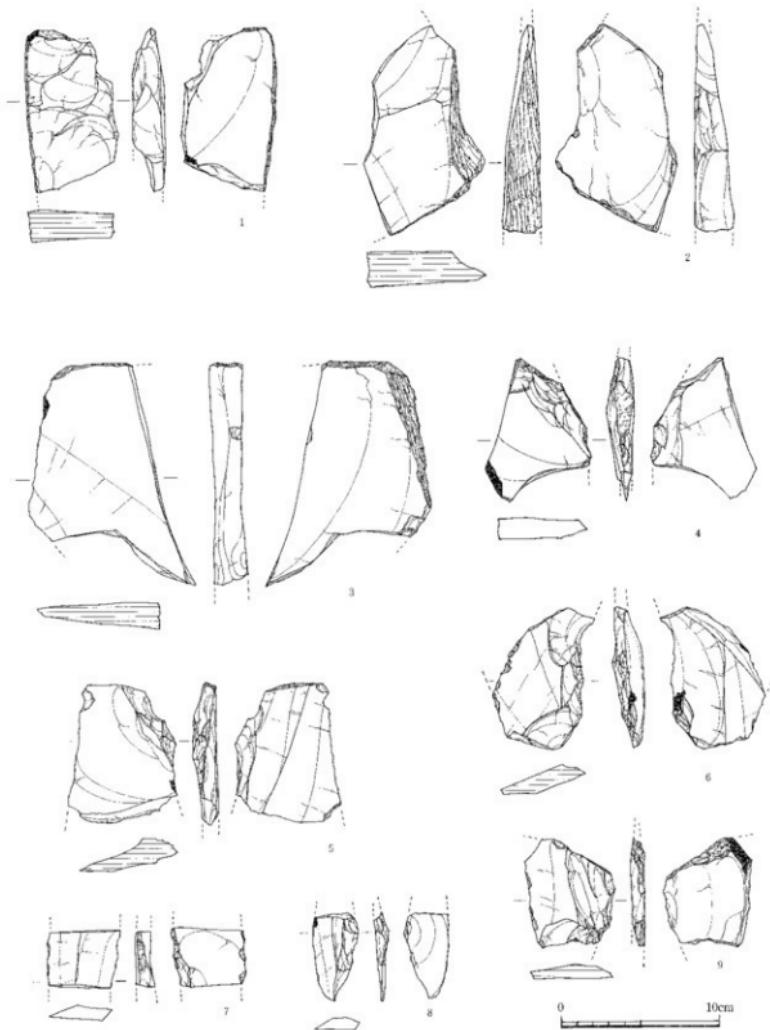


Fig.95 II練兵場遺跡出土の石核及び刃片 (1/3)

8は長さ2.7cm、幅5.4cm、厚さ0.9cm、重量8.5gである。SD005暗黒褐色土層出土であり、弥生時代中期～後期初頭のものである。板材などの扁平で大きな剝離面を一部に取り込んでいる刃片である。一部を欠損するが、打面を調整によって作り出している。

9は長さ5.4cm、幅6.9cm、厚さ1.0cm、重量45.1gである。満SD005黒灰色土層出土であり、中期中葉～中期後葉

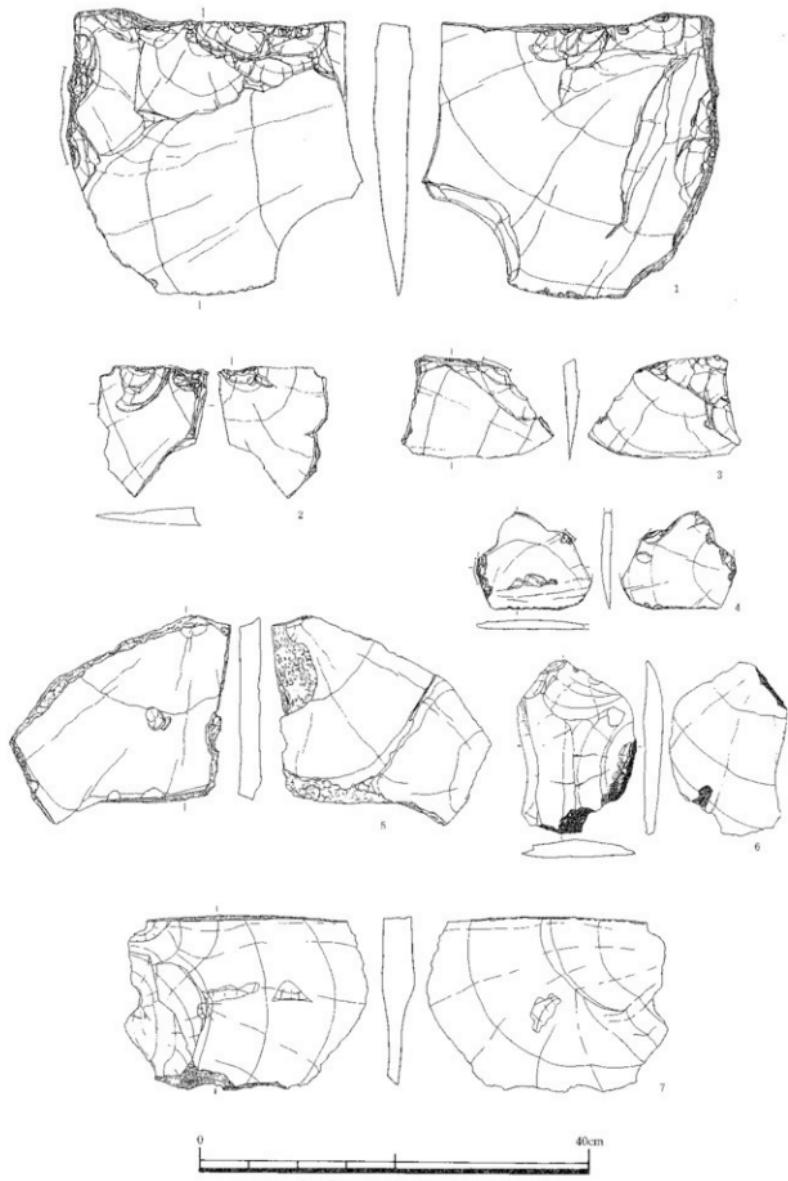


Fig.96 香川県における打製石器の素材 (1/5)

Tab.3 香川県の弥生時代における板材一覧表

番号	遺跡名	遺構名	器種	石材	備考
1	鴨部・川田遺跡	C区SD01	素材剥片	サヌカイト	部分的に敲打と弱い調整を施す
2	鴨部・川田遺跡	C区SD02	素材剥片	サヌカイト	剥離時の打点有り
3	鴨部・川田遺跡	C区SD03	素材剥片	サヌカイト	敲打痕有り
4	鴨部・川田遺跡	C区包含層	スクレイパー	サヌカイト	刃部脱い、側縁部の一部に敲打痕
5	鴨部・川田遺跡	B区SH01	素材剥片	サヌカイト	
6	龍川五条遺跡	SR02	剥片石核	サヌカイト	
7	龍川五条遺跡	SK45	石核	サヌカイト	調整は全く施されていない

にかけての資料である。板状の素材の側縁部に残された自然面を打面とした調整により打面調整がおこなわれている。

### 3、他遺跡の様相

旧練兵場遺跡からは、打製石器の素材となるような資料が出土しているが、このような資料は大川郡志度町鴨部・川田遺跡や善通寺市龍川五条遺跡などの拠点集落で認められる。鴨部・川田遺跡の例では、C区のSD01からいわゆる板材とよばれる大きな板状の素材が1点 (fig.96-1) と、そこから分割されたと考えられる15cm角程度の素材が2点 (fig.96-2・3) 出土している。また、C区の包含層からも20cmを越す、大型の素材が出土している (fig.96-5)。これは側辺の全周に自然面が付着しており、元の原石の大きさを知る上で重要である。さらに、B区のSH01では長さと幅10cm程度で厚さ1cmの板状の剥片 (fig.96-4) が出土しており、報告ではスクレイパーとなっているが (森 1997)、これらを素材として石器製作がなされていたと考えられる。

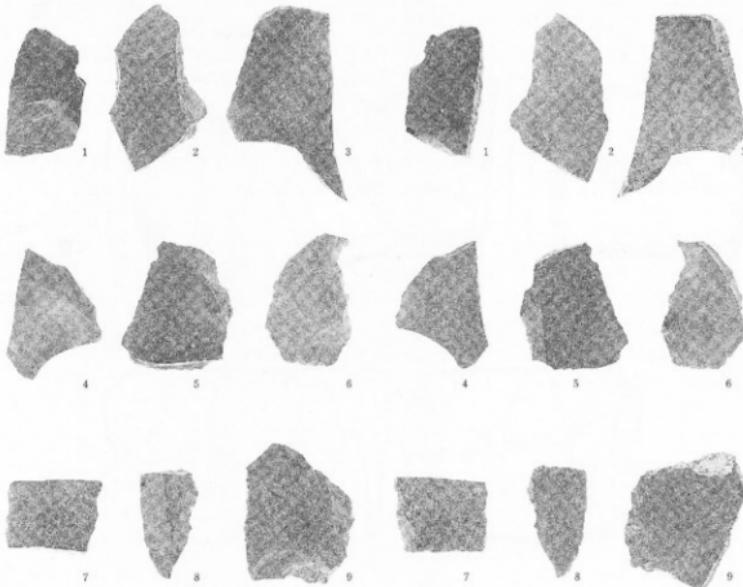


Fig.97 打製石器の素材

また、龍川五条遺跡では、素材といえるような遺物は2点出土している。1つはSR02出土の板材の剥片であり（fig.96-6）、もう1つはSK45出土の板材（fig.96-7）の石核である。この2点は上下両側縁に自然面を残し、板材を剥離した際の打点が近いことから、原石の大さが推定できる資料である。ここでは、鶴部・川田遺跡や龍川五条遺跡の例を挙げるにとどめたが、このような板状の素材の出土は決して稀なわけではなく、弥生時代の撲点集落ではよく認められる状況であろう。

#### 4. 石材の消費過程

以上みてきたように、板材は20cmを越えるような大型のものと、それよりも小さい10cm～15cm程度のものとの2者がある。大型のものには、欠損面がなく、比較的側縁などに自然面を有しているものが多いことから、石材作出において最も始めの形態であることが窺える。このような資料の大部分は、鶴部川田遺跡や龍川五条遺跡、旧練兵場遺跡などの撲点集落で認められ、いわゆる板材といわれる素材の状態や、あるいは原石の状態で集落内に搬入されていたものと考えられる。一方、小型のものは、そのほとんどがいずれかの部位で欠損している。このことは、金山産のサヌカイトという石材が、折損しやすい石材だからであるのかもしれないが、折れ面を有する資料が多いこと、その折れ面にも打点が残存する（fig.95-3）ことなどから分割・切断されていた可能性が高い。このように分割された板材は、10cm～15cm程度の大きさであり、小型の板材に相当するものであろう。撲点集落において大型の板材と小型の板材の両方が出土すること、剥片や碎片などが数多く出土することなどから、集落内において、大型の板材から適当な大きさの素材に分割し、その分割された小型の板材から目的剥片の剥離をおこなったり、あるいは直接打製石包丁などの刃器の製作をおこなっていたものと考えられる。

#### 5. おわりに

これまで弥生時代の石器研究は、極めて問題から、特に大陸系磨製石器について研究され、打製石器についてあまり触れられることはなかった。香川県において、大陸系磨製石器の出土は限られ、良質な打製石器の石材であるサヌカイトの原産地という要因から、極めて打製石器の出土量が多い。このような様相の中でサヌカイトの流通システムや石材の消費過程、製作技術などは十分に検討されておらず、不明な点が多い。このような問題を紐解く鍵として、いわゆる板材と呼ばれる資料の分析が重要と考えられる。本稿では、資料紹介が主となり、十分な分析・検討はおこなえなかったが、今後改めて考察をおこないたい。

#### 【引用・参考文献】

- 竹広文明 1988 「中国地方與文時代の剥片石器 その组成・剥片剥離技術」 『考古学研究』35-1 考古学研究会  
菅 宗太郎 1992 「弥生時代の石器生産と流通—讃岐平野における一條村と近畿地域との関係」 『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会  
森 信也ほか 1997 「鶴部・川田遺跡」 I 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター  
森下英治ほか 1998 「龍川五条遺跡」 I 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センタ…

## 「森岡虎夫」銘ガラス瓶について

—消費社会の考古学に向けて—

### 1.はじめに

旧練兵場遺跡では、淡褐色粘質土層（戦中前後の整地土）中から「森岡虎夫」銘のあるガラス瓶2本が出土した。いずれも横倒しになった状態で腐敗していたが、王冠によって栓をした痕跡が認められた。すぐ傍には同様に栓をした痕跡のあるガラス瓶一本が横倒しになった状態で出土した。こちらは無文である。「森岡虎夫」銘ガラス瓶は、他に正面に「香川縣牛乳協會」「電話普通寺□番」とあり、背面には「高温」「殺菌全乳」「一、八磅人」1と陽刻されている。もう一本には同様の陽刻がされるが、電話番号の部分は「電話普通寺一二四番」となっている。

これまで、近現代の考古学的資料が取り扱われることは少なかった。しかし、近年は広島の「原爆ドーム」が世界文化遺産に指定されたり、旧日本軍の施設も近代化遺産として保存していくという気運がある。普通寺市も旧陸軍関係の建築物が数多く残されており、こうした戦争関連の遺構・遺物は比較的古くから文化財・考古学的資料として認知されてきた。これを受けて発掘調査によって出土した近現代の日常生活遺物も研究対象として取り扱われるようになってきた。しかし、これらについて検討しようとする際に、大量生産された製品についての初期の「モノ」自体に関するデータはメーカーに記録されていることはほとんどなく、逆に遺跡出土の考古資料の持つ情報が有用になることも少なくないと考えられる。牛乳瓶についてもメーカーで記録された情報と出土資料の持つ情報をリンクさせることにより、より鮮明な牛乳の歴史を描き出すことができるだろう。ここでは、旧練兵場遺跡出土牛乳瓶を手掛かりに、近代・現代の消費社会における生産者とモノとの関係を簡単に考察してみたい。

### 2. 森岡牧場と森岡虎夫

「森岡虎夫」について、現場作業員の方々に聞き取りをした所、戦前旧練兵場敷地内に「森岡牧場」という牛乳屋が存在していたことがわかった。更にその森岡牧場の親戚筋の方が市内に在住していることも判明した。そこでそちらへ連絡をとった所、森岡虎夫氏の奥さんが健在であり調査に協力していただけるとのご快諾を得ため、調査に伺った。調査は2000年8月10日に森岡秀夫氏宅でおこなった。聞き取りは、虎夫氏の妻森岡シナさん（明治41（1908）年生まれ）、を中心に長男の森岡秀夫氏（昭和6（1931）年生まれ）、三女の近石喜美子さん（昭和11（1936）年生まれ）にも同席していただいた。

「森岡牧場」は、大正時代末期に虎夫氏の実兄にあたる森岡栄一氏が、普通寺市弘田の甲山寺近くで創業した牛乳屋で、その後、昭和4（1929）年8月に弟の虎夫氏（明治36（1903）～昭和45（1970）年）が後を引き継ぎ上



Fig.98 普通寺陸軍病院臨時第一分院・昭和18年頃（国立普通寺病院提供）



森岡牧場牛舎の内部（昭和10年頃）



森岡牧場とその従業員（昭和13年頃）

Fig.99 森岡牧場の営業風景（森岡秀夫氏提供）

吉田町八丁目の地へと移転している。シナさんが虎夫氏と結婚したのは昭和5（1930）年1月で、シナさんの記憶によるとその頃には「森岡牧場」銘ガラス瓶を使用しており、「森岡虎夫」銘ガラス瓶は見たことがないとい。森岡牧場は軍の抜き打ち審査により優良であると認められ、昭和7（1932）年に陸軍御用達の牛乳屋となり主に陸軍病院へ納品をおこなっていたとい。昭和19（1944）年11月には陸軍に買い上げられ軍属となつた。それから昭和21（1946）年2月までは営業をおこなっていたが、土地は2万円で国に買い上げられたとい。

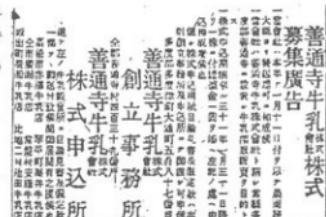
シナさんの記憶が正しければ、昭和5年以降は「森岡虎夫」銘ガラス瓶を使用していないということになり、大正時代末期～昭和4年8月までは経営者は森岡栄一氏であるため、「森岡虎夫」銘ガラス瓶を使用したとは考え難い。つまり、「森岡虎夫」銘ガラス瓶は、昭和4年8月～昭和5年1月のごく短い期間に製作使用された可能性が高いだろ。しかし、第14病棟の建設は昭和12（1937）年以降と伝えられるため、醤油を来すことになる。しかし、瓶自体は使用後に回収され何度も再使用されていたため、古い瓶を昭和12年以降にも使用していた可能性が高い。

当遺跡からは2点の「森岡虎夫」銘の牛乳瓶が出土しているが、デザインが微妙に異なっている。大きく異なるのは電話番号の箇所に数字表記のあるものとないものという点である。これは瓶がリサイクルされていく中で個数が減った段階で、その都度注文し補充したことが窺える。

### 3. 香川県牛乳協会について

今回の調査では香川県牛乳協会について、具体的に記載されている文献に接することはできなかつた。そこで、香川県下での搾乳業の歴史を概観し香川県牛乳協会がどのような組織であったかを推察する。

東京では明治4（1871）年頃には牛乳の販売がはじめられた。香川県下では明治30（1897）年に搾乳業が開始された。この翌年に善通寺市吉田に善通寺牛乳株式会社が創業されている。この時点では全国的にはすでにかなりの搾乳業者が存在しており、そのため衛生的見地から明治36（1903）年に牛乳営業取締規則が公布され搾乳販売業が許可制になつた。その後、大正時代に入ってから香川県下の搾乳業者の数は約50戸程度で推移していた。牛乳の需要が急増してきたために、大正2～14（1913～



善通寺牛乳株式会社 募集廣告  
明治30.12.16 [香川新報]

Fig.100 善通寺市における搾乳業の開始  
(善通寺市教育委員会  
市史編さん室編 1994より)

1925) 年にかけて産業組合合法に基づいて、各町村に牛乳販売組合が設立された。更にこれらの牛乳販売組合を統轄するため、昭和4年8月、高松市に香川県牛乳連合会が設立された（香川県農業史編纂委員会）。当遺跡出土牛乳瓶に見られる「香川県牛乳協会」は、恐らくこの香川県牛乳連合会の後身ではないかと考えられる。もしそうであるならば、聞き取りから得た昭和4年8月～昭和5年1月に「森岡虎夫」銘ガラス瓶が製作されたとするならば、昭和4年内に香川県牛乳連合会が名称変更して香川県牛乳協会になったか、別組織を設立したのではないだろうか。

#### 4. 西日本・遺跡出土の牛乳瓶と考古学的研究

関東地方では遺跡出土の牛乳について考古資料として取り扱われることが多いようである。具体的に牛乳瓶を対象にした考古学的研究も見られるようになってきた。しかし、西日本では牛乳瓶そのものが遺跡から出土しても提示される場合はまだ少ないようである。そこで、管見に触れた遺跡出土の牛乳瓶を図示し若干の検討を試みたい。

西日本で出土牛乳瓶が報告されているのは、福岡県築上郡篠城町広末・安永遺跡例、兵庫県神戸市ハーバーランド遺跡例、東川崎町一丁目遺跡例、明石市明石城武家屋敷跡例、伊丹市有岡城跡伊丹郷町遺跡例の5遺跡からである。

西日本での牛乳瓶の考古学的研究は神戸ハーバーランド遺跡出土資料の報告書中でおこなわれた。ここでは、瓶の口縁部形態に注目し分類・編年を試みられている（山上ほか 1987）。以下、要約して紹介しておく。1口縁部形態の変化は蓋の仕方のとが変化に起因する。わが国で牛乳瓶が登場するのは、明治中頃一大正初めにかけてのことである。当初は、瓶口にコルク栓や薄紙を丸めたものを詰めたり、陶器式口金の栓を針金で固定したなどを使用した。大正の中頃には金属製の栓（王冠栓）をしたもののが登場する。旧練兵場遺跡出土資料はこのタイプのものである。戦後は広い1の瓶に紙栓をしたものが登場する。牛乳は戦後には戦前の薬用・強壮剤という意識から飲料水という意識へと変化し、需要が拡大した。これに伴って瓶の洗浄も大きな工場で大型の機械を使っておこなわれるようになり、文字を陽刻した瓶は互いに擦れて文字が消えたり、瓶の割れる原因になるため使用されなくなる。その後は、現在のような表面にプリントされたものが主流である。

牛乳瓶と病院の関係性は東京都沙留遺跡でも窺える。沙留遺跡からは、牛乳瓶の他に薬瓶も多く出土しており「鐵道病院」銘と陽刻されたものが含まれる。これは駅構内にあった鐵道病院で使用されたものと考えられる。当遺跡の事例を含めて廃棄の状況からではあるが、今後牛乳瓶と病院施設との有機的な関係が推定できそうである。牛乳瓶の編年をおこなう場合には、瓶の器形、陽刻、口縁形態、ガラスの色調などがメルクマールである。しかし、病院出土資料については、器形、陽刻などは古いタイプであるのに、1は王冠栓となっているものが多い可能性がある。これは公的病院等に牛乳を納品する牛乳屋に何らかの補助が下り、王冠栓が導入されたためと思われる。

当遺跡出土例のように店舗名ではなく個人名を陽刻した事例は関東の事例でも見いだすことができなかった。しかし、近代化の過程で個人名をそのまま店舗に冠する場合はよく見られることである。生産者名を表示するのではなく、品質保証のために生産者名を商品にいれるような試み・感覚に類似していることも興味深いだろう。



Fig.101 西日本の出土牛乳瓶

- 1-3・13 東川崎町1丁目遺跡
- 4-12 神戸ハーバーランド遺跡
- 14 明石武家屋敷跡、15 広末・安永遺跡
- 16 有岡城跡・伊丹郷町

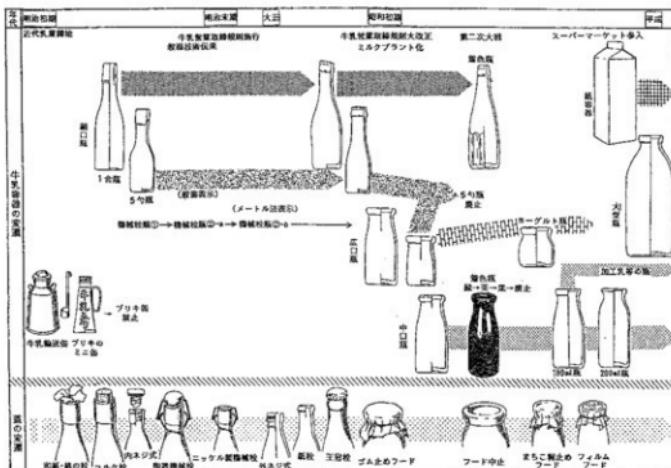


Fig.102 牛乳容器の変遷(知久 1996より)

### 5. 小結

今回、取り扱った時代資料はまだまだ考古学では異端である。オーソドックスな考古学の「学」としてのスタイルは、過去の社会及び集団の復元であり、「モノ」から個人を離ることはタブー視されている観もある。しかし、民具研究や民俗学研究においては個人への聞き取りなどの調査によって個人から「モノ」の情報を引き出す場合も多々ある。確かにプライバシーや人権を侵害する可能性もあり、慎重に議論することが必要である。しかし、近現代における「モノ」の生産・消費という観点で物質文化を研究していく上では、実際に生産・消費に関わった「ヒト」の証言は相当な情報を有している。今回対象とした牛乳瓶についても、当時の関係者による証言がかなり問題解決の契機になったことは確実である。つまり「モノ」から個人・大衆の縁を浮かび上がせることも一つの考古学の可能性ではないか。しかし、ただ無神経に調査を行うのではなく、近現代考古学において対象とする考古資料についての、聞き取りという作業に一定の方法や規則を設ける必要があるのではないか。この問題に関してはいずれ場所を改めて私見を述べてみたい。

#### 【註】

- i) 「苟」とはデシリットルのことである。

#### 【引用・参考文献】

- 赤松和也 1997 「有間城跡・伊丹郷町」 V 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史料研究室  
 秋岡礼子・草柳悦正ほか 1999 「信濃町遺跡」 創価学会・新宿区信濃町遺跡調査隊  
 五十嵐彰・阪本宏紀 1996 「近現代考古学の現状と課題」『考古学研究』43-2 考古学研究会  
 伊東 幸 2000 『日本の近代化遺産』 岩波書店  
 小田和利 1991 「推出バイバス開閉埋設文化財調査報告書」 5 福岡県教育委員会  
 香川県農業史編纂委員会編 1977 『香川県農業史』 香川県農業改良普及企  
 業団体 1990 『ミルク色の残像—東京の牧場展—』 豊島区立郷土資料館

- 小島正裕ほか 1997『沙留遺跡』 東京都埋蔵文化財センター
- 小島正裕ほか 2000『沙留遺跡』Ⅱ 東京都埋蔵文化財センター
- 桜井準也 2000「近代遺物の表象」「メタ・アーカエオロジー」2 メタ・アーカエオロジー研究会
- 桜井準也・岩崎卓哉 2000「池子浅敷遺跡(滋賀市No100)出土の近現代遺物について」「池子浅敷戸遺跡発掘調査報告書」 東国歴史考古学研究所
- 内山聰一郎 2000「文化」財の政治性』『元興寺文化財研究』75 (財)元興寺文化財研究所
- 善通寺市教育委員会市史編さん部編 1994『善通寺市』3 善通寺市
- 鹿尾 亨総 1990『牛乳・乳製品の実際知識』 東洋経済新報社
- 知久洋子 1996「考案」「赤砂利道路」「白岡町道路調査会
- 筑野 修 1994「東川崎町1丁目遺跡」 神戸ハーバーランド遺跡調査団
- 山上雅弘ほか 1987『神戸ハーバーランド遺跡』 兵庫県教育委員会
- 山下史綱ほか 1996『明石城武家屋敷跡』 兵庫県教育委員会



Fig.103 検出透構略測図 (1/300)

Tab.4-1 旧跡兵場遺跡遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区
1	SD001	道路	発生中期後半～後期前半の遺物を多く含む。	
2	SD002	カクラン	練兵場期の建物にともなう剣柄か？（練兵場期のもの）	A2 B3～B5
3	SD003	カクラン	練兵場期の建物と思われる。（練兵場期のもの）	C7, 8 D8
4		柱穴	径20, 程度のもの。埋土は灰茶土。	D7
5	SD005	道路		
6		柱穴	径30, 程度のもの。埋土は灰茶土。	D5
7		柱穴	径25, 程度のもの。埋土は灰茶土。	D7
8		柱穴	不整形の遺構（トレンチ外に広がる）。埋土は灰茶土。	D6 F5
9		柱穴	最大径50, 程度の不整形のもの。	E5
10		柱穴	径30, 程度のものと径20, 程度のものが結合したような形をする。 埋土は灰茶土。	F5
11	SB011	建物	練兵場期の建物と思われる。埋土は淡黄褐色。	J5 K5
12	SB012	建物	練兵場期の建物と思われる。埋土は淡黄褐色。	K3 K4
13	SB013	建物	練兵場期の建物と思われる。埋土は淡黄褐色。	K2 L2 K1
14	SX014	石組遺構	練兵場期の建物に付随する施設の跡か？	K7
15	SB015	建物	練兵場期の建物と思われる。埋土は淡黄褐色。	M1, 2, 3 N4
16	SB115a	柱穴	S-14.22とともに旁生の獨立性建物を構成するとと思われる。 S-14.22とともに旁生の獨立性建物を構成するとと思われる。	G6
17		柱穴	径20, 程度のもの。	G5
18		柱穴	径30, 程度のもの。	G5
19	SB115b	柱穴	最大長90, 程度、底には岩が出土。S-16.22とともに独立性建物を構成。	G5
20	SD020	溝	黒褐色壁、土留多く含む。S-005を切る。	N2 O3 P3
21		柱穴	最大径50, 程度の不整形の遺構。	G5
22	SB115c	柱穴	最大深80, 程度の横円形でS-16.19とともに独立性建物を構成。	H5
23	SK023	土坑	構丸長方形の土坑。	G5
24		柱穴	径30, 程度のもの。S-14から伸びる溝に切られる。	G5
25		柱穴	径30, 程度のもの。	I5, 6
26		柱穴	径10, 程度の小さなもの。	G5
27		柱穴	径20, 程度のもの。	F5
28		土坑	径60, 程度の横円状の土坑。カクランに切られる。	G, H5
29		柱穴	径30, 程度になると思われるもの。トレンチ外に及ぶ。	J7
30		柱穴	径20, 程度のもの。	J7
31		落ち込み	トレンチ外に及ぶ。	K8
32		建物	練兵場期の建物。柱穴はa～cの3つ。	K6 J7 J8
33		建物	練兵場期の建物の一端と思われる。柱穴はa,bとその間に1つある。	P5
34		柱穴	径20, 程度のもの。	F5
35		柱穴	最大径30, 程度の横円形のもの。	F5
36	SK036	土坑	離段く伸びる土坑である。	R4
37		建物	練兵場期の建物と思われる。埋土は淡黄褐色。	Q2 R2, 13 U3 V3 W3
38		土坑	最大長60, 程度の不整形な遺構。	P2
39		柱穴	S-61とともに鍔部を構成するとと思われる。	P1
40		柱穴	最大径40, の横円状の遺構。	P2
41		柱穴	埋土は黒褐色土。	Q2
42		柱穴	埋土は黒褐色土。	Q3
43	SK043	柱穴	弥生土器を含む。	Q1
44	SIH044	柱脚跡	弥生後期の土器含む。圓丸方形、ガラス玉3点出土。	QRT1
45	SK045	土坑	弥生後期の土器含む。埋土は黒褐色土。	P3, 4
46	SK046	土坑	細長い土坑である。	Q3 R3
47		柱穴	S-46を切る長軸60, の構丸形のもの。	R3
48	SK048	土坑	L字に折れ曲がった土坑でわざかに土器が出土。	R2 T2
49	SK049	土坑	埋土は灰褐色土。	R3 T3
50	SD050	獨立柱建物	2×1間、柱穴a～d。	R5, 6 T5, 6
51	SK051	土坑	細長い土坑である。	T5 U5 U4
52	SK052	土坑	縫をいくらか含む。	V2, 3
53	SK053	土坑	底から土器が出土している。	V5 W5 W-1
54		獨立柱建物	練兵場期とは違う初期の新しい建物か？柱穴はa～d。	Q1 T1 U1 V1
55	SK055	土坑	尚大き1m80, の構丸方形の土坑。	U1, 2
56		柱穴	径15, 程度の小さなもの。	P2
57		柱穴	径15, 程度の小さなもの。	P2
58		柱穴	径15, 程度の小さなもの。	P3
59		柱穴	径15, 程度の小さなもの。	Q3
60		柱穴	径15, 程度の小さなもの。	Q3
61		柱穴	S-39とともに建物を構成するとと思われる。	O1
62		柱穴	径30, 程度のもの。	O1
63		柱穴	径15, 程度の小さなもの。	R3

Tab.4-2 山神兵場遺跡遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	
64	柱穴	径50,程度のもの。	T4		
65	柱穴	径15,程度の小さなものの。	V4		
66	柱穴	径30,程度のもの。	U4		
67	柱穴	径20程度のものでS-37の建物の柱穴と思われる。	V2		
68	柱穴	径30,程度のもの。	T7		
69	(籠立柱) 建物	柱穴はa,bの2つ。トレンチに及ぶ。堅穴住居の可能性もある。	V13 W13		
70	籠立柱建物	柱穴はa,bの2つ。トレンチに及ぶ。	V14		
71	籠立柱建物	柱穴はa,b,c,dの4つ。トレンチに及ぶ。	V13, 14 W14		
72	籠立柱建物	柱穴はa,bの2つ。トレンチに及ぶ。	W14 V14		
73	柱穴	柱穴間に石が入っている。	V13		
74	柱穴	径35,程度のもの。	V14 W14		
75	柱穴	最大長60,程度の楕円状の遺構。	V14		
76	柱穴?	トレンチ外に及ぶため詳細は不明。	W14		
77	SK077	土坑	S-5内にあり、数多くの土器を含んでいる。	G1・2, H1・2, II・2	
78	柱穴	径15,程度のもの。	R2		
79	柱穴	径30,程度のもの。	IV5		
80	溝	非常に浅い溝で中から須恵器片が1片だけ出土している。	N4~6, O1~5, P1		
81	SK081	土塙	赤生土器、縄を含む。	I6	
82	柱穴	径15,程度の小さなものの。	T5		
83	柱穴?	最大長40,程度の細長い遺構。	U5		
84	柱穴	径15,程度の小さなものの。	V5		
85	柱穴	径30,程度の楕丸形のもの。	U4		
86	柱穴	径25,程度のもの。	U4		
87	柱穴	径15,程度のもの。	P3		
88	SK088	柱穴	S-46に切られる。径40,程度の楕丸形のもの。	Q3	
89	SK089	深い落ち込み	非常に深い円形の落ち込み、底から甌の底と思われる土器出土。	O4 P4 Q3 P3	
90	柱穴	最大径40,程度の楕円形のもの。	P2		
91	柱穴	篠山場塙の建物の柱穴となる可能性がある。	O2		
92	柱穴	最大径50,程度のもの。	P2		
93	建物	S-15.37とともに1つの建物となる可能性あり。	P4 Q5		
94	柱穴	S-92の南側にあり最大50,程度の不整形のもの。	P2		
95	SK095	土坑	L字状にゆるく曲がっている。	R2	
96	溝	S-95に切られる土器を若干含む遺構。	Q1 Q2 R2		
97	柱穴	径30,程度のものでS-95に切られる。	K2		
98	柱穴	径20,程度のもの。	P3		
99	柱穴	径30,程度のもの。	P3		
100	SK100	土坑	S-48がL字に曲がる可能性あり。	T2	
101	土塙	径70,程度の楕丸形の土塙。	Q2		
102	建物	ピットa, S-67の遺物を構成する可能性がある。	U2 V2		
103	SK103	土坑	後土塊が多く出土している。	H3	
104	SK104	土坑	後土塊が出土している。	Q3, 4	
105	SK105	柱穴	後土塊が出土している。	Q5, 6	
106	柱穴?	径10,程度の小さなものの。	Q5		
107	SK107	土坑		Q5	
108	SK108	土塙	廻の口様部～頸部が出土している。	M2	
109	柱穴	S-96の中にある。	R2		
110	SK110	土坑	S-44を切る遺構でトレンチ外に及ぶ。	I0	
111	柱穴	S-51のすぐ隣にある遺構である。	T5		
112	SK112	土坑	底から石,土器が多く出土している。トレンチ外に及ぶ。	N1	
113	柱穴	S-110の底から検出された遺構である。			
114		S-112と同じもの。			
115	SB115	籠立柱建物	a (S-16), b (S-19), c (S-22) の柱穴3つ。トレンチ外に及ぶ。 本來はS-44ピットbにあてていたS番号である	G5, 6 IS	
116	SK116	土坑	深い落ち込み形状の土坑。	NO2	
117	SH117	住居跡	円形住居。	R0	
118	溝	落ち込みか?	B2		
119	溝	住居の構造か?	Y0		
120	SK120	溝	住居の周横か?	R0	
121	柱穴		R0		
122	溝	神事場跡のものか?	W13		
123	建物	神事場跡のものか?	W13, 14		
124	SH124	住居跡	楕丸形, S-125, 126に切られる。	W14	
125	SH125	住居跡	方形, S-126に切られる。	W14	
126	SH126	住居跡	S-124, 125を切る。	W15	
127	柱穴	径30,程度のもの。S-120よりも新しい。	R0		

Tab.5-1 旧練兵場遺跡出土遺物一覽表(1)

## SD001黒褐色土層

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高环、鉢、鬱台、支脚 有孔土器
土製品	匙、杓子形土製品、円盤土製品
石器	有肩石錐、敲石、凹石、甌石 楔形石器、石錐、石標、石錐 スクレイパー、打製石庖丁、剥片 石核、鉗片、被熟石

## SD005黒灰色土層

種別	器種
弥生土器	壺、甕、鉢、有孔土器
土製品	円盤土製品
石器	甌石、打製石斧、スクレイパー 石錐、楔形石器、剥片、石核、鉗片

## SD001暗黒褐色土層

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高环、有孔土器
土製品	円盤土製品
石器	甌石、打製石斧、スクレイパー 石錐、楔形石器、剥片、石核、鉗片

## S-6

種別	器種
弥生土器	鉗片

## S-7

種別	器種
石器	剥片、鉗片

## S-8

種別	器種
弥生土器	鉗片

## S-9

種別	器種
弥生土器	鉗片

## SD001灰白色土層

種別	器種
石器	石錐(2点)

## S-10

種別	器種
弥生土器	壺、甕

## SD002

種別	器種
弥生土器	壺、甕

## SB011

種別	器種
弥生土器	壺、甕

## SD005黒褐色土層

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高环、鉢、支脚、鬱台 有孔土器
土製品	円盤土製品、ミニチュア 分刷形土製品
石器	石錐、甌石、磨製石斧、被熟石 石錐、石標、スクレイパー、石錐 打製石庖丁、楔形石器、剥片 石核、鉗片

## SB012

種別	器種
弥生土器	壺、甕

## SB013

種別	器種
弥生土器	壺、甕
漆器	鉗片、鉗片
ガラス	薬瓶(5本)
染付	プリントもの(1点)
動物遺体	貝殻(2点)

## SD005暗黒褐色土層

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高环、鉢、鉢
土製品	土玉(2点)、ミニチュア 匙・杓子形土製品、分刷形土製品 燒土
石器	石錐、スクレイパー、楔形石器 打製石庖丁、石錐、磨製石斧、剥片 石核、鉗片

## SK014

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	鉗片、鉗片
ガラス	薬瓶(5本)
染付	プリントもの(1点)
動物遺体	貝殻(2点)

Tab.5-2 旧練兵場遺跡出土遺物・寃表 (2)

SB015

種別	器種
弥生土器	壺、甌
石器	スクレイパー

SB115a

種別	器種
石器	剥片、碎片

S-17

種別	器種
石器	剥片、碎片

S-18

種別	器種
弥生土器	細片

SB115b

種別	器種
弥生土器	壺、甌
石器	剥片、碎片

SD020

種別	器種
弥生土器	壺、甌、高环
石器	剥片、碎片
金属器	鐵器片(1点)

S-21

種別	器種
弥生土器	壺、細片
石器	剥片、碎片
国產陶器	衛前(2点)、錐(1点)、京燒(1点)
瓦	細片(1点)

SB115c

種別	器種
弥生土器	細片

SK023

種別	器種
石器	石鏟

S-24

種別	器種
弥生土器	壺(1点)

S-25

種別	器種
弥生土器	細片

S-26

種別	器種
弥生土器	細片

S-27

種別	器種
弥生土器	細片

S-29

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剥片、碎片

S-30

種別	器種
弥生土器	細片

S-31

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剥片、碎片

S-32

種別	器種
----	----

S-33

種別	器種
----	----

S-35

種別	器種
----	----

SK036

種別	器種
----	----

S-37

種別	器種
----	----

S-38

種別	器種
----	----

S-39

種別	器種
----	----

S-41

種別	器種
----	----

Tab.5-3 田舎兵場遺跡出土遺物一覧表(3)

S-42

種別	器種
弥生土器	縦片
石器	剥片、碎片

SK043

種別	器種
弥生土器	壺
石器	剥片、碎片

SK044

種別	器種
弥生土器	壺、甕、鉢
石器	スクレイパー、石鏟、剥片、碎片
ガラス	玉(23点)
骨	歯骨

SK045

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高杯、台付鉢
石器	打製石磨下、石擦、スクレイパー 被熱石、剥片、石核、碎片

SK046

種別	器種
弥生土器	壺、甕

S-47

種別	器種
弥生土器	縦片

SK048

種別	器種
弥生土器	壺、甕、支脚

SK049

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高杯
石器	剥片、碎片

SB050

種別	器種
弥生土器	縦片
石器	剥片、碎片

SK051

種別	器種
弥生土器	縦片、鉢(底部)、甕(底部)

SK052

種別	器種
弥生土器	縦片

SK053

種別	器種
弥生土器	壺、甕、鉢、支脚
土製品	玉(1点)
石器	剥片、碎片

S-54

種別	器種
弥生土器	縦片
金属器	針

SK055

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高杯

S-56

種別	器種
弥生土器	縦片

S-57

種別	器種
弥生土器	縦片

S-58

種別	器種
弥生土器	縦片

S-61

種別	器種
弥生土器	高杯(1点)、縦片

S-64

種別	器種
弥生土器	縦片

S-65

種別	器種
弥生土器	縦片

S-66

種別	器種
弥生土器	縦片

S-67

種別	器種
弥生土器	縦片

S-70

種別	器種
弥生土器	縦片

Tab.5-4 川神兵場遺跡出土遺物一覧表 (4)

S-71

種別	器種
弥生土器	壺

S-72

種別	器種
弥生土器	細片

S-73

種別	器種
弥生土器	高杯、細片

S-75

種別	器種
弥生土器	細片

S-76

種別	器種
弥生土器	細片

SK077

種別	器種
弥生土器	壺、甕、点坏、鬱台、钵、支脚
石器	打製石底丁、スクレイバー、砾石 敲击石、凹石、剥片

S-78

種別	器種
弥生土器	細片

S-79

種別	器種
弥生土器	細片

S-80

種別	器種
須恵器	細片

SK081

種別	器種
弥生土器	壺、甕

S-82

種別	器種
弥生土器	細片

S-83

種別	器種
弥生土器	細片

S-84

種別	器種
弥生土器	細片

S-85

種別	器種
弥生土器	細片

S-86

種別	器種
弥生土器	細片

S-87

種別	器種
----	----

SK088

種別	器種
----	----

SK089

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	剥片、碎片

S-91

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剥片、碎片

S-92

種別	器種
----	----

S-93

種別	器種
----	----

S-94

種別	器種
----	----

SK095

種別	器種
----	----

S-96

種別	器種
----	----

Tab.5-5 旧練兵場遺跡出土遺物一覧表 (5)

S-97

種別	器種
弥生土器	細片

S-98

種別	器種
弥生土器	細片
石器	石鏃

S-99

種別	器種
弥生土器	細片

SK100

種別	器種
弥生土器	細片
石器	敲石

S-101

種別	器種
弥生土器	細片

SK103

種別	器種
土製品	燒土

SK104

種別	器種
土製品	燒土
ガラス	玉

SK105

種別	器種
弥生土器	細片
土製品	燒土

SK108

種別	器種
弥生土器	壺(1点)

SK110

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剥片、碎片

S-111

種別	器種
弥生土器	細片

SK112

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	剥片、碎片

S-113

種別	器種
弥生土器	細片

SB115

種別	器種
弥生土器	細片
土製品	燒土
石器	剝片、碎片

S-114

種別	器種
弥生土器	細片

SB115

種別	器種
弥生土器	細片
石器	剝片、碎片
ガラス	玉(1点)

SK116

種別	器種
弥生土器	壺、細片

SH117

種別	器種
石器	剝片、碎片

S-118

種別	器種
弥生土器	細片

S-119

種別	器種
弥生土器	細片

SK120

種別	器種
弥生土器	壺、細片

S-121

種別	器種
弥生土器	細片

S-123

種別	器種
弥生土器	細片

SH124

種別	器種
弥生土器	細片
金属器	アース(1体)

Tab.5-6 Ⅱ練兵場遺跡出土遺物一覧表(6)

SH125

種別	器種
弥生土器	細片

SH126

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	剝片、碎片

S-127

種別	器種
弥生土器	細片

灰青灰色土層

種別	器種
弥生土器	壺、甕
石器	スクレイパー(2点)、剝片、碎片

黄褐色シルト層

種別	器種
石器	大型始刀石斧

灰茶色土層

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高环、支脚
漁網器	甕、环

灰黃色土層

種別	器種
ガラス	牛乳瓶(2本)、瓶(1本)

表土

種別	器種
弥生土器	壺、甕、高环
漁網器	环
国產陶磁器	梅

表様

種別	器種
漁網器	細片
国產細器	軍用食器(2点)
瓦	軒丸(1点)

## 報告書抄録

ふりがな	きゅうれんべいじょういせき						
書名	旧練兵場遺跡						
副書名	市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	笛川龍一、狭川真一、角南聰一郎、田部剛士						
編集機関	1) 善通寺市建設経済部建築課 2) (財)元興寺文化財研究所						
所在地	1) 〒765-8503 香川県善通寺市文京町2丁目1番1号 2) 〒630-8392 奈良県奈良市中院町11番地 Tel 0742-23-1376						
発行年月日	平成13(2001)年1月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査起因
きゅうれんべいじょう 旧練兵場遺跡	かがわけん 香川県 ぜんつうじし 善通寺市 にせんゆうちょう 西仙遊町	204 41	25度 8分 20秒	136度 2分 30秒	2000 ~ 2000 0920	1068m <sup>2</sup>	住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
旧練兵場遺跡	集落	弥生時代 近代	竪穴住居跡 掘立柱建物 溝 土坑 掘立柱建物	弥生土器、石器、分離形土製品 匙・杓子形土製品、ガラス小玉 軍用食器、牛乳瓶	竪穴住居跡からガラス 小玉が23点出土 明治期と考えられる 陸軍病院病棟		

## 写真図版



調査地周辺の航空写真

Pla.1



調査地全景（東から）

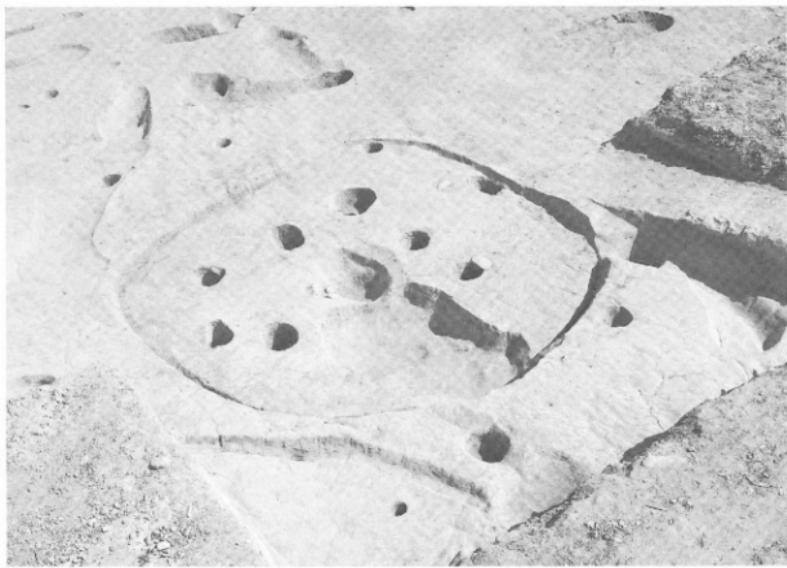


調査地全景（西から）

Pla.2



北東調査区全景（東から）



SH044検出状況（南から）

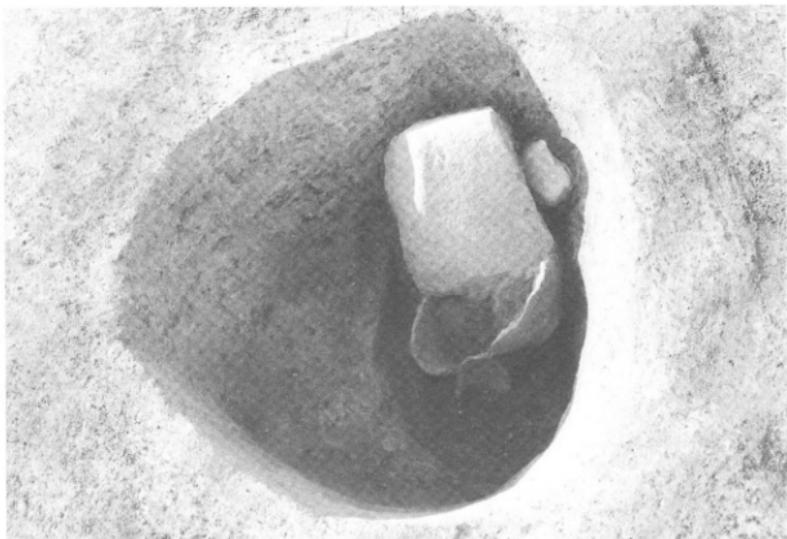


SH044検出状況（東から）

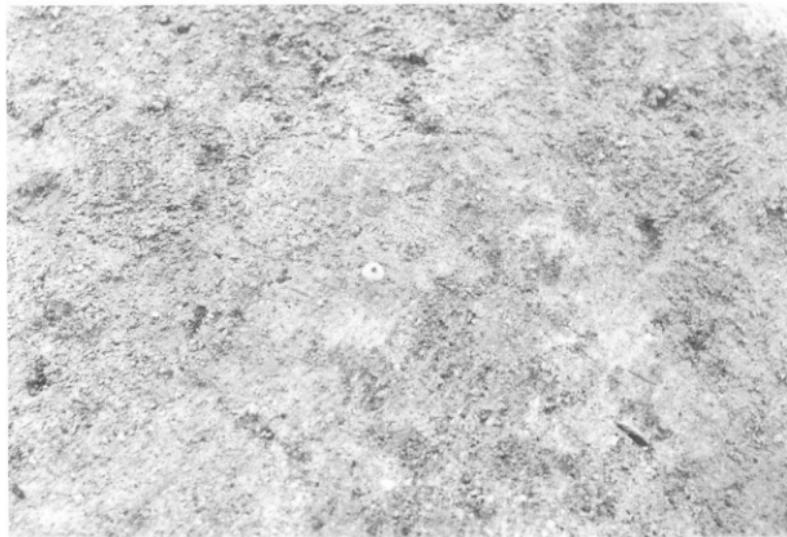


SH044検中央土坑遺物検出状況（北から）

Pla.4



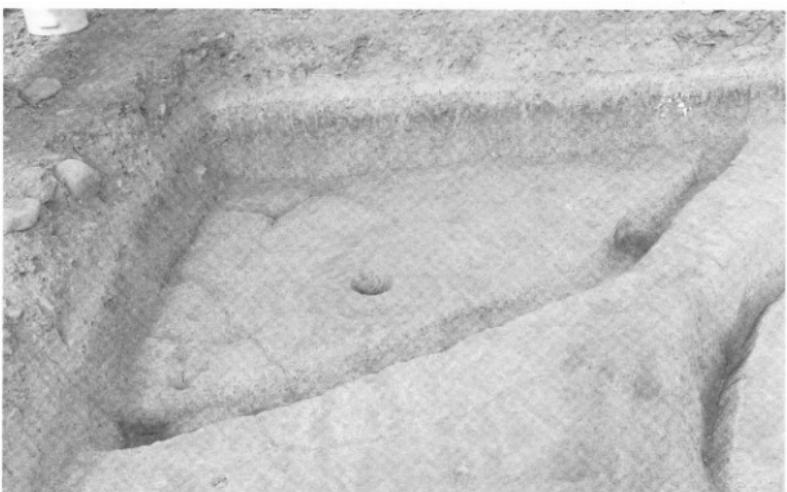
SH044柱穴D遺物出土状況（北から）



SH044ガラス小玉20出土状況（東から）

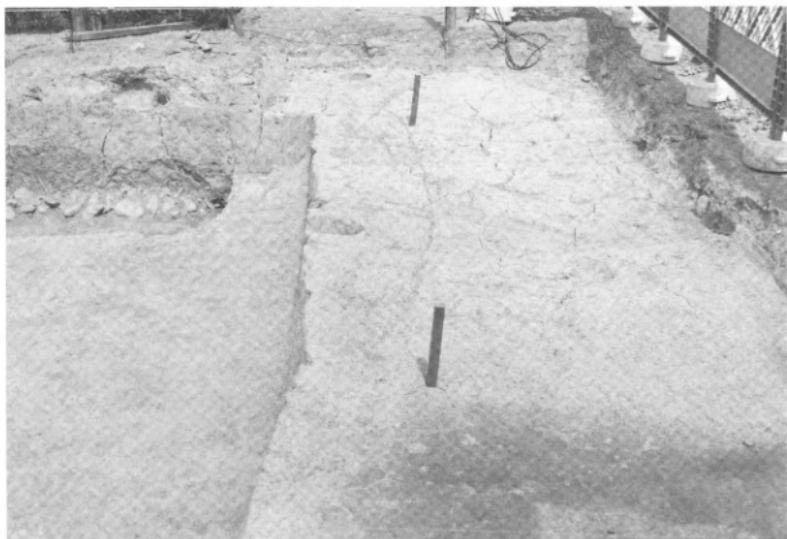


SH044石器33出土状況（西から）



SH117検出状況（東から）

Pla.6



SH124・SH125・SH126検出状況（南から）



SB115柱穴B（東から）